〔五年三月十二日第三種郵便物認可〕
明治三十五年五月五日發兌

# 女鑑

第貳百五拾貳號

# 女鑑第貳百五拾貳號

## 目録



## 社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事

○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事

○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事

○未納稅の來書は一切受取り申さゞる事

**定價**

- 一冊 金拾錢
- 六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
- 十二冊半年分 前金壹圓拾錢
- 廿四冊一年分 前金貳圓四拾錢
- 全國無郵送料

**廣告料**

- 五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
- 半頁 金八圓
- 一頁 金拾貳圓
- 表紙一頁 金拾六圓

色刷は特に御相談に應ず


明治三十五年五月四日印刷
明治三十五年五月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木頁雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

堀内新泉子著

# 少女讀本　花の巻

大和綴美本　全三册
定價各拾八錢
郵税各四錢

さきに本社より『家庭の鑑』を出して廣く江湖の喝采を博し、次に開發社より『家庭讀本』春、夏、秋、冬の四册を出して、近來の出版物中に實に稀有なる世の賞讃を博し得たる堀内新泉子は、今また本社より『少女讀本』雪、月、花の三册を出して、廣く世の教育家諸君に向つて問ふ所あらんとす。子が着想の如何に高潔多趣味にして、その着筆の如何に穩健優雅なるかは、已に讀者の熟知せらるゝ所なれば、本社は重ねて此に贅せず。唯、本社は讀者に告ぐ。從來『少年讀本』の著作は、已に數十種ありと雖も、獨り『少女讀本』に至りては、未だ世間にこれあるを見ず。家庭に並び學校に於ても、この種の著作の世に出でんとは兼て渇望せられしならんが、今日初めて本書を以て、廣く江湖の需用に應じ得るは、著者と本社との聊か自負する所なりとす。家庭の讀本として、將又、學校の賞與品として、續々購求の榮を賜はらんことを。今『花の巻』の目次を左に

小松宮彰仁親王殿下題辭　内務大臣内海男爵題辭
前内務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭　内務大臣官房編纂

# 明治國民龜鑑

定價金貳圓豫約價壹圓參拾錢期限後は定價に復す

## 豫約出版廣告

本書は明治十四年發布の褒章條例により紅綬綠綬藍綬の褒章を賜はり其善行を表彰せられたる者の傳記にて之が編纂の任に當れるは我文學界に名聲高き文學士大町桂月君ゆゑ字句流麗文章平易毫も艱澁難解のことあく敍寫傳神の妙を極めたれば、孝子順孫、節婦義僕を始め、一身の利害を顧みず專ら力を公同の事業に致し、若くは實業の發達を圖れる有志家、及び萬死を冐して他人の生命を救助せる義侠者等の面目鬚眉躍如として紙上に現れ、其志氣節操、義烈の行爲を眼前に見るの思あらしむ、實に國民必讀の要書なり、本社今回原本の御下附を請ひ得て精巧の活版に附し總傍假名を附して婦女童幼にも讀易からしめんことを勉め、極めて廉價を以て豫約販賣することゝせり、大方の諸君速に御申込あらん事を乞ふ。（見本は各官衙町村役場學校等にあり）

## 注意

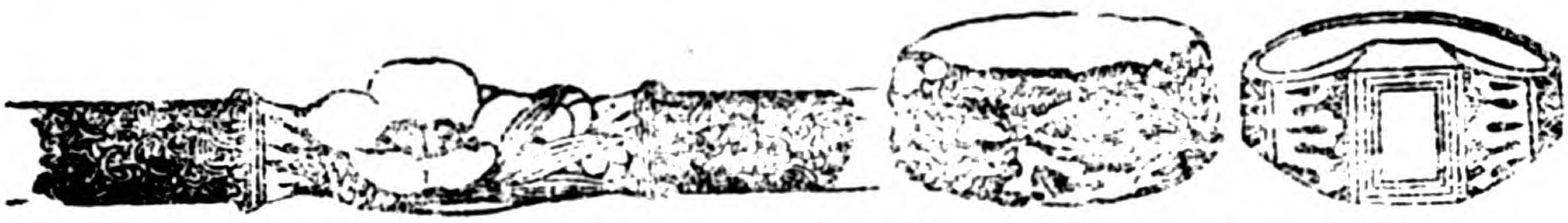
●受賞者肖像寫眞銅版及受賞者行狀密書木板數拾枚挿入●菊判五號活字總振假名大和綴●紙數凡九百頁●申込の際豫約價の半額を拂込むものとす●諸官廳郡市役所町村役場諸學校等公印押捺申込の分及褒賞佩用者は豫約前金に及ばず●申込期限は五月三十一日迄●出來期日六月三十日●同日迄に豫約代金全額を拂込みたるものより順次發送す

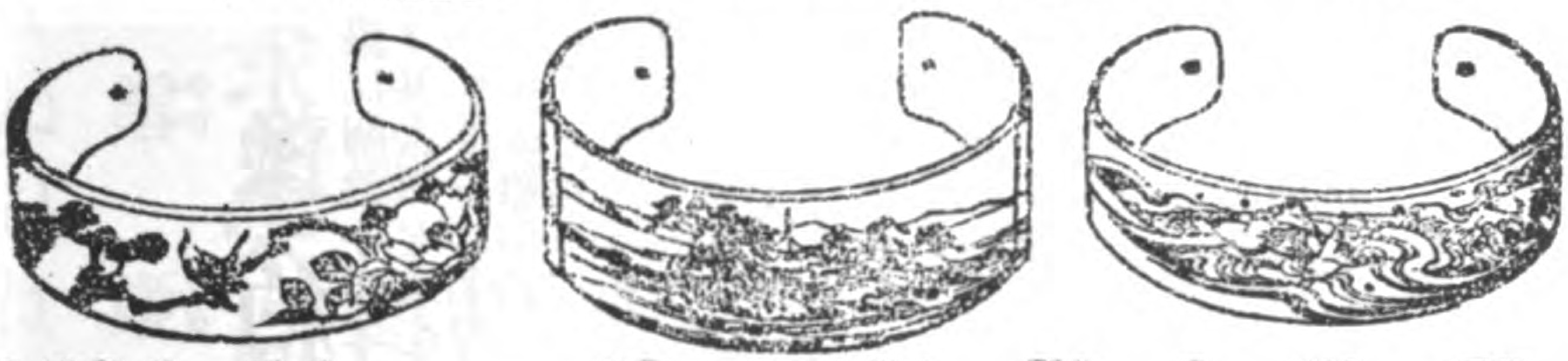
豫約申込所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八　新橋二六九三　株式會社國光社出版部

# 吉沼製作品









## 金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價十六圓
乙價十四圓
●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價廿二圓
乙價十九圓
●廿金三匁付海肉彫刻付
甲價廿六圓
乙價廿三圓
●廿二金三匁五分海肉象嵌彫刻
甲價卅四圓
乙價廿九圓
●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價卅六圓
乙價卅一圓
●廿二金三匁五分厚象嵌彫刻
甲價卅八圓
乙價卅二圓
●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價二百五十圓
乙價百八十圓
丙價百三十圓
丁價九十五圓
戊價六十圓
巳價五十圓
●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢
●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢
●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形狀ノ異ルニ依リ價格ニ差アリ

## 金製帶止

●十八金製高彫極珍[illegible]付
甲價卅五圓
乙價三十一圓
丙價廿七圓
丁價廿三圓
戊價十九圓
巳價十六圓

## 金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價十一圓
乙價九圓三十錢
●廿金二匁付片切彫刻
甲價十四圓五十錢
乙價十二圓五十錢
●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價十九圓
乙價十七圓
●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價廿圓
乙價十七圓五十錢
●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片切彫刻付
甲價廿三圓
乙價廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

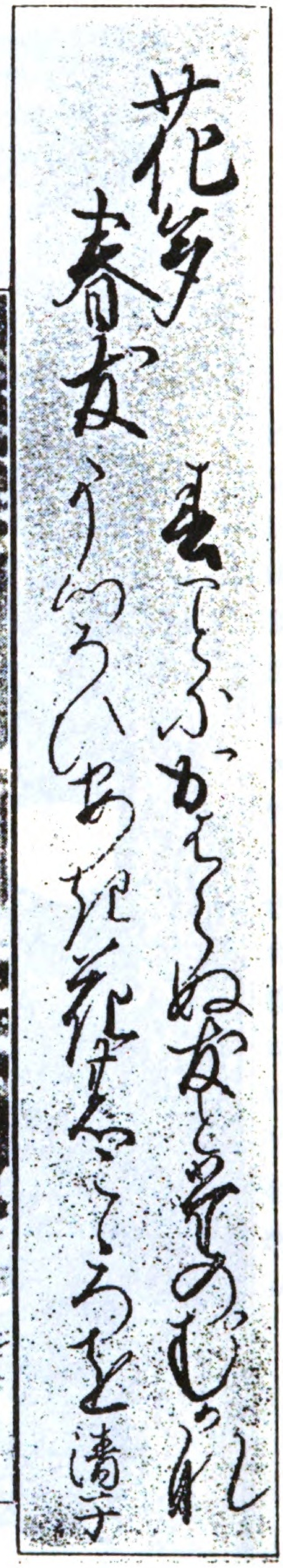
右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精麤により代價に高低の品種々あり

# 時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

## 吉沼又右衞門

電話本局三十三番
長距離電話接續

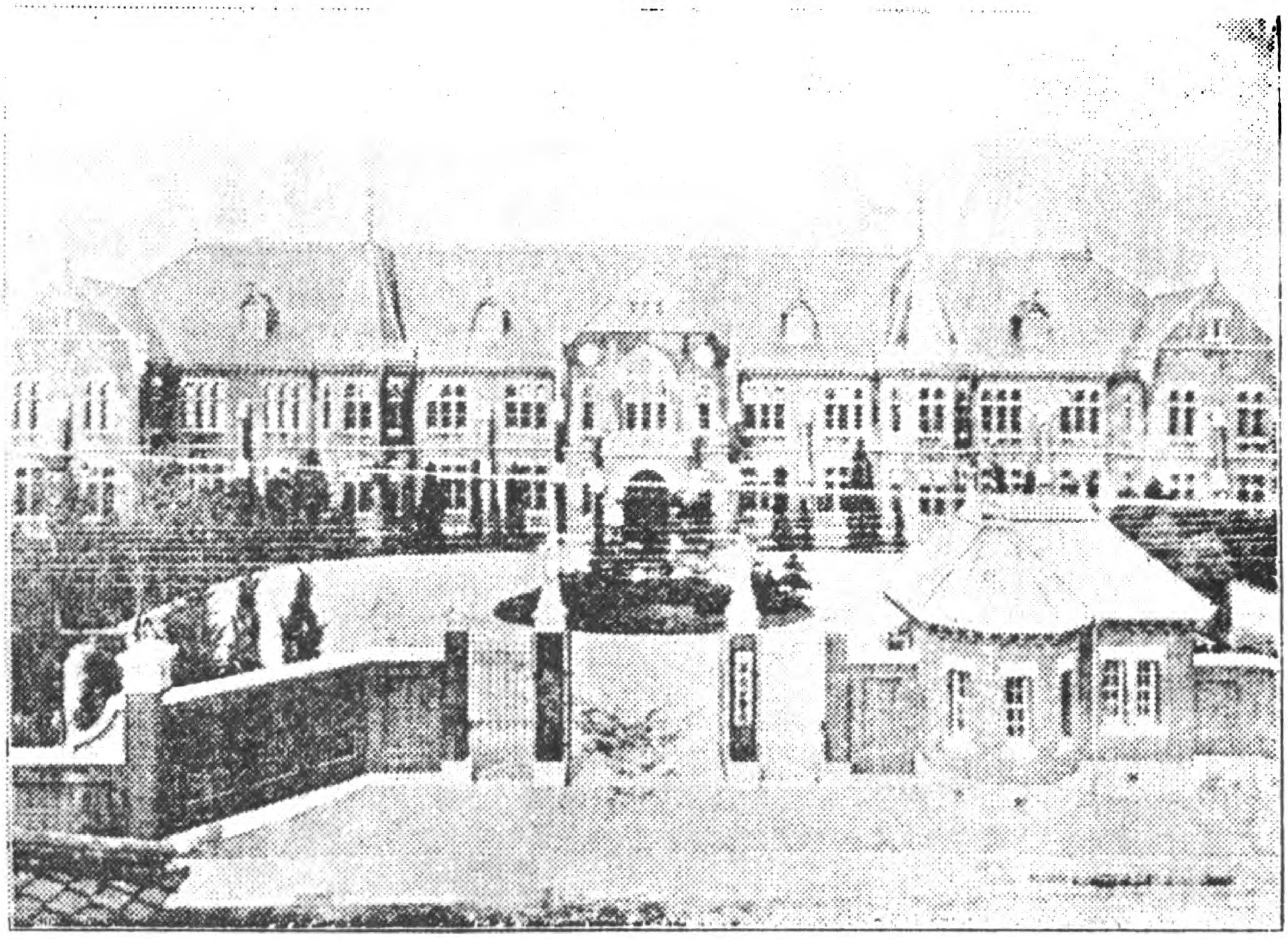




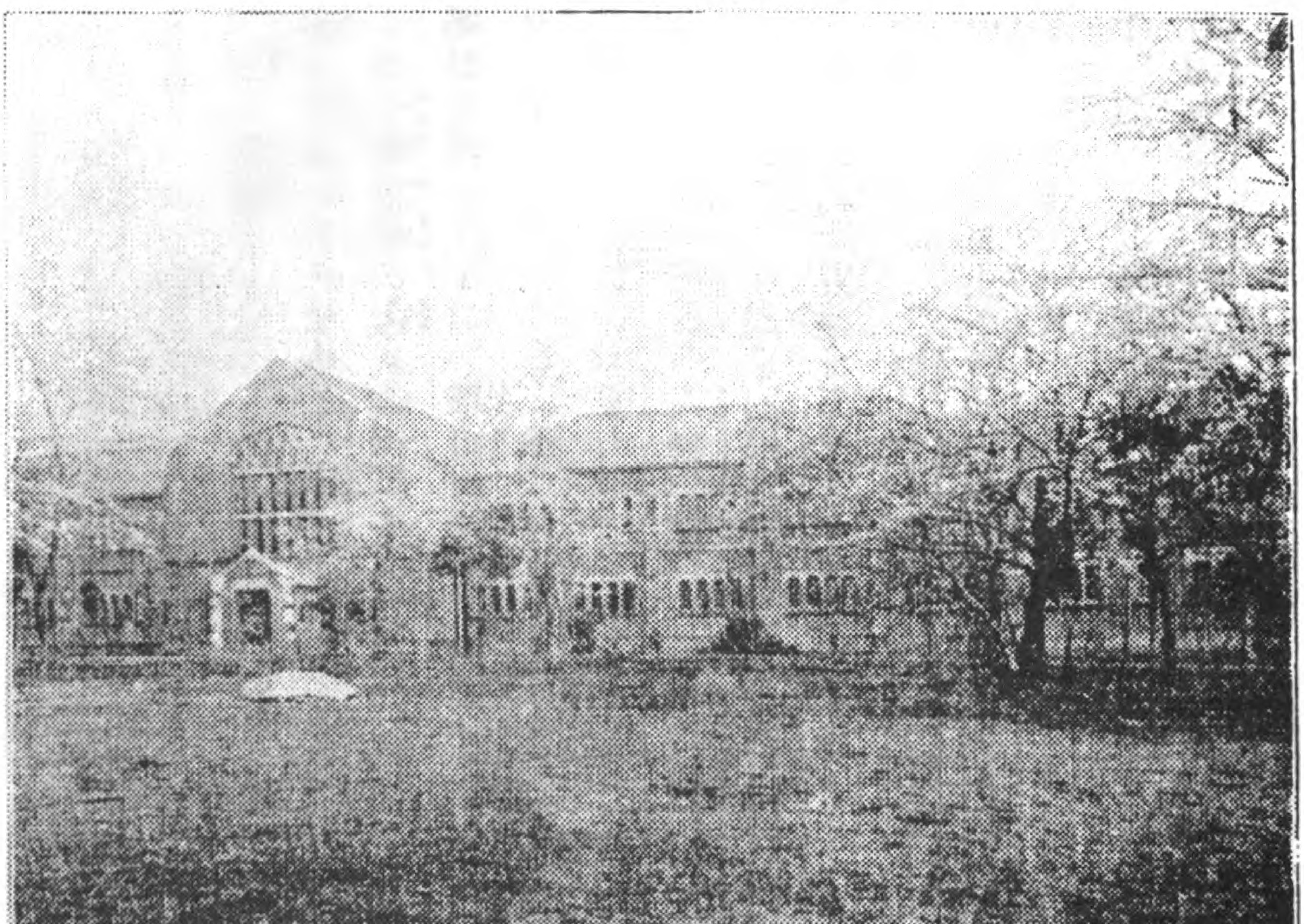
故室町典侍



女子高等師範學校附屬高等女學校職員及び卒業生



華族女學校



東京女學館

論說



# 高等女學校に就て

前新潟縣高田師範學校長　阿多廣介

曩に女子敎育の主義方針に就て如何に由るべきかといふことに付いて意見を述べて置いたが、今度は高等女學校に就ての意見を述べて見たい、

高等女學校は申すまでもなく、中等以上の婦人を養成する學校であつて、我國中等以上の家庭の主婦たるべき人を養成する所である、就ては高等女學校の敎育の方法の宜しきを得ると否とは、我國中等以上の家庭の整否の如何に關係するわけで、延いては我國中等以上の社會の如何に影響する次第である、凡べて社會の狀況は、中等社會が中堅となつて上下の間の秩序を結び付くべきものであるからして、即ち社會は殆ど高等女學校敎育の如何に依て趨勢を決定せしむると云つても宜しからうと思ふ、然らば此高等女學校の主腦となるべき、校長、職員の人物、性行、見識、學力等は我國後來の社會の進運に關して、重大なる關係を持つて居る譯である、然るに現今の多くの高等女學校長等を見るに、學事に關係した老朽の屬官若くは小學校長の古ものかであつて、少壯有爲の人物に乏しいやうである、而して高等女學校と云ふ問題の困難なるとは、曩に主義方針を述べる際にも述べたが、中々老朽の校長や何かの力で解決せらるゝ問題でない、必ずや少壯有爲の人物に依ら

なければならぬことゝ思ふ、教員に於ても此通りである、所が教育の專門家たるべき高等師範學校等の教師や、其他の有爲の教育家は、如何なる譯か、女子教育に當ることを餘り好まないやうである、之は我國々人が、從來女子を輕んじた爲めに、女學校の校長、教員となるのは、何か一階段低い所の事業に從事するやうな偏見よりして忌のもあるだらう、又一方には、男女の關係に於て、年若き者が女子教育に適しないと云ふやうな世論を恐れて採用しないこともあらう、併しながら男女の情といふものは、必ずしも若いから危險であるとか、年老つて居るから安心であると云ふやうな譯はない、即ち情欲を抑へるとか云ふやうなことは、人の思想の堅固なると否とにある譯で、必ずしも年の老少に關する譯はあるまいと思ふ、であるから年少有爲の士が、或は校長となり、或は教員となつて、高等女學校の改良上進を圖るやうになり度いものである、又少壯有爲の士は、今日主として、中學校や師範學校の如き男子の教育事業に從事せらるゝのを希望する譯であるけれども、是等は大體は教育の基礎が立て來て、此上は大に手腕を振つて新局面を開かうと云ふやうな地位も少なくない譯であるに由て、功名を建てやうと云ふやうな元氣な士は、高等女學校問題の如き難局に當つて、大に社會の歡迎を得るのも愉快なことであらうと思ふ、而して教員は、吾輩の希望する所では、主として女子の教員が續々と從事せられて、高等女學校の如きは女子の力を以て管理訓練をして往くと云ふやうな氣風になることを希望するのである、

更に學科程度のことに就ては、教育學の如きを必須科せられたいと云ふことを述べたこともある

が、其後文部省に於て教授細目取調委員も設けられて、目下歴々の方が調査中のことであるから、其發表期を待つ譯であるが、成るべく地方の狀況を察せられて、公平の意見を以て、餘り高きに失しないやうに、一般我國の女子教育の現狀に適するやうに編纂せられんことを望む、從來の文部省令の如きは、動ともすると實驗的の事は少く、理論的の事が多くて、直接其事業に從事するものに於ては、困難することが少からぬのである、且又餘り巨細に立入らせると云ふと、地方の情況に適切ならしむることが困難であるに依りて、大要を示し、其範圍内に於て、其土地に適する教育法を具備し得るやうな餘地を、其府縣に與へるやうに爲たいものである、次に男子の中學校に於ては、或は高等學校、大學校に連絡を保たなければならぬと云ふやうな事情より、中學校と云ふ普通教育の目的に違反して、殆ど高等學校の豫備校とか、兵備學校の豫備校とかと云ふやうな傾になつて、中等社會の人物養成と云ふやうな點に付て、研究が乏しいやうに思ふが、今後高等女學校に於ては、此弊に陷らないやうに、即ち高等女學校に於ては、一通り完全なる人物を成すやうなことに爲して貰いたいものである、近頃女子大學校も出來て、諸府縣より多くの希望者もあると云ふことであるが、此後はそう云ふやうな學校も、續々と興るであらう、………興ることを希望するが、併ながら高等女學校の教育は、其等の豫備校とならないやうに爲たいものである、

最後に寄宿舍のことに付て述べたい、小學校であれば各町村に一校づゝ設立せられて、婦人小兒の通學上、先づ不便は無いけれども、高等女學校は、現在に於ては、一府縣に一校以上と云ふ規定であ

つて、多くて數郡合して一學校と云ふやうな割合である、シテ見れば多くの生徒は、己れの家庭よりして通學すると云ふやうな便利が得られないに依りて、或は親類、若くは知己の處より通學するものもあらうし、其便利の無いものは、寄宿舍に居るものもあるだらう、所が其等の取締と云ふものは、迚も家庭に於けるが如くに出來得ない、其れで吾輩は、高等女學校には、必ず其の己れの家庭より通學するものに非ざる以上は、寄宿舍に入舍するやうなことにおしたいものである、而して寄宿舍と云ふことに付ては、又意見もあるが、男子の寄宿舍のやうに、或は兵營流であるとか、或は昔の士族流であるとか云ふこともあるから、女子の寄宿舍で今後設立せらるゝに當りては、大に研究せんことを希望する、即ち家庭の情況を移して、教員が其舍長になつて、多くとも一學級に於ける擔任の教師が、己れの子女の如く、管理監督するやうに、自らも其寄宿舍に寄宿して、恰も一家の主婦の如き心持を以て、遣つて貰ふと云ふやうなことに爲たいものである、而して寄宿舍内の交際や、又家事の整理の如きも、恰も家庭にある如く、他の人との關係は親類の如く、隣家の如く爲たいものである、

終りに女子の運動に就ては、我國今日の情況は甚だ嘆ずべき有樣であつて、女子が少しく運動すると云ふと、或はお轉婆と云ひ、或は生意氣と云ふて、身體の發育上に健康上に、關係のあることを認めて居らない、聞く所に依れば、亞米利加邊では、女子の器械體操の如き、實に我國の男子も及ばない程活潑に運動すると云ふことである、亞米利加婦人の體格は其等の爲か年々發達して、身長も統計上著しく延びると云ふことを聞く、して

見ればお轉婆とか、生意氣とか云ふやうなとは齒牙に掛けるに足らぬから將來は適當の運動法を大に研究奬勵して、高等女學校等に就ては活潑なる、壯健なる體格を有して居る所の美婦人を養成して、未來の國民を生む賢母を拵へるやうに爲たいものである

## 女子教育の方針

女子學院長　矢嶋揖子

當今は女子教育が盛になつて來ましたが、私の現今執つて居ります女子教育の方針ですネ……そもそも私が三十年前の考へですネ、女子を何う云ふ樣に養成致すべきかと云ふことで御座います、其養成の仕方と云ふものは、何卒して女子に實力を附けてやりたいと云ふ考を起しました、其は何うして、さう云ふ樣な考へを起したかとなれば、私が東京に參りましたのは明治五年で御座います、まだ其頃では一寸も學校と云ふものは……小學校と云ふやうなものも御座いませんでした、明治六七年になりまして始めて小學校を設けられ、其れより一般に布かれるやうになりました、其頃私に小學校の教員になれと勸めらるゝ人がございまして勤めることになりました、而して小學校の小さい生徒を五六十人預つて教授致して居りましたが、其時分に一般に望みましたことは洋行生でございます、女子も男子も洋行々々と云ふ勢にありまして、而して洋行致した結果は如何であるかと注目しまするると、實に困難な譯があります、其れは未だ日本では英語を稽古致す道が付て居りませぬ、所が世の中の進歩は段々に小學校も一般に置かるゝと云ふやうな時代になりましても、所謂洋行する仕度が出來ない、然るに其仕度も出來な

いで洋行するものであるから、ソコで、困難を生ずるのである、洋行して五年七年を經過し立派に目的を遂げられて歸つて來ても身體は弱くなり或は悪い結果を現しましたり、其氣の毒なこと丶云ふものは言葉に盡せません、なんで其云ふ風になるかと云ふと、仕度を爲ないで他の國に參るからです、其れには先づ言詞さへ少し心得て參りますならば、充分とは往きませぬ迄も、幾分か樂にマア修學が出來ると云ふものでありまず、其所で私はツク／＼考へまして小學校の先生になる人は男女共に將來ヅク／＼と起りまして、私共の樣な不充分な人が小學校の教員をせぬでも、澤山ある場合になります、其時に私は斷然小學校の世話をするよりは、退いて小學校以上の充分な教育をやつて、小學校の先生になるやうな人を養成したいと思ひまして今日に至つたのであります。

其から師範學校と云ふものが始まりましたから、其日本學だけの先生と云ふものは、段々出るやうになつて參りましたけれども、其師範學校で出來ない英語は、私共の私立の學校へ、何うかして學びたいと云つて、修學を求めて參られると云ふやうなことで澤山な師範生徒及び教師が入學せられましたけれども、總て先生になるべき資格がある方々は、餘り英學は出來て居りませぬですが、マア手解きと云ふ位なものであります、乃ち私の實驗致します所に由れば、高等小學校あたりから、少しつ丶英語を教へて置きまして、其から尋常中學校の課程の内半分丈英學を學ばせると、………其年限が四年でございます………そう致しますと四年の間には大抵豫備が出來て居りますから、中學校の終りと同時に、英語の方は讀むことも、飜譯することも、談話することも、一通りは

出來るやうになります、其所で其れだけが濟みまして、倘其上に二年ばかりの程度を延ばしまして、其れを高等科と稱へまして……そこはマア其樣に重要なことは別に致しませぬけれども、……高等小學校で致しました所の補修と云ふやうなものでありますが、一番大切なものであります、そこで又其生徒には教育法をも實地さしておくのであります、其は些と出過ぎたやうなことで……師範學校でなくては教育法を授けると云ふやうなことは、少し差越すと云ふやうなことゝ思ひますけれども、……それから私の考は自分が小學校を教へて居つた時に、實に小學校教員は名譽職で、幸ひお職掌でありますが、何う云ふもんデスか、小學校は月給は少くて而して責任は重く、誠に困るから……自分では我慢して宜いのでありますけれども、私の考へましたのは、私より後の女子と云ふものは、そう云ふ風に往きますならば、進んで教育者になる望を有つ人は無からうと思ひました、其所で教育者になるならば、多くの人の出來ないことを女子に授けて置くが宜い、官立等の學校では到底英語と云ふものは充分出來ない、故に私共私立に於て英學を充分致さしめることが出來るので御座います其れは私共が富んで居りましてそう云ふ先生を澤山雇ひ込んで英語を教へて貰ふと云ふ譯ではない、其は私共の宗教の仲間が、親切に手傳つて呉れるんです、其云ふ譯で英語を充分學ばせることが出來る、此機會を折として日本の學問を充分に爲さしめると同時に、英語の方を充分致さしめて置きますならば、卒業後は場合に依りて女學校の招聘に應じまして、………若くは小學校でも宜うございます、………諸學校の招き應じて英語の方を受持ちますならば、時間は短

くとも、報酬は可なりにございますから、斯う云ふ風に致しますと、自ら女子の權利と云ふものが出來て參ります、

其れから私は女子の道德と云ふことは、充分重んじて居りますけれども、如何に女子が道德〳〵と稱して熱心に望んでも、所謂無い袖は振れませぬことで、自分の權利が無い時は、道德も思ふやうには運びませぬ、其故に私の女子教育の方針は、女子に力をつけて、利益ある働きを爲すことの出來るやうに導いておきますするならば、マア私共が國に報ずる所以は素より、男子のお方が充分に發達せる今日に於て、女子を相應に教育しておくのが、國に對する責任であると考へましたから教育に從事致して今日まで二十五年一日の如く力を盡して居りました譯で、殊更に特別なる方針を取る譯ではありませぬか、今日になりましては、少しは豫想の結果もございますし、そこらの人にも此學校は、教育法も完全なりと云はるゝかの如く思はれますやうになりました、マア搔抓んで申しますれば右樣の次第であります。

## 英國婦人叢談

ヒユース孃　口述
宮館貞　筆記

○英國にて如何なる種類の婦人は教育家たることを望むか

Educationalist乃ち廣義の意味に於ける教育家と云ふ語の中には、學校教師乃ち學生を對手として教育することを專らとするものと、各種の教育問題に對して盡力するものとの二つがあります。

後者の教育家は、高尙ある教育を受けたる上流社

會の人々でありまして、極めて少數の人であります。前者の教育家乃ち Teacher に就きましては、玆に少しく御話すべき事柄がありますが、其以前に英國の學校制度に就きまして御注意しおければならぬことは、御承知の通り、英國の學制は貴國とは違ひまして、社會の上下に應じて皆夫れらの學校があります。則ち初等學校 Elementary School には、下等社會の子女のみ在學し、高等社會 High School には、中以上の階級の子女のみが入學するのであります。

Elementary School に上流社會の子女が入學することなきと同じく、High School に下等社會の子女が入學することは最も稀でありまして、階級の上下に應じて、自然夫れに特有の學校があるのであります。

尤も初等學校は政府が關係を致し、又た補助金をも與へますが、高等學校は政府の關係もなく、補助金も受けず、多くは私立又は共立であります。此點は、貴國の學制とは大に違ふて居るのでありますから、特に御注意を乞ひました次第であります。

英國の學制は、右の如くに社會の上下に依りて確然分離されてあるのですが、之が教師たる人も、亦た同じく下等社會の學校乃ち Elementary School の教師は 下等社會の婦人が專ら之に從事し、上等社會の學校 High School には、中等社會以上の婦人は主として教育の任に當るのであります。併しながら下等社會の學校教師となる婦人は、同一階級の中でも、稍々上等に屬する人が其多きを占めて居るのであります。

下等社會の婦人にして、同階級の子女の爲めに學校教育の任に當るもの丶多くは、結婚を致します

是は一見して甚だ奇異なる現象の樣でありますが、初等學校の教師となるには、僅々二ケ年位の修養を以て教師の地位に有り付くことを得るのでありますから、下等社會の婦人は、先づ學校教師としての地位を得、之を基礎として夫れそれの人に縁付くのであります。

高等學校の教師となる人は、皆な相當の地位を有して、中流以上に位する人々のみでありますから、初等學校の教師の如くに結婚の目的を以て教育の任に當るものはありませぬ。何れも高尚なる教育を受け、社會の中以上に位する婦人方が、一意社會公共の福祉に對して貢獻する所あるが爲めに之に從事して居るのであります。

記者曰く、現時英米に於ける小學教育は、殆んど擧げて婦人の中に放任せられつゝあるは世人の知る所なり。而じて教師の多數は、一時の踏臺として此貴重なる地位を汚しつゝあるものなるが故に、近時に至りて小學教育の改良は、漸く將に世上の論議に上らんとするの傾向を示せり。客年十二月發兌の米國教育雜誌には(How to improve the professional spirit of teacher)『如何にして教師の就業的精神を改良すべきか』と題する一論文を掲載せり。其要に曰く『小學教師の其任務に忠實ならざる所以のものは、女教師は之を以て結婚の媒助となし、男教師は之を以て他の業務に轉ずる迄の一時の踏臺となすが爲なり。故に教師たるの地位估劵は漸々に下落し、從つて貴重なる其本來の任務を等閑視するに至るなり。而して此狀態を改良するに付ての急務は、先づ教師の俸給を增加して適任の人々を誘ひ、就中、從來の如くに單り初等教育を女子にのみ一任せずして適任の男子をも引入れ、教師

としての地位を更に一層高尚ならしむるにあり。之に次で必要なることは、一定區劃内の教師は各々共同の組織體を有し、其代表者は團體の爲め公共に對し、教育上責任を負ふて動作するものたらざるべからず。此種の團體は、今日に於ても既に存在するもの少なからずと雖も、其數は尙割合に少なく、且、何れも强制的性質を帶び、以て刻下の急務に應ずるに足らざる也」云々。

○英國にて獨立生活を營む婦人は漸次增加の傾なきや并に彼等の理想如何

英國に於きましては、昔から一つの主義を抱きまして、結婚を非とし、終生獨身で暮さうと云ふ婦人の一部分がありましたが、此種の婦人は漸々增加の傾向を現はして居るのであります。尤も非結婚と云ふ一派の主義を擁して居るのではありませんが、彼等の現狀は結婚を不便利なりとして、他に嫁することを許しませぬから、靑年女子の多くは寧ろ獨身生活を喜ぶの傾を現はして居るのであります。

五十年以前には、女子の職業範圍は今日の如くに擴張されて居りませぬから、女子は一定の職業に從事して獨立自活することは、極めて困難でありました、此時代に於きましては、女子は徒らに父兄の厄介になつて居なければなりませぬから、結婚しないと云ふことを甚だ悲しく思ふたのであります。されども現時に於ては、女子の盡力すべき事業は澤山に出來、亦た女子職業の門戶は大に開けましたから、結婚せずして獨身生活を營む場合に於ては、却て多くの高尙なる事業に從事することが出來るのであります。併しながら、多數の

半教育婦人は、矢張結婚することを女子唯一の希望として居ります。之に反して比較的少數なる高尙の教育を受けたる婦人は、社會の爲めに何かなさうと思ひまするに、結婚せずして獨身で居らなければ自由の行動を許しませぬから、何れも結婚を望みませぬ。私は此點に於て、英國は貴國よりも一段進歩して居はせぬかと思ふのであります。私の見る所に據りますと、日本の婦人方は國の進歩の爲に働くと云ふことは稀でありまして、且又た極めて少數でありますが、英國に於きましては、此種の婦人は比較的に甚だ多いのであります。

必竟するに、英國の婦人は、貴國の婦人の現に占めつゝある社會上の地位よりも一層高尙にして國の進歩の爲に働くには、極めて都合良く便利なる地位に立つて居るからでありませう。要するに、世の趨勢上婦人の從事すべき事業は、年一年と多くなりまして、高尙なる教育を受けたる婦人の自由なる手腕を要することは、漸く切になりました、現在の英國の狀態に據りましても、一國の進歩の爲に婦人は少なからざる貢獻を爲しつゝあるのであります。而して此種の婦人は、結婚せざる獨立の婦人に多いのであります。

勿論未來の事は容易く斷定することは出來ませぬが、英國は現に此種の活潑なる獨立の婦人を有することを此上なき名譽なりと考へて居るのであります。



○英國人海外進取の氣風と母又は妻の感化內助

個人的には、母は元より子女の上に多大なる感化力を有して居ることは勿論であります。亦た妻の夫に對する勢力も漸次增加しつゝありますから其

感化内助は與つて尠なからざる關係を有して居ることも明かであります。

されども、眞正に英國人を解し英國の歴史を解し並に海外に於て働きつゝある英國人を解するには「ゼントルメン」の氣風を先づ解すべき必要があるのであります。此「ゼントルメン」の氣風と云ひますのは、最も剛健にして高尚なる英國人特有の美風神髓でありまして、恰も日本の武士道と同じやうなものであります。而して此紳士的精神の因て來るところの源泉は何であるかと云ひますと「ビッグパブリック、スクール」Big public schoolであります。

此紳士的精神は、實に「ビッグ、パブリック、スクール」と稱する學校に於て鼓吹せられ、陶冶せらるゝのであります。英國に於て「ビッグ、パブック、スクール」と稱する學校は十四ありまして、貴族の子弟は此學校に於て十三才から十九才迄教養さるゝのであります。

十三才から此學校に入りまして、十九才迄の間に紳士的精神の堅確なる根底を此處に植付くるのでありますが、此學校に入りて、僅々一ケ年を經過したる場合に於きましても、其人の思想は非常に高尚になり、全く別人の趣があるのであります。

此學校に於て紳士的精神を鼓吹せられたるもの、乃ち英國紳士の特質として社會道徳の中堅となり居るものは、第一名譽を非常に重んずること。第二決して虛言を吐かぬこと。第三己れより弱きものを攻擊するが如きことなく、常に之を庇護すること。第四怯懦ならざること。第五貴女を鄭重に取扱ふことであります。「ビック、パブレック、スクール」は、如何にして且つ何れの時よりして此の如く剛健なる精神を鼓吹するに至りたるか、其

原因及び「トラジション」は今日に於て詳らかに知ること能はざれども、兎に角、此學校の一般道徳に對して貢献する所のものは尠なからざる次第であります。彼の「トム、ブラオン、スクール」と云ふ本に書いてありますのは、則ち此學校の美風特質を捉へて描寫したのであります。

○英國婦人の理想

英國に於きましては、上流社會の婦人は、四五十年前則ち祖母時代よりして、生活に多くの責任を有して居る。言を換へて御咄しまするど上流の婦人は何かな國家に對して貢献するところなければならぬと心得、之に向つて可成立派なる生活をしやうと思ふのであります。

元來英國人の國民的思想の因て來る所のものを尋ねまするど、其淵源する所は第一に宗教則ち「ナショナル、レリジオン」でありまして、次は則ち文學であります。尤も英國文學は、皆な國教の感化に依りて發育したものであります。第三は國民的種族「ナショナル、レース」則ち一國民族として歴史に關係して、漸次養成せられたるものであります。

國民的思想の第三の淵源として前に述べました「ナショナル、レース」と云ふことは、英國人の思想の上に一大感化力を有して居るものでありますが、御承知の通り英國の領土は、近代に於て著るしく膨脹致しまして、現に世界の到る處に種々雜多の異人種を包容して、大英國と云ふ一大國民を形成して居るのでありますから、日本の如くに狹き限界内に於て、單一人種に依りて組織せられたるものとは大に趣を異にし、概して一般英國人は廣き思想を有するに至つたのであります。

右に擧げましたものに加へて、近時英國婦人の思

想を刺撃し興奮せしむるに至りました社會的の一現象があります。それは近來英國に於て、風紀の漸く弛廢し墮落したる生活を爲すもの大に增加したるに付きまして、上流の地位を占め高尙なる思想を有する婦人方は、此弊風を除去し彼等を救濟するに付て、より多くの責任を自覺するに至りました事實であります。私は米國等に於て、諸種の救濟事業を視察致しましたが、我英國に於けるが如く重大なる責任を自覺して、一意勵精事に當るものは比較的に少ないやうに思ひます。






# 近古勇婦百譚

黑金子

## 某侯の夫人（第四）

此度は春の日永の眠氣さましに腹一文字に搔切て良人を諫めました女丈夫の御話を致します、是は態と御名前を憚りて申しませんが、或る國を領し玉ふ少將某侯の奧方は宰相某侯の御娘子で生得武勇を好み乘馬打物に達し玉ひ召仕ふ侍女迄皆武藝を嗜まれましたが、其弟御の中將殿は叉器量逞ましく頰骨高く色黑く馬上の達者で其頃諸大名の中武勇第一と評判せられました。併し仁慈の心厚く

姉弟の仲は至て睦じく折柄のお見舞には打解けて御物語などもありまして誠に孝友の御有様人々感心致した事でございます

扨此奥方は其頃の噂に日本第一の勇夫人と云ふ取沙汰がありまして、少將殿との御中は至て睦まじく御子様もお二方あり嫡女は松平肥後守殿の奥方となり次は岩松とて何れも器量よく御成長になりました然るに少將殿如何なるお心にやふと新吉原へ通ひ初め晝夜酒色に溺れ、奥方がお諫めになりますと暫くはお止りになりますけれども尙又通ひ路は彌增に繁く相成り、終に花紫、歌野と云ふ二人の遊女を受け出されました、又何者の御勸め申せしにや野郞陰子に心を動かされまして芝神明前の少年を二人迄召抱へられ、其のみならず歸國の砌には右の者共を召連れらるゝとの事でありますから奥方は大に歎かれ少將殿に對面なされまして。扨斯樣に申上げる事恨み妬みと思ひ玉はんなれども弓矢神を掛け奉り少も左樣の事にては之れなく、遊興の餘りに遊女を受出し玉ふ事はあるまじき事ならねど國許迄御供を申しては第一に上への聞えも宜しからざる事でありますと樣々に諫められましたが、殿には一向に用ゐ玉はぬのみか却て立腹ありて出立の時にお暇乞もなく發駕せられました。

奥方は愁ひ悲しみ窃に物見より殿樣御發足の御行列の有樣を御覽になると驚くべき哉右の遊女陰子の輩我劣らじと美々敷旅裝して歷々の諸士と同樣に押行きますから、奥方は局に向はせ玉ひ、是程の事を諫め申す者家中に一人もなきは如何なる事ぞや、且自らへ對して餘りなる殿のなされ方と宣へば局を始め女中衆皆御道理と申上げるより外はありません。其後奥方は徐かに一間に入り給ひ弟

の中將殿へ細々と書置をなされ惜むべし三十一歳を一期として腹一文字にかき切りて伏し給ふ此有樣を見たる女中達はうろたへ騷ぎ局の外山、澤井中老の豊田は奧方を抱きかゝへ醫者よ藥よと犇めきまはる、其聲の御耳に入りしか、奧方は眼を開かせ給ふて其方達は日頃程にもなき有樣かな切腹する身が生くべき程に切るべきや兼て覺悟の事ぞかし必ず騷ぐ可らず、如何に豊田介錯せよ、と仰せられましたから三人共同じく殉死仕り度由を願ひましたるに、奧方聞き玉ふて殉死は天下一統の御法度であるから相成らぬ、其方共は岩松が行末を見屆けて呉れよかし返す〲も賴むぞと仰せられました、けれども此三人何れもしたゝか者でありますから詞を揃へて、縱へ御勘氣を蒙るとも此期に及び御供仕らであるべきか是非〲御免し下さるべしと思ひ込で申しました。奧方は息の下より、日頃自が目鑑に違はず嬉しき今の志かな然らば外山澤井は直に冥途の供を致せ、豊田は跡に殘り自ら并に二人の屍骸を取收め三十五日過ぎなば勝手次第たるべし、と宣へば三人ありがたしと御請するとひとしく外山澤井の兩婦は諸肌袒ぎて見事に腹を切り主從三人一處に息を引き取りましたのは無慘と云ふも愚かなる次第でござります、扨豊田は甲斐〲しく其跡を取片付立派に葬式萬端を終りました後三十五日を過ぎて約束を違へず潔く自殺しました、主人の自殺を見て憤慨の餘り一時の感情に驅られて自害する事は或は出來樣けれど一ヶ月餘も程過ぎてから君命を守つて從容死に就くと云ふは大丈夫と雖ども難しとする所でおらうさすれば三人の內でも此の豊田と云ふ婦人は一層勝れた英傑と思はれます。

扨奧方御自害の事御里方へ注進がありましたか

ら、弟御の中將殿は大に驚き汗馬に鞭を當て丶唯一人馳せ付けられまして此の慘憺たる有樣を一目見るより、眼血走り髮逆立ち急ぎ少將殿を呼戻せ事の理非を糺すであらうと大に憤り給へば家中の上下以ての外に騷動致し急ぎ早打を以て道中の旅館へ急報に及びました、少將殿には留主中にかかる騷動のあらんとは夢にも知らねば此夜は戸塚の驛に宿りて例の美人と美少年を左右に侍らしてうつ丶たわいもなき處へ右の早打が參りましたから大に驚き酒も迷ひも一時に醒めて深く先非を悔まれ、一人の心より不慮の大變を起し誠に痛ましき事の限りであるとて、段々中將殿に詫言を申されて漸く事濟になり、其後は品行を改められたと申します。

勇武義烈の發する所死を見ると歸るが如くなるは日本婦人の特色と申すべきものでありませう、愛岩下の青松寺に四の石碑の並んで立て居りますのが則ち右の奧方と外山澤井豐田三婦人の墓で之を見て涙に袂を濕さぬ者はないと申す事でござります元來婦人にして自殺すると云ふは中庸を得ない仕方ではありますが家國の前途を案じ一命を捨て良人を諫めると云ふ其誠心誠意は實に得難きもので當今或る社會に於て見掛けまする夫君を一種の柔順なる良僕と見做す連中には決して出來ぬ事であらうと思はれます。

## 故室町典侍

丸木喬子

故室町典侍は、其名を清子と稱す。正二位權大納言室町公績卿の四女にして、母は從一位廣橋胤定卿の四女なり。天保十一年十二月京都に生る。性

質温厚柔和にして淑徳備はらざる所なく、才學いみじうおはして御國ぶりはもとより、漢籍絃管の道にさへ暗らず、尤も和歌に堪能にして、その殘れる玉什いと多かり。安政三年六月年十七にして今上陛下のなほ祐宮と稱したてまつられし時、初めて御雇に召出さる。同四年五月上臈御奉公人仰付けられ萬延元年七月　今上陛下儲君御治定の日より高松と稱することゝなりぬ。慶應三年正月に至りて權典侍に任せられ、明治二年正月權中納言典侍と稱し、從五位に叙らせれしが、やがて改めて二位典侍と稱せられき。斯くて明治維新の後百般の改革あるにつれて前官皆廢せられ、更に任命せらるゝに際し、明治四年八月再び權典侍に任ぜられ、正五位に叙し、紅梅典侍と稱せられぬ。明治六年二月には典侍に任ぜられ、ついで從四位に叙せらる。室町家は元四辻を名乘られしを、明治十七年六月室町と改められしとぞ。さて明治十九年十二月　聖上皇后兩陛下京都へ行幸啓在らせらるゝにつき、供奉仰せ付られ、同廿二年十一月には、同年八月三日敕　定第百三號の旨により、大日本帝國憲法御發布紀念章を授與せられ、翌年十月　皇后陛下茨城縣下へ行啓在らせらるゝにも供奉仰せ付られ、同廿五年十一年正四位に叙せらる。越えて廿八年三月　皇后陛下廣島行啓あらせられし時もまた供奉仰せ付られしが、當時は日清戰役中にて、廣島は大本營地なりしかば、御事繁く在らせつるに、いとよく仕へ奉れる勤勞によりて、特に金五百圓を下賜せられぬ。實にや典侍が眞心の美しさは櫻の花にもまさりつべく、其功績の高さは富士の山にもたとへぬべし。されば兩陛下の御おぼえもなみ／＼ならず、三十年十二月には從三位に、三十五年一月正三位に昇叙せら

れ、勳三等に叙し、寶冠章を授けられぬ。是よりさき、典侍は病に罹りて數日治療を盡されしが、二豎遂に退かず、享年六十三歲を一期となし同月十日溘焉として薨ぜられしは、實に萬人のいたく悲惜する處なり。

あはれ典侍は、安政三年宮中に出で　陛下の御左右に仕へ奉れるより、今年に至るまで凡そ四十七年間、一日の如く忠誠を盡され、女官の首座に昇り、位は正三位に至り、勳は三等に叙し、寶冠章をさへ授かりしは、古來例少なきことゝいふべし。固より種々の逸事も多かるべけれど、九重雲深き間にてのことなれば、傳聞するに由なきは甚だ遺憾の極みにこそ。本社久しく其淸操令德を欽慕したりしが、今度其寫眞を得たれば、之を本號に掲ぐると共に、略傳を物すること此のごとし。

## 「グリセル、べーレー」夫人

宮舘さだ子

### （一）夫人の父君と舅

千六百六十年より千六百八十五年に至る二十有五年間の久しきに渉つて、英蘭土王の位に在りける「チャーレス」第二世の治下に於て、「ラッセル」卿及び「シドニー」の如き有名なる人々と肩を並べて政治上及び宗教上の自由の爲に爭ひ、それが爲め或は刑場の露と消え或は一家の覆沒を來した人々の中に、二人の蘇格蘭人がある。一人は「ポルワルス」と云ふ所の地頭で、後に「マルシモント」の伯爵となりし「サー、パトリック、ヒユーム」と云ふ人。他の一人は「ジャルヴイスウード」の「ロバート、べーレー」と稱する人。「ベルウイク」州の中央一圓の平蕪は、宛然から萬頃の綠波を湛へたや

うな原上に、人家の三々伍々其處彼處に散在する所は、乃ち「ボルワルス」村で、村の中央にて、曾て有名なる一本の常盤樹の生ひ繁つたことがあつたが、今は風雨に朽ち果て丶可惜村の名物の一つを失つた。されど此樹は詩人の歌に入り、附近住民の口碑に上つて、今尙其名殘を留めて居る。

「サー、パトリック、ヒユーム」は、千六百四十八年彼が未だ稚なき時父に代つて「ボルワルス」の采邑を相續した。母は中々の賢婦人で、彼が幼年の敎育は主として母刀自の訓陶に成つたのである。「ポルワルス」敎會堂を距ること凡そ二哩の所に「レドプレース」城と云ふのがある。是は「ヒユーム」家代々の居城であつた。

「サー、パトック、ヒユーム」はやがて、相當の年輩に達したれば結婚を爲て、男女十八人の子を擧げましたが、最初に生れたるは「グリセル」孃と云つて、千八百六十五年耶蘇降誕祭の當日を以て呱呱の聲を揚げたのである。

此時に於ける蘇格蘭の狀態は、殆んど筆舌に悉しかぬる程で、非國敎主義の人々は、國敎遵奉の宣制を拒み、且又政府の勝手氣儘な、法令に對して不平を鳴らし、一方政府側に於ては、飽くまで之を强行するが爲に、種々の酷薄の手段に訴へ、それが爲に闔國の人心鼎沸し、世上の雲行き極めて穩かならぬ有樣であつた。

「サー、パト リック」は、此の如き時に方つて、蘇格蘭議會の議席を占め、政府の專制政策に對して思つ切つた反對を唱へた爲め、爾後政府は、彼を目して國安に危險な者と認むることになつた後二年人民を鎭制するが爲に、守兵設置の議あるに方つて、彼は大に此議に反對した。その故に「トウ〳〵「エヂンボルグ」の「トルブース」監獄に送ら

れ、勳三等に叙し、寶冠章を授けられぬ。是よりさき、典侍は病に罹りて數日治療を盡されしが、二豎遂に退かず、享年六十三歳を一期となし同月十日溘焉として薨ぜられしは、實に萬人のいたく悲惜する處なり。

あはれ典侍は、安政三年宮中に出で　陛下の御左右に仕へ奉れるより、今年に至るまで凡そ四十七年間、一日の如く忠誠を盡され、女官の首座に昇り、位は正三位に至り、勳は三等に叙し、寶冠章をさへ授かりしは、古來例少なきことゝいふべし。固より種々の逸事も多かるべけれど、九重雲深き間にてのことなれば、傳聞するに由なきは甚だ遺憾の極みにこそ。本社久しく其淸操令德を欽慕したりしが、今度其寫眞を得たれば、之を本號に揭ぐると共に、略傳を物すること此のごとし。



# 「グリセル、ベーレー」夫人

宮舘さだ子

## （一）夫人の父君と舅

千六百六十年より千六百八十五年に至る二十有五年間の久しきに渉つて、英蘭土王の位に在りける「チャールス」第二世の治下に於て、「ラッセル」卿及び「シドニー」の如き有名なる人々と肩を並べて政治上及び宗教上の自由の爲に爭ひ、それが爲め或は刑場の露と消え或は一家の覆沒を來した人々の中に、二人の蘇格蘭人がある。一人は「ポルワルス」と云ふ所の地頭で、後に「マルシモント」の伯爵となりし「サー、パトリック、ヒユーム」と云ふ人。他の一人は「ジャルヴイスウード」の「ロバート、ベーレー」と稱する人。「ベルウイク」州の中央一圓の平蕪は、宛然から萬頃の綠波を湛へたや

うな原上に、人家の三々伍々其處彼處に散在する所は、乃ち「ポルワルス」村で、村の中央にて、曾て有名なる一本の常盤樹の生ひ繁つたことがあつたが、今は風雨に朽ち果て、可惜村の名物の一つを失つた。されど此樹は詩人の歌に入り、附近住民の口碑に上つて、今尚其名殘を留めて居る。

「サー、パトリック、ヒユーム」は、千六百四十八年彼が未だ稚なき時父に代つて「ポルワルス」の采邑を相續した。母は中々の賢婦人で、彼が幼年の敎育は主として母刀自の訓陶に成つたのである。「ポルワルス」敎會堂を距ること凡そ二哩の所に「レドブレース」城と云ふのがある。是は「ヒユーム」家代々の居城であつた。

「サー、パトリック、ヒユーム」はやがて、相當の年齡に達したれば結婚を爲て、男女十八人の子を擧げましたが、最初に生れたるは「グリセル」孃と云つて、千八百六十五年耶蘇降誕祭の當日を以て呱呱の聲を揚げたのである。

此時に於ける蘇格蘭の狀態は、殆んど筆舌に悉しかねる程で、非國敎主義の人々は、國敎遵奉の宣制を拒み、且又政府の勝手氣儘な、法令に對して不平を鳴らし、一方政府側に於ては、飽くまで之を强行するが爲に、種々の酷薄の手段に訴へ、それが爲に闔國の人心鼎沸し、世上の雲行き極めて穩かならぬ有樣であつた。

「サー、パトリック」は、此の如き時に方つて、蘇格蘭議會の議席を占め、政府の專制政策に對して思ひ切つた反對を唱へた爲め、爾後政府は、彼を目して國安に危險な者と認むることになつた後二年人民を鎭制するが爲に、守兵設置の議あるに方つて、彼は大に此議に反對した。その故にトウ〳〵「エヂンボルグ」の「トルブース」監獄に送ら

る丶ことになつたが、友人等の親切の斡施に依つて、六ヶ月間の拘禁の後に釋放せられた。が、其後幾もなく再び投獄せられ、今度は二ヶ年間の久しきに渉つて、鐵窓の下に呻吟することになつた。窮厄はこのやうに常に彼の一身を纏ひ且又當年の蘇格蘭の大臣等が、飽くまで彼を罪に陷れ、終には亡きものにせんとするの意あるを見て、彼は一時英國に遊び、其地に於て「シャフッバレー」伯や「ラッセル」卿の如き當代の名士と、親密の交際を訂ぶことになつたのである。

其後彼は蘇格蘭の居城「レドブレース」に歸つて成るべく人の目に立たぬやうに只管風月を友として清閑なる年月を送らうとしたが、世の雲行は益々險惡になつて、事々物々漸くと非境に陷つたが爲に、彼れが一片の俠骨は、悲しむべき此狀態を座視するに忍びなかつた。

非國教派の人々の戮刑に處せらる丶ものは、毎日非常の多數に上り、其れが爲に一大騷亂が起り、千六百七十九年六月二十二日に「ボスウエル、ブリグ」と云ふ地で戰爭が始まつたが、非國教派の一揆軍は不幸にして散々政府軍に打破られ、千二百餘名の人々は擒となつて「エヂンボルグ」の監獄に送られたる末、或は殺戮せられ、或は國外に放逐せられた、加之ならず政府軍の大將「クラヴアルハウス」と云ふ人は、龍隊と稱する政府軍を率ゐて、騷亂地の其處此處と經巡り、軍律に據つて容赦なく人民を殺戮し、又は地方の重立たる人々を捕へて審問する爲め、「エヂンボルグ」に送りました。

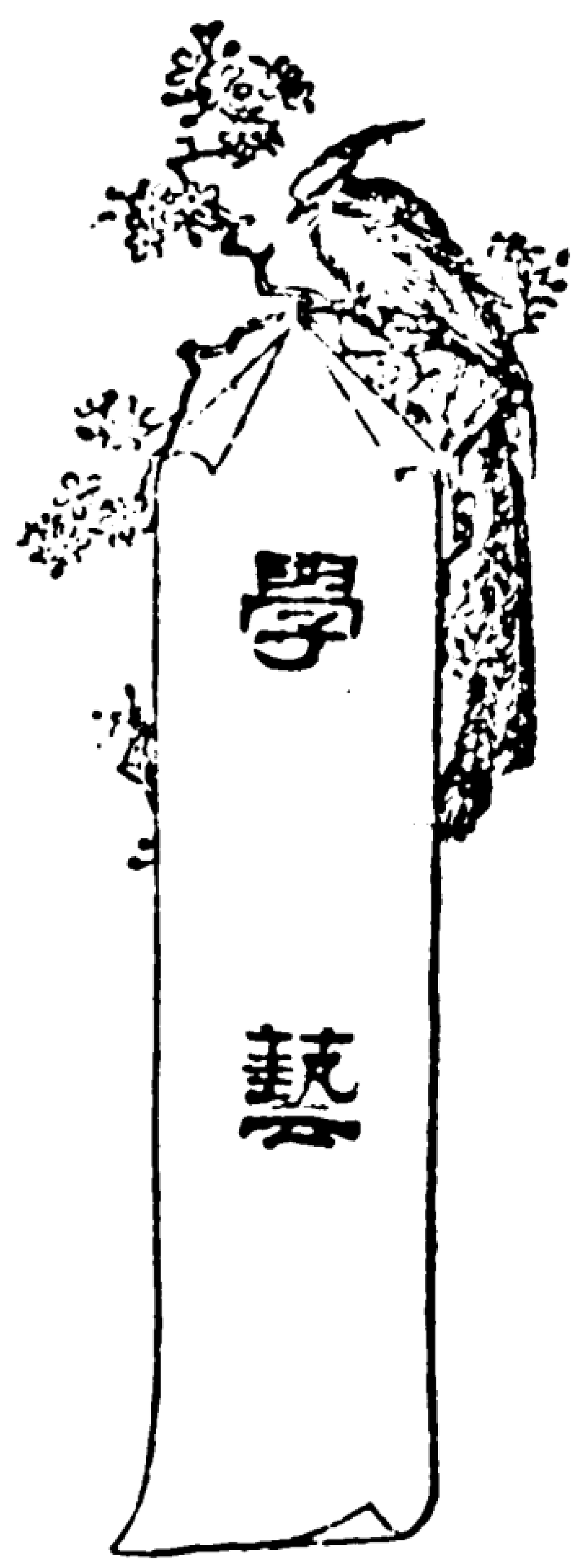
政府軍の斯かる亂暴を働いたのは、當代の國王たる。「スチウワルト」王系に一大汚點を加へたのである。されど當代の國王「チャーレス」二世は、國

王の名を以て此の如き亂暴狼籍の行はれたることは或は、自身知らなかつたでもあらう、實を言へば「チャーレス」二世の左右に侍る大臣等は國王の優柔爲すなきに乘じて、勝手な振舞を爲したのである。彼等に一度嫌惡た人々は、到底安全なることを得られぬ。

此樣の狀態であるから、「サー、パトリック、ヒユーム」も何時兵士に踏み込まれて捕はるゝか、一家の人々は安き心とてはなく戰々兢々として日を送つて居りました。此時に方つて彼の無二の親友にして「グリセル」孃の未來の舅たる「ロバート、ベーレー」も、亦た全一の運命に陷り、旦夕も計られざる危機に際して居るのである。茲に暫らく孃の未來の舅たる「ベーレー」氏に就いて、聊か御話いたしませう。

「ベーレー」氏は二三年以前に偶然の事件に依つて厄難に陷つた。彼の義兄弟の「キルクトン」と云ふ宣敎師は「エジンボルグ」の市街を通行しつゝある折「ケールステーアス」と自稱する男は密談したいことがあるといつて、彼を、とある家に伴ひ行き、矢庭に彼を縛り付けた。「ケールステーア」と自稱する男は大敎正「シャープ」の間諜で、「キルクトン」氏を捕縛して、澤山の賞金に有り付うとしたのであつた。折柄「キルクトン」氏は大聲を放つて救を求めましたから、人民は戶の外に群集し「ベーレー」氏も亦た其中に混じて居つたので、其家の門戶を打壞り、遂に義兄弟の「キルクトン」氏を救ひ出すことを得たが、「ベーレー」氏はそれが爲に三百十八磅と云ふ多額の罰金に處せられ、此罰金の支拂を拒んだので、彼は獄中に拘禁せらるる事になつた。幸にして蘇格蘭の一紳士で時の役人には少からぬ權力を有して居る友人の斡旋に

依り、四ヶ月間拘禁せられた後罰金の半額を納めて釋放せらるゝことになつたけれども、此後彼は始終厄難の纒ふ所となり、後間もなく内亂挑發幷に「レー、ハウス」の陰謀に加はつたと云ふ寃罪の下に、再び拘禁せられ、且彼の全財産に相當する六千磅と云ふ多額の罰金に處せられたのである。




## 和歌講義

藤丸つま子

### 山上憶良

人麿、赤人は、たしかに後世歌聖として敬ふに



足りぬべき大詩人也。然れども、奈良朝に於けるハイカラ的詩人を求むれば、まさに山上憶良を推さゞるを得ず。彼は文學の家に生れ、大寶三年粟田眞人に從つて唐に入り、ふかく漢學を究め、佛敎ををさめて、慶雲元年歸朝せり。當時唐朝は文敎燦然として碩學少からざりしかば、之に留學する者は、恰も今日歐米各國に留學すると等しく、世人に推重せられけむ、さればにや彼が歌の序を見れば、長き漢文にて綴られ、其内容はおほむね佛敎思想に基けり。和銅の末つかた從五位下に叙せられ、靈龜中伯耆守に任せられぬ。養老年中朝を退きて每に東宮に侍し、聖武天皇の朝筑前守に轉せり。左に掲げし歌は、即ち妻子を都に殘し、ひとり赴任せし時詠せしものなるべし。在任四年にして京師に歸り、聖武天皇の天平五年遂に歿す。年七十

四。凡そ朝に仕ふること四代。歌林類聚の著あり。

思子等歌一首並反歌

宇利波米婆、胡藤母意母保由、久利波米婆、麻斯提斯農婆由、伊豆久欲利、枳多利斯物曾、麻奈加比爾、母等奈可々利提、夜周伊斯奈佐農、(萬葉巻五)

◎語釋　宇理波米婆は爪を食すれば也。はむとは食ふ事。●胡藤母意母保由、小供が思はるゝといふ意にて、也行下二段の自動詞也。「意母保由」は、漢字にあつれば「所レ思」とあり、「思は被」の轉じたるものなるべし。「由」は「音のみし泣かゆ」の「ゆ」と等しく、「被」の意味なり。かの「田子の浦ゆ」と「天地の開けし時ゆ」の「ゆ」などは、後、自、の意味にして、同じ文字なれども、之の使用法によりて自ら區別あり。混同せざる樣注意すべし、●久利波米婆云々、栗を食へば、況して小供を思はれるとあり。「麻斯提」といへば、一層小供が栗を好む樣聞ゆれど、あながちさにはあらじ。たゞ詞のあやと見る方穩かならむ。「しぬぶ」は意味甚だ廣き詞なれどもこゝは思はる慕はるなどゝ同じ。「由」は前に説けり。●伊豆久欲利云々、如何なる宿世の因縁にて、何處より生れ、來りし者ぞとの意。此二句を一首の終りに廻して見れば、明に了解せらるべし。●麻奈加比爾は、眼之交也。目と目との間也。「かひ」は、或は峽とも解し、物のはざまをいへり。●母等奈可々利提、基爾懸てならむか。歸する處は、常にその主たるべきものにつき添ふ事也。「麻奈加比」と合さりて、今「目の先にチラツク」などいふ詞と同じ。●夜周伊斯奈佐農やすいあさぬにて、古義に、奈はねさの約まりたる詞なりといへど、いかゞ。つまり

安心して寢ざる事なれども、その元は小供の思はれて、安樂に寢ぬる事が出來ぬ也。「斯」は強めの「てにをは」也。

◉大意　唯さへかく雲居遙かに離れて居れば思はるゝに、小兒の好み食する瓜や栗を食へば、いよいよ子を戀しく思はれ、慕はしく感ぜられつつさては目の先に其面影のチラツキて、夜も安安と寢ぬることもせず、かく思はるゝ子はいかなる過去の因緣によりて、何處から生れ來ればにや、これ程愛情の深きものぞと也。

この詩は、所謂朦朧體にして、其說古來多かるも、却つて詩の本領を得たり。故に甚だをさなくこそ、詠みなしたれ、余韻嫋々讀む人をして歎美措くあたはざらしむ。まづ小兒の好む食物より連想して、その愛情の切なるを述べ、更に進んで、子の因緣と生地とを咎めて結尾とせるなど、舒情詩の上乘といふも敢て不可なからむ。新古今の浮華なるに比すれば恰も野草の自然に生ひたつが如く簡撲にして而も痛切、到底他の時代にあり得べからざる奈良朝の一特色也。

反歌

銀母、金母玉母、奈爾世武爾、麻佐禮留多可良、子爾斯迦米夜母、

この歌は、既に本誌上にて講義し修身百首の中にをさめられたれば、簡略に、其大意をいはむに金銀玉などは、或は貨幣とし、或は裝飾として尤も貴重せらるれど、なほこれに勝れる寶は子に若かず、この二つを比べなば、前の者は何するものぞ、少しも價値なしと也。

# 徒然草の一節（續き）

東宮侍講　本居豐穎

よろづの事はじめをはりこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢見るをば云ふ物かは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜を獨あかし、遠き雲居を思ひやり、あさぢが宿にむかしをしのぶこそ、いろ好むとは云はめ。

「よろづの事はじめをはりこそ云々」は、何事も盛りなる時は風情無きものにて、却て始と終との不完全なる際が、感情深きものなりと云へるにて、花ならば、未だ咲き出でざる前と散りたる後と、月ならば、未だ見えざる時と傾きたる空とに感情は深き謂にて、即ち發端の「花は盛に月は隈無きをのみ見るものかは」といへる句に應じたり。さて、かく云ひ置きて男女の間の情に云ひ及ぼせり、「男女の情もひとへに逢見るをば云ふものかは」は前の發端の分を同一の意味にして、男女の間の情は逢見る事が主要なるは勿論にて、逢はんと思ふ爲にこそ戀の情はあれ。これ花は盛りを賞し、月は明かなるを翫ぶと一なれど、感情深く、歌などによみても味はひあるは、却りて、意の如くならざる時の慨言にある理を云ふなり。「あはでやみにし云々」「あだなる契云々」「長き夜を云々」「遠き雲居云云」「あさぢが宿云々」は何れも男女の間にして得逢はず、獨り其不幸を歎く類を云ふ。「いろ好むとは云はめ」は、風流男の風情ある場合は右の類にあるなれば、單に逢ひ見るをのみ樂みとするは、眞の風流男には非ずと云ふ意なり。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも曉近くなりて、待出たる、いと心深う。青み

たるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うらしぐれたるむら雲がくれの程、またなくあはれなり、推柴、白かしなどの、ぬれたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて心あらん友もがなと、都戀しうおぼゆれ。

これより又月の事を云へり、「望月のくま無きをば、滿月のいさゝかも曇り無きをにて、「千里の外までながめたる」は、其の明月を、海上又は廣野などにて、遙に廣く見渡すを云ふ。「曉近くなりて待出たる」は、宵の間より月の出づるを待ち居たるに、月出遲く〱して漸く曉更になりて、東の山の端に月出でたるを待ちつけたる事にて、此の「待出たる」といふ詞の下に、がと云ふ辭を添へて見るべきなり。「青みたるやうにて深き山の杉の梢に見えたる木の間の影」は、即ち前文の遲く出づる月のけしきにて、深山の杉林の青色にて奥深きを遠く望みたる様なり。「うちしぐれたるむら雲がくれのほど」は又別なれど、これも月をあらはには見ず、幽かに見たるけしきなり。「又なくあはれなり」とは、前に云へるが如く、あらはには月を見ずして、幽かに其光りの漏るゝを見たる類が、却りて比類なく感情なりとなり。「推柴白樫などのぬれたるやうなる葉」とは、深山幽谷にある樹木類の、きら〱として月の光に照り合ひたるが、雨露などに濡れたるが如く見ゆるを云ふ。「身にしみて」は、月の景色の何となく物凄く、俗に「ゾットスル」と云ふ程に感じたるを云へり。「心あらん友もがなと云云は、たゞ一人にて見るは惜しく、同感の朋友もあれかしと、都にある人々の事を思ひいで、慕はしく思ふ山家の人の情を云へり。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは、春は

家をたちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。

「すべて月花をさのみ目にて見るものかはと」は、總じて花月を愛翫するは、目に見る事のみには非ずして、心に想ひて之を味はふにあるものなりと云ふ意にて、「見るものかは」といふ詞、烈しく極端なる語勢なり。「春は家を立去らでも」は、花の事を云へるにて此の詞の下に、花を思ひと云ふ言を添へて聞くべし。「月の夜は閨の中ながらも」は、前の花と同じ樣の意なり。「思へるこそ」は、花と月との二つに係れり。「いと頼もしうをかしけれ」は、花月に對せる情の深切なるを賞し、これをおもしろき事とせるなり。

よき人はひとへにすける樣にも見えず、興ずる樣もなほざりなり、片田舍の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢ寄り立寄り、あからめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては大なる枝心無く折りとりぬ。泉には手足さしひたして雪には下りたちて、跡つけなど、よろづの物よそながら見る事なし。

「よき人」は、貴人にて、次の田舍人に對して云へり。「ひとへにすける樣にも見えず」は、純一に其物を好むやうにも見えずにて、「興ずる樣もなほざりなり」は、其物を見ておもしろがり悅ぶ有樣も、等閑冷淡なるやうに見ゆるを云ふ。「かた田舍の人」は、片よれる田舍の俗人なり。「色こくよろづはもて興ず」とは、萬づに物を愛する有樣が、あらはに厚かましきにて、色こくは俗に「シツコイ」と云ふが如く、至て正直に熱心にはあれど、おのづから風致に乏しきを云へるなり。「花のもとには」より「折りとりぬ」までは、皆田舍人の心なきしわざを云ふ。「ねぢより立寄

り」は、强ひて花の下に分け入り近づく樣を、とさらに惡口を以て云へるなり。「あからめもせずもりて」は、目も離さず花を見つめ居るを云ふ、貴人などの花を見るは、遠くこれを望み居て近くは立寄らず、ふと見ればさしも花を愛せざるが如く見ゆる中に、其の情は却りて深きが、田舎人の直接に賞翫する行爲と反對なるを云へるなり。「泉には手足さし浸して」は、夏の納涼、「雪には下り立ちてあとつけ」は、冬の雪見の樣にてこれも亦、田夫野人の卑俗なる行爲を云ひて、前の花見の事の類例を擧げたるなり。さて此の下に賀茂祭を見る樣に、貴人と田舎人との差別ある事を云ひ、又それより人世の無常を觀ずる事をのべたれど、略す。

上件の事どもは、最初にも云へるが如く、人情の雅致風韻と云ふ事を主として、論じたるにて、



表面より云へば、花の盛、月の明、男女の和合、花月の宴會、皆これ人の好む所にして、これに反するは正しき道にあらず、清貧を樂しむと云ふが如き一種奇異なる好事家の類にて、俗に云ふ負惜しみに過ぎざる如くなれど、よく〳〵これを味はふれば、敢て然らず、宣長の玉の小櫛にも既にあはれと云ふ事を論じ置けるが如く、人情の美は所謂理想的のものにして、法律上の正當以外に存する人道の却りて貴重すべく、其の人情の切實なる感を養ふ方より云へば、此の兼好の論旨大に風味あるを覺ゆ、讀者果して如何なる感あるか。(終)



# 紫式部日記講義（三十二）

井上頼文

御ゆどのは、宰相の君、御むかへゆは、大納言の君源運子　ゆまきすがたどもの、れいあらず、さまことに、をかしげなり。

釈義

○御ゆどの　御湯殿あり。御降誕の皇子に、御湯を浴せたてまつる事を、たゞ、御湯殿とのみ略して、申しあらはせり。七日の間は、一日に、朝夕一度づゝ浴せたてまつりて、さま〳〵の儀式あり。家屋雜考に、湯殿と、湯殿の上のことを、くはしく記したれば、こゝにかゝぐべし。

湯殿湯船

湯殿の造は、中昔以來、今と異なる事なし、垂板敷にして溝あり。湯船を居う。建武年中行事六月十一日の條に、とのもんれう、御湯まゐらす御船にとるなり。めすほどに、うめたりとみえ、又、御湯かたびら、御手水の粉、一かはらけなどゝもしるさせ給へれば、高貴の家々とてもさして異なる事なし。

湯殿上

湯殿の上といふは、湯殿つゞきにある、一間の名なり。大内のは、御湯殿よりは、少し引きはなれて、女房達の勤仕せらるゝ所なり。御湯殿の上の記とて、後柏原、後奈良院の頃より、慶長頃までの女房達の日記、今、猶寫し傳ふるものどもあり。高貴の家々、かならず此一間あり。永享九年行幸記に、室町御所御湯の殿のうへの御調度どもをしるして、御硯、御火鉢、御茶湯棚、金の御建盞、銀臺、御茶器、御茶

筅、象牙御茶杓、銀の御鵜飼茶碗、御食籠一對（中略）御はんざふ、手洗島わりこ、作り物折、御杯の臺などしるされたるにても、その一間のさま押し知るべし。

と見ゆ。

○御むかへゆ　御むかへ湯とは、皇子に、うぶ湯を浴せたてまつる時の相手をいふ。源氏物語若菜の巻にも

御むかへ湯に、おりたちたまへるも、いと、あはれに、うち〳〵のことも、はのりたるに云々

など見ゆ。

○大納言の君　源の遍子のよび名なり

○ゆまきすがた　湯巻姿なり。御湯奉仕のため、衣服の上に、白き、すゞしの絹にてつくれる湯巻を着たる姿をいふ。すべて、湯巻は、貴人の入浴の時、垢など流すものゝ着たるものなり。即ち、後世、下ざまにて用ゐる前垂のごとく、衣裳のよごれざるため、御湯殿に奉仕せざる女官も着用したりと見ゆ。

○れいならず　平常の容子とことなるをいふ

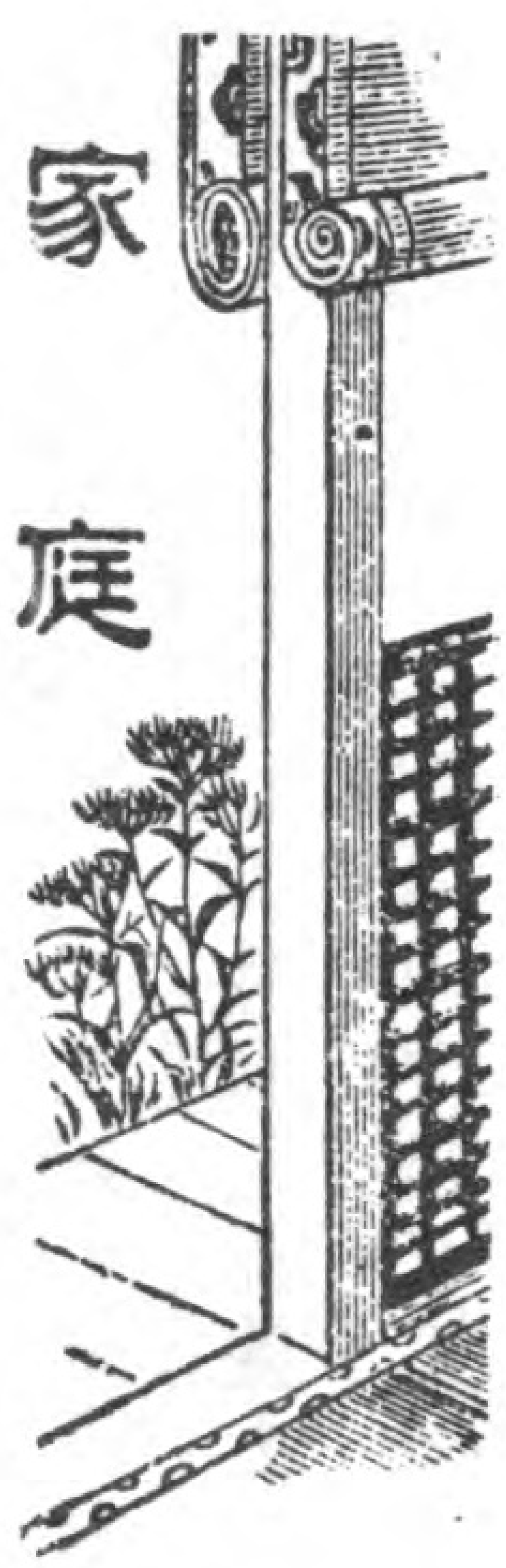
○さまことに　やうすが別段になり

○をかしげなり　をかしは、おもしろしの意あり

譯解

さて、御湯を浴せたてまつるは、宰相の君といふ女房にて、その御むかへ湯の相手は　大納言の君とて、實名を、源の遍子といふ女房なり。湯巻を着たる姿なども、つねとはかはりて、一段と目だちて、うつくしく、實に其のやうすはおもしろげ也。






# 家庭改良に關する意見

磯部 武者五郎

我邦の家庭は改良せざるべからずとは、誰人も皆いふ所なるが、其の改良とは衣食住一切を變更することとなるか、又は家の組織を變更することとなるか、未だ明瞭なる解決を見ず、固より衣食住の變更も組織の變更も必要なり、されども其の變更の程度、及び、變更の方法等に至りては尙ほ漠として明説を得ざるなり、依て余が平素此の點につき思ひ居る所の一班を陳べて大方の敎を請はんとす。

家庭の改良につきては、二個の大綱あり。此の大綱を骨子として家庭に於ける諸般の事を改良せば、恐くは誤りなかるべし。其の一は家の組織に關すること。二つには衣食住に關することなり。組織に關して尤も心得べき大切のことあり。そは我邦の家といふものは歐米になきものにて、我邦特有のものなり。又歐米の家庭即圓滿なる家庭、英人が誇稱する「ホーム」なるものは我邦になきものあり。此の二つを搗き交ぜて家庭を改良すること肝要なるべし。先づ我邦の家といふものは、歐米にていふ家とは大に異れり。歐米にていふ家は、玆に夫婦結婚して一家を持てば子を生じ、夫婦間に子女生れ、その子女又結婚して別に家を持てば、又家を生ずるなり。かくして夫婦の老死するときは、財産は遺言及び其の他の方法に依りて分與贈與等せられて、其の家は無くなるなり。故に歐米にていふ家は、夫婦一代の間のものにて財

產を主體とせるもの也。然るに我邦の家は、夫婦一代間のものにあらずして祖先より子孫に傳はるものにて、生命ある家なり。又單に財產を主體とせず、財產なくとも家の命脈は傳はることを得るあり。かくの如く古來我邦人は家を大切にし、家を重んじたることにて、又家門とか、家風とか、家族とかいふ語の重んぜられたるを見て知るべく、彼の「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」の歌の如きは、此の家を重んじたる精神教育なり、故に古來の風習をして、主人も家族も家に對しては其の身を犧牲にして事へたることにて、家に對して相濟まぬとか、家の爲には身命を捨つるとか爲したり。故に我邦の家は先祖より子孫に傳はる命脈あるものと知るべし。現今の法律にても民法上に戶主權を確定し、長子相續の法を定められ、又絕家再興等のことあるは、矢張我邦古來よりの國風に基き此の命脈ある家を主とせられたることにて、法律上に此の如き規定あるは歐米になき所なり。此の如く我邦の家は歐米諸國の家に異るは善きか、否なるかといふは別の問題とすべけれども、畏多くも　帝室の萬世一系にわたらせ給ふも又此の命脈ある家を重ずる國風と歸を一にすることならんと思惟し奉れば、兎に角我邦の家の組織は何處迄も此の國風を主張せざるべからざるなり。

歐米諸國の家庭殊に英人の誇稱する「ホーム」に至りては宜く之を學ばざるべからず、吾人は勉めて一家族團欒して圓滿に愉快に生活することを謀るべし。而して此の如くなさんとて、歐米諸國の家の組織を學びて財產を主體とし、夫婦一代限のものとなすは實に國風を變更することにて尤も不可なり。此の事は充分愼まざるべからず、一家族が

團欒して快樂に生活を送らんには、先づ一家の者能く徳義を守り、相互に堪忍し、苦樂を平等に爲すこととせば、圓滿優美なる家庭を作ることを得べし。

家を治むる者能く以上の事に心を着け、我邦の生命ある家に、團欒和睦の「ホーム」を作り出さば、洵に優美高尙なる家となりて國風も一層美を加ふるに至らん、所謂「敷島の大和錦に織りてこそ、唐紅の色もはえあれ」の御歌の如くならんかし。

(以下次出)

## 女禮心得草 (五)

日本女學校
禮節助教授　大谷喜代子

### 上、中、下の差別

上とは上輩の事で、我より位の上ある人をいふので、中とは等輩の事で、我より位の上下の隔て無い同じ位の人をいふので、下とは下輩の事で、我より位の下なる人をいふのです。

しかして、其上にも上中下の差別があり、中にも上中下があり、又下にも上中下の分別があります、此品々の差別をわきまへて、其人に對しますのが、即ち禮法であります。

### ○上輩の禮

これは上輩に向ひまして致します時の禮の仕方でございます、誠に上輩に向ひましては公と、私の分ちが肝要であります

天皇陛下　皇后陛下　皇太子殿下は申も畏し諸皇族の御方々、其外夫々官位につけて誠忠なる人を臣民としては殊更に敬はなくてはなりません、是が公儀の敬ひであります、それから自身の父母祖父祖母は勿論の事、伯父伯母、兄姉、又物の師、

神官、貴僧の類を敬ふのが私の敬であります。

この差別は只今の所では亂れぬいて居ります、其しるしは左の三ケ條に付て考へれば分ります。

一、公儀、又他人の前をも憚りませんで、私の敬ひをする事

一、他人の前にて師匠に對する禮をなす事

一、他人の前にて神官貴僧及び物しり人に對して私の敬ひをする事

右のやうに亂れぬいて居りますのは、禮法を教授する者の正しい事を教へませんで、名前ばかり小笠原某と云ふて、其學科の質問には答へが出來ないのが教育會の講習だの、私立禮法小笠原支場だのといつて、或は女子大學の講師だのといつてすまして居り、又正統の授業を知らないで、小笠原流といつて國々に教へて居るのが第一の原因で第二には悉皆僞りの授業で教へられた女教員方



が、作法は小笠原教場にて一通り修め候　履歴書に書かゝれて居る、其教員方から教授をうけらるる、各地方の女子等の禮法を習はるゝのが、現今の上中下の差別のみだれました大きな原因であります。

上中下の事は大切でありますから、一寸世間の作法教授法の内幕を申しておきます、何卒私が申します事が違つて居りませば、千里をへだてた所までも御わびに參りますから、御辯解をねがひますが小笠原流については、其全體の教授法を御習ひになつて、時勢應用には小笠原でなければならぬ。小笠原も正統でなければいかぬ、といふ所に御氣がついてからの事に願ひます、正しく無い者にだまされて居る内は、とても御辯解もわたくしの申します詞を御きゝとりにある事もなりません。

## 第一　最敬禮　跪禮

此仕方は上が上の御前に進みての禮法なれば、最も敬ふべき禮といふのであります。

古代の家作にして床によりたまふの事と同じく、新らしき建築家屋にて、椅子によりたまふ御前へ進みましての禮法には跪禮でつかまつります。

まづ其御前に進みます時、其かまへ内へ入ります時兩手を膝の下までおろし、腰をかゝめ面をふせまして、上が上の御顔を見ぬやうにして、さて進み入りまして、近くまゐりました時、立どまりまして、右の足を、左足よりあとに半足さげまして右の膝より跪づき、次に左膝をひざまづきまして、兩手のひらを下につきまして、頭をうつぶして拜禮をいたします、退きます仕方は、立ち上りまして、左足を引きまして踏そろへて右足とも一足づゝひいて、三度目に右足を左足のあとの方へずつとひきまして、左足をかぶせてうしろをむきますと、自身の後が直に御前に向かぬやうにあります、しかして立かへります。其時すぐむいては甚だ失禮なことでござります、たゞのたちゐにも

●この心得が肝要で、神前の方、貴人の前へ後をすぐにけむぬものです。

## 第二　最敬禮　匍匐禮

此仕方は上が上の御前においての禮法で、匍匐禮とかいて、ハラバフ禮とよみます、只今の平伏の禮の事です。

古より萬世かはらずに行はれて何しても廢する事の出來ないのは、此平伏の禮でござります、たゞみ敷は勿論のこと、たゞみじきであい場所でも殊に恐れましては、きつと知らず知らず致すやうになりますのが此平伏の禮法です、其仕方は、兩手をついて、たゞうつぶきまして頭を地につけてす

るのが平伏の禮の仕方であります、是を只今では日常世間に用ゐてをるのですが、甚だしいあやまりで同じ位の人にも下の人にも致して居ります、貴人に致しますほかは、用ゐませぬのが本統であります。

こまかい致しかたは、つぎの條に御話しいたしませう。

## 産所式(承前)

東京女學館講師　有住常子

### たらひの事

用意すべき盥の數は三つあり、上の位には外を胡粉にて塗り、雲母にて松竹鶴龜を繪がく、內はぬらず、上下にかつらを入るゝなり、たらひを三ッ使用するは、一つは産婦のたらひ、一つは小兒のたらひ、一つは胎衣を洗ふたらひなり、何れも大きさ、深さは定法なし、よき程にすべし。

### 湯の通ひ桶

湯をはこぶために桶三つを使用す、是は曲物にて高さ八寸、口の廣さ一尺五寸、二重に曲て上下かつらを入るべし、外を胡粉にてぬり、雲母にて松竹つる龜をゑがくべし、內はぬらぬなり、一つは湯殿より湯をくみて來る桶なり、一つはおし桶の湯をうつし來る桶なり、一つは水をくみ入れ來る桶なり。

### 包みぎぬ、入かたびら

胎衣をつゝむ包みぎぬは、白練一幅四方をあはせにぬふなり、

胎衣を包みて、其上に又入かたびらを桶の內に敷きて、包みたるを入るゝなり、胎衣包の入かたびらは、白練二幅四方ひとへなり、端ぬひをすべし

四つに四方に折りて、胎衣桶の内にしくものなり。

胎衣桶の入かたびらの鎮子は、通用の錢を紙に包みて、封じておもしに置くなり、

胎衣包の入かたびらの上のつめ物には、わたを用ゐるべし、

### 胎衣桶の事

胎衣桶は曲物なり、杉の木を用ゐるべし、杉を用ゐたるは、早くくさらぬ物ゆゑに用ゐるなり、高さは八寸程、口の廣さ七寸程、あつく二重に曲げて、蓋のきわともに三所にかつらを入るべし、ふたは切ぶたなり、外を胡粉にてぬり、雲母にて松竹鶴龜をゑがくべし、

胎衣をけの外箱は常の水桶などの如く松の木にてつくるなり、

切ぶたとは、かぶせぶたにあらで、くひこむやうにふたのうらに、身の方へ入るほどに、のみ入りあるをいふなり、

えなつゝみの入かたびらの圖　略之

えなをけ及びとばこの圖　略之

## 裁縫（實修）

神奈川女子裁縫學校長　中村むめ子

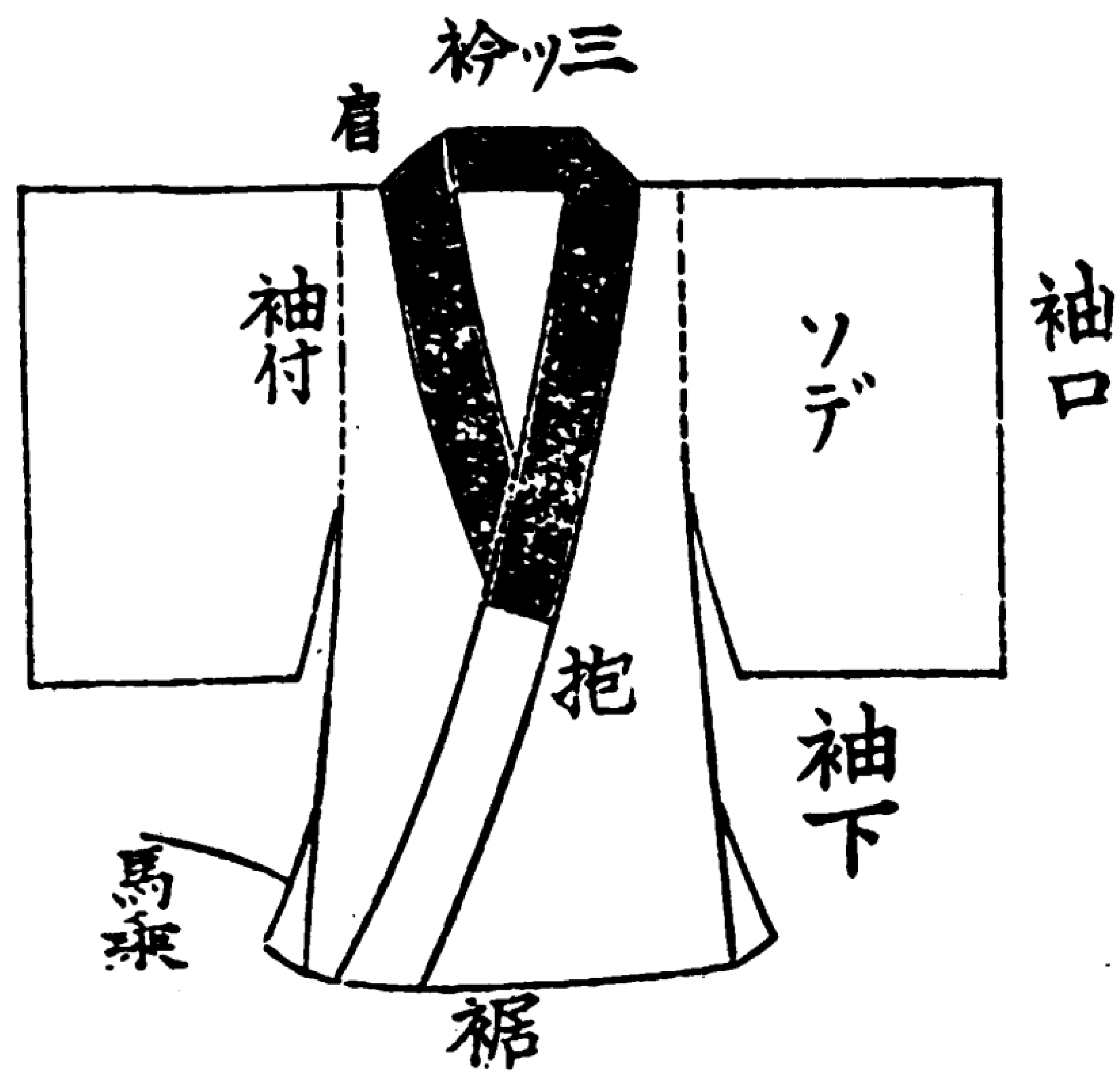
### 一つ身襦袢の縫ひ方順序

●袖　右左　表を出して、袖下を始めに極めて、浅く一度縫ひ、引き返して、今度は袖下の箆の處を縫ひます。それから袖口の方を三つ折にして、表に出る針目を少さく、間を三分づゝはなして兩袖とも絎ます。それから袖幅を度りまして其まゝ袖は表を出してたゝんで置きます。

●身頃　次に身頃は中表にして、前と後と合せ、後

身を手前にして、上前は馬乘の篦より脇明の篦まで縫ひ、下前は脇明の篦より馬乘の篦まで縫ひ、よく糸をこき、此處はほころびの切れ易き處ですから、能く糸留をなし、又縫ひ返しを致します折は前身の方に返し、縫ひ端の一枚を後の方に折返して、かくし躾をかけ、馬乘の處を耳絎にするのですが、表に出る針目は成べく小さく、間は五分づゝはなして綴ぢつけ、次に裾絎をします、先さに五分づつ絎代を取りました篦の處を折り、次に其五分を二つに折りまして、上前から、後、下前と順に絎て行きます、表に出ます針目は何時もながら小さく、間は三分づゝはなします、其次に前幅を篦の通りに折りまして、襟も付けます方を二分五厘の縫代に折をつけ、襟山と脊と合せて針をさし、襟肩の處は少し襟の方をゆるまして待針をさす外はどちらも、當分に合せて、下前の衿先より縫ひ始め、衿肩の處は極めて小針に脊の處まで縫ひましたならば能く糸をぬきまして一針返し、又先きに縫ひすゝみます、而して衿の付始めと付終りとは、よく縫ひ留をなし、返し針を致します夫から衿を付終りましたら衿の方に折を返し、衿巾を極めて左右の衿先きを、衿丈より一分先きの處で縫ひまして裏の方に折を返し、引き返して衿山の處に針をさし、猶所々に針を打ちまして、下前の衿先から絎けて行きます、三つ衿の處は細かに絎るのであります、次に袖を取り袖幅の篦を折りまして、袖山と肩山との篦を合せて待針をさし袖付の篦と篦と合せて袖を付けます、付け始めも終りも能く針留を致しませぬと、ほころびが切れますから、注意なさいまし、それから脇明と袖のふりとを耳絎して上衿をかけますれば、一つ身襦袢は出來上りましたのであります。

一ツ身襦袢出來上リノ圖




# 豆腐料理（續）

割烹學校講師　石井湧太郎

## 砂金包の拵やう

この拵方は、豆腐一丁程を極細かに鍋の内にて崩して茹でるのです、時間は大概十五分位でよろしい、豆腐が茹だりまするど、其の湯が澄で參ります、湯は充分多く致して置くのです、夫れから其の湯を笊などで漉して豆腐の水氣を能く去り、汁煮、砂糖、醤油、味淋で煮染まして、木耳を線に切つたのと、慈姑のいてふに切つて茹たのと、銀杏の小口ぎりと、以上の三品を、別に砂糖、醤油、味淋で煮付けましたのと混合てそれを笊に揚げて煮汁を絞りまして少しづゝ湯皮に包みて、干瓢でくゝりますと、丁度巾着の様になります、夫れを以前の絞りました煮汁で、一度煮まして食すのであります。

## 摺流し豆腐の拵やう

豆腐を能く摺鉢ですつて、また葛粉を入れて摺りましたのを、今度は味噌汁の内へ摺り流すのです、

### おし豆腐の拵やう

豆腐を四角のまゝ、そつと布に包みまして、板を斜にして其の上に並べ、つぶれぬ程の壓重を置きまして、餘程よく水氣をしぼり、生醤油、酒を等分に合せて煮染め、小口切にして出すのであります

### 金砂とうふ拵やう

先づ擂鉢でよくすりまして、玉子の白味ばかりを一二個つなぎに入れて、砂たうと食鹽で味を付け薄き器にのばし、上に黄味の茹でたのを水嚢で漉しかけ、砂子の如くして蒸すのです、切形は小色紙の如く切るのがよろしくあります、水嚢の漉し方はお知りですか、知らない方があるといけませんから記しませう。

### 水嚢の使ひ方

水嚢は馬尾篩とも書きます、馬の尾の篩と言ふので、使ひ方はあみ目を斜に手前の方にして、飯杓子で漉すのです、決して布目形に用ゐてはなりません、損じが早うございます、其所で前の豆腐に漉しかけますには、豆腐を極く薄き器に伸して其の上に馬尾篩をかぶせ、其の上から茹た玉子の黄味を漉して掛けるので、一面に厚薄なくかけるのであります。

底ひなきふちやはさわぐ山河の
あさきせにこそあだなみはたて
素性法師

こまとめてなほ水かはん山吹の
はなのつゆそふ井出の玉川
藤原俊成



# 漫録

## 猫と鼠

帝國教育會理事　河村理助

猫は何れの家にも畜ふて居るものであるから、誰も其形狀性質は承知して居る、併し之を學問的に見ると、餘程面白い所がある、猫の總ての形と云ふものは、鼠を捕ると云ふことゝ、皆關係を持つて居る、今頭の方から話を爲て往くと、猫の耳は直立して前を向いて居る、之は鼠を捕る時に、極く幽かな音でも聞判ける爲に、此の如く直立して前を向いて居るのである、之に反して他の兎とか馬とか云ふやうな……臆病な獸類は、耳が大抵後脊へ向くことが出來るやうになつて居る、之れは己れを害せんとするところの敵が、己れの後背より來る其の音を聞かむが爲である、猫は他を惶れるよりは、鼠の如き餌食を獲る肉食獸である故に耳は前の方へ向く必要がある、其れから眼は（猫の眼ですナ）御承知の通り、瞳が晝と夜とに依りて大變大きサが違つて來る、夜になると瞳が非常に開いて、僅かな光線で物を見ることが出來るやうな、大きな、強い、視力を持つて居る、此れも矢張り暗夜に當りて、鼠を捕ふる際に、夫れを見付るに必要なのである、所が其鼠と云ふものは、所謂鼠色と云ふもので、極めて見付難い色であるのである、暗い所に彼樣な色をして居つては、中々見付けることが出來ない、其を捕ると云ふのであるから、視力は頴敏でなければならぬことは明白である、其から顋の肉が非常に能く發達して居

る、之は鼠を捕かまいて、嚙殺すのに大變齶に力を要するので、其で彼の如く顋の肉が發達して居るのである、其から猫の歯は御承知の通り非常に尖がつた歯で有つて、鼠を咬み殺し食ひ殺ろし…嚙裂くに、便利に出來て居る、之に反して草食獸(草る喫べる獸ですナ)其他鼠の様な、物を嚙じる獸の歯と云ふものは、猫の歯とは全く違つて、猫の歯のやうに尖つて居らない、エー……其れから猫の舌といふものは、御承知の通り舌の面に非常に「ザラ〳〵」した刺がある、之も鼠などを捕る時に、若くは他の肉を嚙べる時に、山葵下で擂下す如く甚だ便利に出來て居るのである、其れから猫の鼻は亦大變に匂を嗅ぐに頴敏なものであつて之も草食獸には夫程必要は無いけれども、猫は生臭い動物を喫べるものであるからして、鼻の頴敏と云ふことも必要なのである、夫から今度は足に付て見ると云ふと、猫の足は孰れも知つて居る通り、四本有つて、其ゆびには非常に尖つた、而して曲がつた爪が生いて居る、矢張鼠を捕ふる時に爪で壓へッマリ其の鼠の體を捕まいると云ふ爲に必要があるのである、其のみならず、猫の足の裡には、肉が隆く尖起して居る、此肉の突起といふものは何によるかといふと、全く其鼠を搜しに出かける時に、音の爲ない様に……「ソク〳〵」と歩るいて往つても音の爲ない爲めに出來て居るのみならず爪と云ふものも、他の馬とか犬とか云ふやうに外へ顯して居ないで、隱れて仕舞つて居る、故に板の間などを歩いても、些ッとも、音を立てない、此ういふ都合の宜い足だから、側へ寄つて來られても、鼠は容易に悟ることが出來ないのである、夫れから猫の身體は如何であるかと云ふと、極めて、敏捷な運動に適する様に成つて居

る、屈曲も自在である、速に駈廻るにも都合の宜いやうに成つて居る、之も鼠を捕ると云ふのであるから、擧動が敏捷でなければ捕ふることが出來ぬのは明白なことである、さて外面の身體の總ては如斯工合に……鼠を捕るといふに適合して居るのみならず、體の內部の構造も、其性質と誠に一致して居る、內部の話は中々、緻密いことだから、一々此處に話は出來ぬが……例へば消食機關(喫べものをコナス道具)なども、他の草食獸等とは構造を異にして、肉を消化するに都合の宜いやうに出來て居るのである(他の細いことは追つて話すことに爲やう)

是から鼠の話を爲ませう、鼠といふ者は誠に臆病な獸であつて、能く人や猫の目を掠めて、臺所などへ出て來て、物を盜んで、イタヅラな獸である世に首鼠兩端など丶言ふて、壁の間から首を出したり、何かして實に臆病な性質を現して居る、此獸も能く其構造と性質と比べて調べて見ると面白い所がある、前にも言ふた通り猫やなんかに捕らる丶恐があるから、其體の色が暗色であつて、目の付かぬ樣に出來て居る、其れから、趾の爪や何かも能く狹い塀の上などを渡ることの出來るやうに構造されて居る、其耳は割合に大きくて前へも後へも向くことの出來るやうに成つて居つて、己れの敵が何れの方面から來ても、直ぐに其音を聞付けることが出來るやうに成つて居る、全體鼠と云ふ獸は、動物學上では嚙齒類、(嚙は「かむ」といふ字、齒は「ハ」と云ふ字)の獸であつて、重に堅い穀物とか菓物とかを嚙じる性質を持て居るものである、(生臭いものなどをも食べるけれども……大體の性質はソウ云ふ果實、穀物を食べるのです)其最も面白いのは、嚙の構造で鼠の齒は前齒が二

本宛上下にある、其前歯の構造を見ると、恰度大工の使ふ鑿の形をして居る、前面には琺瑯質と云ふ堅いものがあつて、裏面は石灰質の柔かき物から出來て居る、恰も大工の使ふ鑿が一方は鋼一方は軟鐵から出來て居ると同じものである、其で堅いものを嚙じれば嚙じる程、歯は恰も砥石で鑿を研ぐが如くに減つて來る、それで益々先が切れるやうに成つて來る、斯う云ふ歯でなければ、堅い物を嚙ることが出來ぬのである、鼠の歯といふものは他の動物の歯とは趣きが違つて常に生長するものである、其故に歯が段々延びて來て、遂には口が合されないやうに……嚙られないやうに成つて來るから、食物を食べて居なくとも、何か堅い物を嚙じらずには居られない、或處に面白い話がある、或時鼠が下歯を一本折つて仕舞つた、ソウすると其下歯と向ひ合つて居る上の歯は、相手が



無くなつたものだから、物を嚙る時に減らない、其れば上歯が段々延びて來て、口が合されないで嚙じられないやうに成つて仕舞ひ、其鼠は到頭餓ゑ死してしまつた、と云ふことがある、此事を以ても鼠の歯の狀體を證明することが出來である、而して猫などとは違つて、前歯と奥歯との間に隙間が有つて、奥歯は其前歯で嚙じつたものを細かく碎くことの出來るやうに成つて居る、肉食獸は前歯が少なくつて、寧ろ前歯と奥歯との間にある犬歯と云ふものが大變發達して居る、其れが鼠のは全く缺けて居る、是等を見ても猫や犬などとは、大變性質の違つたものといふことが明かである。



# 栗山ふさ物語（上）

菊亭

わたくしは七十四歳になりました昔の事は能く覺えて居りません十七の年に父とも〳〵江戸へ參りまして生國は信州小縣郡で、父は書をかきまして其頃唐樣をかきました御存じの通り御家流でなくては諸家へ御奉公が出來ません眞田樣の御藩の佐久間修理と云ふ方が父を引立てまして築地の狩野榮川さまへも能く參りました其緣りで私は狩野の塾頭をいたして居ります小林と云ふ方へ奉公いたしました侍女と云ふやうな役で佐久間樣も能くお出になりました萌黄のぶッ割羽織で純子の樣な裾の細い袴を召して長い朱鞘の刀で頭は惣髪でれ玄關で「修理」〳〵と仰やいます男ぶりは惡う御坐いましたよお妾のお花さんと云ふも私は存じて居ります、佐久間さまがお在になつて蕎麥飯を召上つて、蕎麥飯と申すは蕎麥の三角なのを御飯に炊ますソレが好物ですお話の處へ御本丸のお坊主衆で内山何とやら名は忘れましたがお出でになつて三人で夜るまでヒソ〳〵お話で御歸りになると主人が申ますには内山は池の端に住居致して居るがお前をどうか貸してくれいと云依賴である當家も人少なで迷惑であるが内山とは別懇の間柄で否と申譯にもまゐらぬどうか内山へ往て貰ひたい内山に娘がありますが其の相手に致したいと存ずるのでお前は書をよくかくからそれが先方で氣に入つた譯ト斯う主人が申ます故、主命で據ろ御坐いませんん次の日内山へ參つて見ましたが三十俵取りのお坊主では御坐いますが大層な生活で、主人は外出いたす時は黃八丈のお召に黒い羽織位で別段に變りはいたしませんが家に居りますと恰で大名の樣

で鼷鼠の羽二重の袷を重ねまして献上博多の帶、紺純子の坐蒲團を敷きまして花菱の金紋散しの烟草盆を前へ控えます、坐敷も二階が五間御坐います池の見えます處が書院で九尺床に金襖の違棚がありますす折廻して入側になつて次の間がありますす其次が主人の居間で三疊の上段床に琵琶棚が付いて居ります唐紙は京の應擧が畫きました竹林の七賢で御座りますと承りました主人付の腰元が三人皆な十七八の美しい方を高髷の島田に結せまして帶は揃への黒びろうど着物は思ひ〳〵でいづれも振袖で御座います、奥樣のお居間が下座敷で御ふだん着が小紋縮緬お帶は本國片外しの樣なお頭で三十二三の方で私は初めてお目に懸つた時吃驚いたしたのはお美くしいのなんのて畫にかいた樣な方でお茶の間の前に小さい朱塗の春日机があつてソレへ湖月抄を載せて讀んでお在遊ばすお召仕の

女中が三人、御勝手の女中が二人用人の樣な方で青木仙藏と云方と若黨が二人下男が一人、斯云大層なお暮し其頃で申せば先づ五千石位のお旗本でも斯う立派には參りませんお孃さまのお部屋は庭の向ふにズーと離れまして八疊が二間御座います年は十七八でこの方も奥樣に似てお美しい方で紫の矢筈飛白を召して萌黄純子の帶を立矢の字に結んでお立派な事でお粂と云鰻屋の娘がお氣に入りで始終お傍に付いて居りました、私はお孃さまのお付になりまして離亭に居りますが何も用事は御座いません主人は毎日お城へ上りまして七ッ時分にお歸りになります表の勤めとか申ましたが御老中方の御用に關係いたして居ります樣子で諸大名方より毎日お使者が參ります御進物も澤山參りましたがお目錄が多のいで廣蓋へのせて御居間にありますがいつでも奉書包が七ッ八ッ載て居ら

ぬ事は御座いません、私が參つて十日程も經ました頃お孃さまの縁談がありまして下谷中町のお醫者の二男で幸巡と云ふ方で廿一才になります、兩國の茶屋で見合をなさると聟さまは立派な方で學問も出來ますし醫者もお上手と云ふ方で女中達は皆〳〵お浦山しい事でお孃さまは御果報なことゝ言ましたがお孃さまはそれを嫌つてあんな方は否だト申します、主人も奥樣も大さう心配してどうも早苗(お孃さまの名)の吾儘にも困ります人柄も宜學問もあり家業も醫道にも達して居る者をなせ嫌ふのであるか彼の人ならのち〳〵出世をするに相違ありませんソレを嫌ふと言ふは何か他に子細があらうどうかお房より内々早苗の心中を尋ねて貰い度ト斯云主人の命で御座いました、また奥樣が内證で私を呼びまして早苗は當春も加賀樣の御藩で荒木左内と云方と見合をして其方も立派な御人であつて百石お土產に持てお出なさる筈ソレをも嫌つて媒介に愧をかゝせたがどう云譯で撰嫌ひをするか能く尋ねて貰いたいモシ早苗が斯云人をと云望があらば隨分私も心配をしてやりませうトお仰るので私も早速お孃さまのお部屋へ參つて見ますると眼のふちを赤くしてどうか泣いてお在なされた樣子泣く程嫌ふと云ふは不思議な事と存じましてお粂の居りませんのを幸ひお傍へまゐりました　(未完)

## しひがたり　(その三)

本居苔水

ピアノ、ヴァイオリン、の氣高さは云ふも更なれど、わが國風の物の音にては、猶琴のしらべこそ、こよなう優なりけれ。はなの朝、月のゆふべ

爪音をかしう掻きならすらんすさびには、梁の塵ならぬ此の身さへ、そゞろに浮かれ立つべくて。

三味線と云ふ物、可笑からぬにはあらねど、あやしき唄どもに合はせて弾けばにや、少し品下りたる様にぞ覺ゆる、稀には、やゝ品高き調もあれど大方は、よき人の前にては物すべくもあらぬふりにて、げに、飽かず口惜しかりけり。心あらん此の道の師は、よき唄、よき調を、早く作り出でよかし。

何れにもあれ、さまで深からずとも、女と生れたらんには、音樂の道一かどは心得たらなん。あやしの賤がはか無きすさびすら、そゞろに、心にくき習ひなるを、まして、よき人の、よき物の音に合せて歌ひ出でたらん、ゆかしからぬ業かは。

去年の秋にやありけん、旅の空なる頃、ほのかなる夕月の影にあくがれて、草葉の露踏みしだきつつ、鄙のあぜ道を分け入る事ありしに、こゝら鳴きしきる虫の音の奥に、それかあらぬか、妻音幽かに聞えければ、例のみやび男がすき心には有らねど、ゆかしきまゝにたどり行けば、げに、生垣うちめぐらして、心にくゝ住みなしたる庵ありけり。彼の爪音は此の内よりぞ、洩れ聞えたる。しばし佇む程、やう〳〵更け行くまゝに、月と共にいとゞ澄みゆくしらべ、をかしとは世の常なりけり。掻き鳴らすらん琴ならなくて、いとをかしう引かれゆく我心の、やがても空にありはてしは、あはれ、雲井の調故にや有りけんかし。

少女が髪の、えならぬ飾に導かれて、まことの花と思へるにや、重げに挿したる簪の作り花に、胡蝶の舞ひ狂へる様、いとうるはしかりけり。櫻狩のかへさにやあるらん、道行く人の黒くつやゝか

なる髪の上に、花びら一つ二つ、散りとゞめたるも。

女の、酒に酔ひしれたるは、いと憎くて、見苦しとは云ふも愚かや、起居らうがはしく、はした無き事をさへ口ばしり、常のつゝしみも失せたる、百年の戀も醒めはつべし。一向に下戸なるこそ女はよけれとは、並ひが岡の法師も諾ひてん。

花瓶に花挿す業は、をかしきものなれど、それも、あまりにこと〴〵しう作りゆがめたるは、少し疎ましかりけり。態とめかしからず、さりとて、卑しげならず活けたらん枝ぶりには、自然のあはれも籠りて、床の眺めも、榮えまさるべきに。

吾妻コートと云ふ物の下より、えび色の袴ほの見えたるは、平相國が法衣の下の物の具よりも、げに、異様の心地せらるべし。金糸ふさやかに掛けて、島田と云ふ髷高く結ひたる女の、裾みじかに袴着けて、靴をさへはきたる。垂れたる髪の波立ちしをリボンにて結び、眼尻に紅さしたる、まして白き物に臙脂をまじへて、眼のあたり櫻色にほのめかしたるなどは、美しとは見るものから、これも、かつはいみじう異様なりけり。

あらがねの土も裂けなん夏の盛に、巾廣き帶、そびらに嚴めしう結びて、かしこまり居らんは、男の知らぬ苦しさなるべし。さりとて、細き帶一筋にてくつろぎ居らば、世のそしりもうしろめたからん、あはれ、女といふもの、前の世に如何なる罪ありてか、かくは宿世のあさましかりけん。

何業にもあれ、小聲に唄などうたひつゝ物するは卑しげなりけり、物縫ふ女には、まゝある事なれど、それも、唱歌などならばいさゝか、恕さるべき方も有るべし、あやしき流行唄どもならんには、如何あらん。糸とり、麥搗きの、類は云はず。

女の假粧するには、紅といふ物、無くてかなはぬものなるべけれど、餘りに濃くつけて、口のあたり青くきらめきたるは、馴着かしげ無し。ことに、紅付くる前に墨を塗るならひは、如何なる故にかあるらん、人の口は、紅なればこそあれ、青き、黒き、何れも氣遠くて、疎ましかるべきを。白き物付くるに、ことさらに、襟もと山形に塗り殘して、やゝ黒き膚の見えたるは、見苦しかりけり。また、流石に顔にはうすく付けながら、おとがひの邊より下は、いちじろく濃くして、其境の際立ちしは、世に秀佳と云ふ、俳優のしはじめたる事と云ひ傳ふれど、これも目安からず。何れにもあれ、わざとめかしき粧ひは、なか〱に、無きにも劣りたるべくや。

女の髪結ひと云ふ者出で來しは、寶永よりこのかたの風なれど、そは、卑しき者の髪を結ひ歩きしにて、なほ、よき人は、大方手づから髪を上げたりし樣に物にも數多見えたりけり。此の烈しき往來ある世には、みづから物せん事も難かるべけれど、異國風の手輕き束ね髪をさへ、人に上げさする姫達は、いとこそ心得ね。よき人は、おのづから暇も有るべければ、かばかりの事手づから物したりとて、さして、障りともならざるべきを、今はよき人程ぞ、此の習ひは行はれたる。

迷ひやすさは、女の性なりとは聞けど、辻占ひが店先には、男の立てるが多かりけり。さすがに女は、恥ぢかはしくや思ふらん。

## 野守が關

黃花女史

散りのこる花は梢に其の面影をとゞめたれど春の

行への覺束なさに垂れこめてのみあらんもさすがに心やりなければ山寺のわたり音づれて野邊のさま見ばやと獨り家路を出づ、麻布の奥しぶ谷の山そわ道をたどりつゝゆくに槻の老木の並立たる陰に草ふきの家あり竹の折戸をたてたれば如何なる人の住家とも定かならず軒端には山櫻の若葉あかう萌え出で檜原山松の植こみのひまより楓の色づきたるも見えて取繕はぬ庭のたゝずまひ奥ゆかしければしばし佇み居る折しも家の主にやあるらん折戸引あけて呟きしつゝ一樹の蔭と申す事の候ぞ見苦しき田舎住居には候へども薄茶一ぷく進らせ候はん入らせたまへと言ふ、人柄も賤しからず主ぶりのまめ〳〵しさに振すてゝ立出んよしもなく庭の方より立入れば廣やかなる前裁の庭の面に老木の槻いく本か立ならびたる儘取繕ひし庭とも見えず西のかたに野菊かるかや萩なんど植たるを今日なん主みづから肥料ものしたるとぞ見えたる、書院に文机ありて何の書やらん二卷三卷ひろげたる其傍らの床には白河少將の「あさな〳〵軒端に來なく鶯を籠に飼ふ人に聞せてしかな」と書きたるを掛たり主の翁手づから茶碗とり出でゝ茶を點じて出しぬ、繕ろひ玉はね御庭のさま面白くはべりされど岩ども取入れたまへなばまたなき御庭のさまにもなり候はん惜むらくは梅をも植ゑたまはばやなど聞えたるに主笑つて、已れも庭つくる事は年ごろ心を盡し候ひき岩を立て水を流し面白き木ども多く植ゑ候へなど心合ふ友のしばしばすゝめ候ひしかどさては却て興なくやはべらん抑も庭造りの本意は縮景と申ことにて候ふぞかし、廬山の景、西湖の面かげ之を前裁に寫し候が吾國の庭造りの根元とこそ承はる、併しながら开は都に住める人々の限ある園生にてこそふさはし

く候はん、かゝる山里には自らなる景致の存するものにてはべる其の有の儘なる景色を利用してやがて庭となすは離島が嘗て論じたる口訣に候ふ書院庭の居間の前栽なんど申すは定りし式もあなれど茶人の露路と申すには元より一定の式とては承はらず野邊近き家に深山の樣を寫し川そへの術にわし手樣の庭つくりたらんは位置不相應の嘲りを免れずと小堀殿の申して候ぞや、今の世の庭のさますべてこの作法に外れてよしなき摸景に多くの工夫を失ふこと招魂社の山水の庭にて知し召候はんと言はれたる理りせめて聞えたり、この御庭はいかなる作法にてやおはすと問へばこは、相阿彌が細川殿の庭の式にて候天造を利用して人爲を加へざるがケ樣の處には叶ひ申べく例へば眺望の佳景には庭を造り難しと宇治の大納言の申されし言葉を思ひ出でたまふべしと靜に語る折しも岡邊の竹の茂みに鶯の聲さやかに聞えて日影ややく山の端に入りがたの鐘のひゞきに驚かされてやをら身を起し庭造りの御物語承りてこよなき智識をひろめはべり御緣盡せず候はゞ又こそ訪ひまへらせ可くなん内君にもよしなに傳へたまはれと暇乞ひして立出れば十三日の月中空にかゝりたり。

# 花がたみ（二）

白松園主人

## ◎近江風俗

さゞ波や近江の國は、京都に接近して、歷史上尤も趣味ある關係を有する國なり。さればにや、男女の風俗も、いたく京都に類似せり。但しその心術に至りては、概して進歩せざる舊來の商人的根

生なり。彼の世俗に云ふ「近江商人伊勢乞食」の名稱は、依然として今日に遺傳し、士氣の皆無なるは此地の風習と見えたり。そも何が故に、彦根長濱の如き舊城下なるにも係はらず、武魂士氣の缺乏せるかは、猶研究中に屬すれば、明言しがたしといへども、彼等が祖先の節儉を主とし、行商をなして儲蓄したる餘弊の今日に及ばせることは最も主なる源因にして、動しがたき說なるべし。此の故に富豪家は甚だ多けれども、遺産を固守して、活用の法を知らず、禮義廉耻を解する者尠く現金主義に依賴すること、到底半點の趣味を見出すべくもあらず、而して、昔は知らねど今日は、粗飲粗食して、只管美衣を飾らむとする者の如し試に他縣人は來りて彦根町の家屋を見よ、その建築法いかにも奇異にして、多くは土藏の如き中に住して、日光の通ずること少ければ、室はうす暗し、家屋既に此の如くなれば、毫も衞生に注意することなく、軒下の溝などの汚穢あること云はん方なし。此の國の風土病として、有名なる「マラリヤ」の流行するは、潮水にも原由すべけれども衞生思想の缺乏が、之れに及ぼす影響も又大なるべしと推知せらる。此の地の人は少しも「マラリヤを」顧慮する者なく、マア「マラリヤ」で安心しました、あどゝ云ひて、他縣人の寒冒よりも、よほど心安げあり「瘧病」を病むと、邪氣を拂うてよろしうございます、とは此地の人の常に云ふ處なり。邪氣を拂ふは、衞生に注意すべしと云ふ文明思想のなきはいかに固陋習慣の甚しきかを見るべし。此の地の浴場と(風呂)厠などを一見する時は、他縣とは全く風變りなり、異形變態實に一驚を喫するなるべし。此の如き惡習打破は、教育の手腕を待つこと尤も緊急ならむ、今此の地の風

俗の一端として、その一二を擧ぐれば、學校生徒の、平素にても、試驗前にても、勉强せんとする時は、つとめて人目を避けて、則ち隱れて書見をするを例とす。天氣よきときは、山林に入りて草を茵として終日讀書す、故に山に入る時は、彼處の樹陰、此處の崖下などに學生を見出すなり、煩累を避くるがためにするならば、わろきにあらねど、此地の人に限りて決してさる心事にあらず、書をよむを他人に見らるゝは恥と思へり他人に見つからざるに、いつのまに勉强して、かくはよき成績を得しならむ云はるゝをもて、限りなき名譽と思へり、されば同室に、二人も三人もあれば、いづれか寢ねし間に竊に書見をなし、或は學校放課後各生の歸りし後、獨りひそかに教室に殘り居て、書を見る者多し、但しこは、日頃よく出來る人物といふ人に於て、見受らるゝことなり。此の如く一種賤しむべき光明なき偏見を有する事、他縣人と性格を異にせり。

他縣は知らず山口縣下の中學生などは、洗湯に行きて教師と逢ふときは、多くは、脊中の垢を流しまゐらせんといふは、すべての事なるに、近江の學生は之れに異なり、教師の入浴を見ても、なるべく知らぬ顏をして濟し、鼻をつき合はさねば、禮をもせずといふ有樣にて、況や垢を流すなどに至りては、大方ならぬ耻辱と思へり、祖先の遺傳と、家庭の教養と、此の一事にて思ひ半に過ぐる者あらむ。

其言語につきて云んはか、更におもしろき者あり、大抵京阪の語を標準とする者の如くなれども、此地特有の語また多し、その方言の一二を云へば

○ソウヤノニ（然るにの意にて、そうであるに、と云ふに同じ）　○居ヤハ

ル（居らるの意にて敬稱なり、東京語のゐらつしやると、いふに同じ、）○下しかれ（下されだしの意にて、之も敬稱なり言義は下しおかれよならむ）○内ニ居ラレマス（之の語は他人の來訪に對して、亭主にても父にても、妻たり子たる者の、常に云ふ處なり、こは敬語の誤用にて、聞きなれぬ他縣人は、耳ざわりにて、甚だ不快に感ぜらるゝ語なり）○ウイコトヨナア（こは人の辛勞に對して云ふ語にて、憂いことよの言義なれば雅言なり）○ウソヤサカイ（然るによりの意にて、他縣にて「そうであるから」といふに同じ、サカイといふ接續辭は、故に或はからといふべき處に用ゐるは、京阪に等し）○イハナイノカ優ル（云はぬより優るの意なり）○人間デハアラシチイ（人間にてはなしの意）○ドロボウ（惡戯の兒ないふ語なり、東京の盜賊に誤る）○我ミタイナモノ（我の如きものゝ意にて、我をみたやうなものに同じ）○シンキクサイ（面倒くさい、或は東京のジレッタイに同じ山口などにては、さびしく、つれ〳〵なるにいふ語なり）○アカン（他縣にて、ソンナコトアハイカンといふイカンに同じ、故に近江にてはトテモアキヤシナイなど常に用ゐる、但しこは古くより國文にも、「かくては、たやすく事あかじ」など用ゐたる例あり「開かず」「明かず」などの意にて、展開の義ならんか）○ヨセテイタヽキマス（話しに入らつしやいといふに答へて、「マタヨセテイタヾキマス」と必ず答ふ、側に寄せて貰ふの義にて貴下の御宅に、參上致したし、といふべき處に常に云ふ）○ナイ〳〵（土佐のヤア〳〵彦根のナイ〳〵と俗にも云ひて有名の語なり、ハイ〳〵（唯々）と先方の言を畏みて答ふる語なり、但し今日は普通一般に廢りたる者の如く五十歲以上の老人には聞くこと多し余の宅に來る肴屋に向ひて、その肴は甘いひと問ふと、忽ちナイ〳〵と答ふ）

古來文明の中心とありて、千有餘年の帝都たりし平安京の密接國として、その言語此の如し、奇と云ふべし。物蔭などにて男子の談話を聞く時は全く婦人女子の語を聞くが如し、その下輩者の爭論の語も、なほ他縣の小兒の喧嘩よりもおとなしく、毫も恐ろしげなし。近江商業銀行の入口に札を出して、書して曰く「午前八時より午後三時までどす」東京にてはデス、中國にては「デ御座リマス」に云ふに同じデスもドスも元來同行の通音にて、餘り不思議はなけれども、ドと云ふ音は

重く強く、濁り曇れる音にて、婦人女子には、尤も下賤に聞ゆるなり、デゴザイマスが最も婉曲ならむか。此の語を聞きても、いかに言語上の美を味はざるかを知るべし。又ソウジヤとかソウダとかいふべき處をいつもヤといふにより、文字に記す生徒の答案などに、言文一致の折にはまことに誤解を生じ易きことあり、たとへば「北朝の方は正統にあらざるを明にせし書や」此の如き場合のやは、アレヤコレヤのやといふに紛れて、聞えがたし。云ひもてゆけば、一朝にして盡しがたけれど、右は只其一端を擧げしのみ。



樂園



## 留守日記

小畑いく子

四月三日の祭日を、よき日とゑらびて我兒今一人の友と知らぬ國々ゆき見ばやと思ひ立ちぬるに、空もやう雨にもなりなましかば、前の夜

旅人の袖はさらでも露けきに
　ふりもな添へそ春雨のあめ

曉ふかく立ち出づるに春雨そぼふる

　春雨はふらはふらなんふらすとも
　　別れの袖のかはきやはする

暮近くなりぬるに、猶、雨やまざりけり、曇らぬ

影うつさばやと、東の鑑の鑑思ひ立ちしにもあらず、元より、住むべき國もとむべきまめ男まなぶにもあらで、春の休暇の長閑さにあくがれ出ける旅にしあれば、ある時は花をあるじの夜もありなんをなど思ひやりつゝ

咲花にやとかる人もあるものを
しつ心なき春雨のそら

四日　ひねもす春雨をやまず、旅の空思ひやるだに心ぼそし

今日も猶小やまぬ雨やねたむらん
のとけき春の花の旅人

雲かすみ行手をそれとわけわひて
なやみやすらん春雨のそら

靜につたふ軒の糸水に、さう〳〵しさのみいやまさりてやるせなし、はしちから立ち出でゝながめけるに、かなたに今をさかりの櫻花昨日よりつゞく雨、にあらそひかねてや、あはれちら〳〵と散りゆくさまを見てそゞろに

咲きちるを花の姿と見ましやは
はかなきものは浮世なりけり

やをら思ひかへしつゝ

咲けばちる散ればぞ芽ぐむ梢こそ
世のならはしを見するなりけれ

夕つかた、猶、しきふる雨にいとゞしく旅の空想ひやりてものがなし、

つく〴〵となかむる空もかきくもり
袂ひまなき雨の夕暮

五日　雨やみて日影きら〳〵と障子にうつるに、常よりはことにめづらかにうれしき心地するにもまづ旅の空なる人思ひやらる、

朝日かげさすが長閑き今日こそは
心ものべをいさみ行くらん

その夜は佐賀、あくる日は伊萬里、と聞き置きたれば、今日なん唐津わたりにやあるらし、さればひれふる山の昔をも訪ひぬらめ。

くらべてはあはれもふかし戀の石
人をまつらの同じ心に

六日　いつもより少しおそく起き出でぬ、今日もうらゝかに晴れて旅の空まづうれしと思ふ郵便と聲す、いそぎとりて見れば伊萬里よりのなりけり、口も清めあへで開き見るに、いともこまかにものしたりける、遇ふ心地して幾度もくりかへしつ、

別れても心ばかりは流れよる
かしこきものや水莖のあと

同じ日、夕ぐれよりまたしもあめになりぬ、

春かすみかなたのそらを立ちこめて
うき雨雲の道へだてせよ

七日　今日も空はれたり、我兒の友、訪ひ來ましぬ、彼はまだ歸らじ、されどしばしはよけんとてひきとゞめさま〲の物語などするまも、出で來る心地していく度も常の室の方、見やるもはかなし、

歸らじとその友人にこたへつゝ
いく度と見きわりしあたりを

其日某家にやめる人訪ひたるに、いといたう、あはれにおどろ〱しきまでやせ玉ひ、今日明日のほどもおぼつかなげのさましたまひながら、我が到れるを見まして箏の琴一曲きかまほし、孫君もさぞやよろこび侍らんに、と、かくなり玉ひてもさすがに孫君の上心にかゝり玉ふらん、病のためはしらず、心のしばし慰み玉はゞやと、取り出でて其孫君と共にかなでぬ。

玉の緒の只ながかれと一すじに

かきなす琴や音とみだれけん

八日　友の君と暮近き頃成趣園にとれもひ立ちぬ行きつきたる頃、日ははや後の山の端にかくろひぬ、此庭のいつはあれど、まして、したもえ渡る芝山のけしき、木々の梢のおのがじゝ緑をかしく染出だせるに、はやすぎがてのさくら花、葉のみうるはしく繁れるに、ましろのやさしきが數ふるばかり殘れるもめでたし、池水はいつもながらの清きに、已が心の濁りもはづかし、さすがに入相の風春ながら身にしみて覺ゆるに、名殘の花のちりかふさまあはれなり、

千早ふる神のいがきにさくらめど
浮世の風に花やちるらん

そゞろに思ひ起すありし日のさまぐ、紅葉のころは誰れくとながめたりし、此水に足を洗ひて暑さをわすれし折は、たれと共になりき、月をまつとて芝生の露に裾ぬらしつゝ、三つ二つめづらかなる螢の影追ひしははやみとせのむかしとなり、今は其時の人々は都に歸りぬ、殊に忘れがたきは春まだ寒き霜がれのあはれなる頃、日影暖き所にのみうろくずのよりたるを、おもふどちうちながめ、出で水を冬こそぬるけれとて、袖ひぢつゝ、何とやらんいふなる蟲の巣をもとめなどせしは、昨日のやうなるに、はやくも花ちるころとなり、人は皆おのがさまぐなり行くに、むかし男のそれならねど、我身一つぞもとのまゝなる。

池水のそこの心はかはらねど
うつり變るや世々のおもかげ

歸りゆく時我兒が唐津にてものせし文來りぬ。

道のさまつげんといひし旅人の
使は來りいざひらき見ん

とひとりごちつゝ封切る友の、君傍に在りて、馬

に鞍置かせなんや、といひて笑ふ、

文は伊萬里より唐津まで、七里ばかりの道のさまいとこまやかに歌わまた添へたりけり、とりどりをかしくさながら見るこゝちぞする。

　道芝をつみて送れる玉づさに
　　さくやことばの花のかず〱

九日　今日は平戸よりかならず文來るべしとて、待ちしにかひなく暮れはてぬ、

　濱千鳥あとだに見えぬ夕暮や
　　平戸の海に浪さはぐらしと

十日　朝平戸よりのはがきも、佐世保よりのも、皆共につきていとうれし、

　音信をまつらの海の濱千鳥
　　よびつれてこそ來つるありけれ

此日とや歸るべきと幾度も門邊に出でなどす、折しも車の音けたゝまし。そよとかいま見ればそれならで、折々來通ふことある人々の、いたく醉ひたるにてぞありける、

　ひきすゆる車の音はそれならで
　　あらずとがなの人ぞむれ來る

十一日　天氣いとよし、今宵こそはと待つに郵便は來りぬ、幾時ごろなるらんといそぎ見れば、明日なん歸るとなり、只一夜のほどだにもけふとなりてはいとはいなし、

　浦島の手箱ならねど玉くしげ
　　あけてかひなき今朝の音信

## 小説　むら心

さち雄

（下）

關ヶ原を過る頃は、天一面に曇つて、雨を含んだ

生暖い微風が、汽車の窓に吹入れる。頭痛持のお秋は何となく頭腦が重いやうな意がして、始終俯首勝である。

其間にも向ひ合て居る婦人と、春枝との對話は絶えず繼續られて居る、春枝が聽出さうとする程、對者も乘氣になつて、汽車中の徒然に好き對話手が出來たと云ふ風に、次々と談して行く。お秋も初めの間は他事のやうに聞て居たが、次第に其談柄が身に沁みて、非常に感動されて來た、談話と謂ふのは、境遇は違ふが同じく學問に熱心して、終に失敗に歸した女學生の事情で、此場合にお秋の心緒は一層其が爲めに感情を傷めたのである。さて其女學生の境遇談と云ふのは、概略恁うである。

京都に近い伏見の街に山田屋と稱ふ船宿があつた維新前後迄は非常に繁昌したもので、以後も其餘徳で安樂に生活して居たが、兩親の間に兄が一人妹が一人、子供があつた、兄の方は素より後嗣で妹には養子をして分家でもさす筈であつたが此妹の方は性來如何云ふものか、大變學問が好きで、幼い時から讀んだり書いたりする事に斗り耽つて居た。兩親も一人の女の子でもあるし、怜悧な質であるから、之を自慢にして、內の娘は難かしい書でもすら〳〵と讀でのけるし、手紙でも手取早く書くし、此斗りは敎へても出來ぬ子があるのに、性來好きなのは何より結構だと云て欣んで居た。處が追々年齡を加るにつけ、其好きであつた結果、何うしても東京へ出して吳と云ふ事になつた、全體此子(名はお絹と云た)の父親と云ふのは、萬事頓着な方で、お絹が强て勉强に遣て吳と云へば、格別深い考慮もなく、行ても可だらう位に言た。母親は流石に女の子を獨り手放して東

京へ遣るのは何だか掛念で、幾度も不承知を主張てみたが、何分可愛い娘が切なる願望に、斷て止める事も得せず、それでは二年の間、修業に東京へ出すと云ふ事に定まつて、お絹は嬉しく學びの都に出掛て來た。

お絹が東京へ來て身を托た家は、濱野と稱て、表面は某會社の事務員、內實は小金貸やら周旋屋やら、少し要領を得ぬ生活を爲て居る家であつた最も此家は滿更の他人でもなく、山田屋とは遠緣に爲るのである。初め一年程の間は切々と眞面目に勉强して居たが、茲にお絹の心裡に一個の煩悶を起す機會が生じた。

濱野の家は餘分に室數が有たので、空て置くのも冗だと云て、貸間にした、早速二三人の學生に借主が出來た、其中に文科大學生で吉田輝雄と稱ふのがある、濱野の家內の者に最も懇意になつて、何かの談話からお絹とも親しくなり、餘暇に英語を敎へる事になつた、お絹も家に先生が居ると大に便宜であるから、好んで敎を聽て居たのであるが、或晚輝雄が非常な災厄に掛つた、上野の山の中で袋打きにされたのである、温順い男であるのに、何が原因で、那樣な際に遭たのか、本人も初の間は了解なかつたが段々糺してみると、お絹との間に可怪ことでもあるやうに推測した奴があつて、他の執心者が岡燒半分に同輩を語らつて、不意にかゝる擧に出たのであると了解た。而かも其加擔者が同じ濱野の家に居さうなので、吉田も內心惡くなつて、其家を出た。

これがお絹をして煩悶を感せしめた原因であつた人情は不思議なもので、こうなると又お絹は吉田に對して氣毒になる、吉田の移ッた家へわざ／＼詫に行たが、吉田にしてもお絹には不良い感情を

抱いて居ると云ふ譯はない。そこで兩者の交情は以前より一層親密になつた。
兎角するうちに二年の歲月は瞬く間に經て、お絹の故國ではお絹の歸るのを一日千秋と待暮して矢の催促であつた。其には所以があるので、此より以前、お絹の兄なる人は不意の病氣で死亡た、此家の後は何うしてもお絹に養子をして繼がせねばならぬ事情になつて居る、兩親も其には豫てから思考があつたので、お絹の從兄に當る恰好の若者を家へ入れてある、追々は其人とお絹と夫婦にする心算で、一入お絹の歸りを待たれる理由であつたが、何しても歸つて來ない。
父親の眞藏は手紙や人賴みでは到底埒が明ぬと思つて、自身わざ〳〵東京へ上つて來た、來て見るとお絹の容子が飄然と變つて居る。一度は驚き、一度は呆れて憤怒も爲たが、既に間違の成立つた上であるから、其不心得を責めた處で追附かぬ、實にお絹は吉田と秘密約束が出來て、夫婦氣取で住まつて居るので、故國へは歸りさうもない、又無理に連て歸つたとて、其が必ずしも良策でもなく、將來飛んだ係累を惹起さぬとも限らないので眞藏は殆ど娘の處置に困つた。遂に纏つた考も持たずに、自分だけ東京を立去て伏見へ歸つた。
之を聞て母親も大に嘆いた、養子の前にも合す顏がないと云て、那樣娘はもう無い者と諦めると一時は非常に腹も立たが、野にも山にも只一人のかゝり子であつてみれば、流石に心細くもなる。養子と云た處が素は吾子ではなし、と云て今更娘を嫁す事が出來ぬからとて斷はる譯にもゆかず、思案に餘つて眞藏は一箇の思切た方法を胸に浮べた妻にも語ると其方は良と云ふので、娘に其事を言てやつた、策といふのは、山田屋の財産を一部

を割て養子に與へ、嫁も他から貰つて遣り之に山田屋の家號を繼すこと、殘りの財産は悉皆金にして兩親とも東京に行て娘にかゝること、而して其學生の吉田と云ふ者に卒業の後、公然娘を添はせることゝで、是は兩親が老て罪を作るでもあるまいと存外捌けた結果なんで、娘に取ては無上の僥倖であつた。現時那樣な親は滅多に無い筈であるのに、子はそれ程にも思はないか、東京で親子諸共になつてから、始終悶着が絶えず、早く別居をさして呉とか、財産を分配して呉とか、苦情計り持上るので、兩親も今更愛憎が盡きて、以前の田舍へ引返さうかと思ふ意にもなつた。其後は如何なつたか未だ明確聞かないのである。

と云ふのが談話の概略なんで、お秋は自分の身に引較べて成程世間の親と謂ふ者は其程子を思ふものかと今更ながら心を動かした。唯さへ家を拔て出た事が苦痛の種となつて悶えて居る際、此談話を聽て、お秋は或者に歸れ！と命せらるゝが如く感じた。若し是が滊車でなく歩いて居るならば此場合には屹度踵を返した。今はもう殆ど東京迄行く勇氣は無くなつたのである。

雨はポツ〳〵降て來て硝子窓に滴を流して居る、もう尾張へ掛つて名古屋近くになつた、咽喉の處に塊物が出來たやうで、頭は次第に重く痛くあつて來る、グワタン〳〵と列車が動搖る度に何とも知れぬ嫌な心持がして、殆ど堪へられなくなつたそこでお秋は決心した、何しても歸ると。今一度上京の事を果すやうに願ふにしても、今日は是非行く事を止めやう、兩親の顏を見てお詫をせねば東京へ行ても何として安然と沈着て居られやうそれが眞實だと全く悔悟の念が湧立つた。

『名古屋、名古屋、十五分間停車、名古屋、名古

屋ッ。
驛夫の聲にお秋は彈飛されたやうに立上つた。
「春枝さん、私は此で下車てよ
「あら、何して
春枝は非常に驚いて、百方留めてみたが、頑として決心を飜さず、兎に角上京するにしても、兩親の納得の後のことに爲ると言て、春枝にも孰れ近い間會ふ事が出來やうと思ふと、誓つて置て列車を下りた。
直ぐ車を飛ばせて、停車場から遠からぬ某旅館に投じた、而して宿の者に電報を打たせた。
アキカヘリタイムカヒマツ
此を見た時の兩親の心情は如何であつたらう、それにしても、血氣に逸つて若い間にむら心は起すまじきものであると、半日の旅で、お秋はつくづくと、吾身の念慮の足らはぬことを覺つた。（完）

# 村岡勤王談（承前）

森林黒猿

近衞公は月照と西郷とが立去りし後にて、村岡に向はせ給ひ「さても淺ましき世の中とはなれり」と御嘆息遊ばさるゝ中に、夜は早やほの〴〵と明離れましたが、折しも近衞家の諸太夫進藤式部少輔繼上下の肩そびやかして、あたふた御前に進み出で、
「恐れながら唯今傳奏廣橋殿より、奉書到來致しまして厶ります。其の御達しの趣きは、當家の老女村岡に尋ね問ふべき仔細あり、因つて明日町奉行所へ出頭致すべき旨御達し下さるやう奉行より傳奏方へ申遣はされ、乃ち傳奏より當家へ取次ぎ申されまして厶いまする」
と申上げれば、近衞公には色を變へ給ひ、
「ナニ村岡に尋ねの儀とな、婦人の身殊に年老

いたる媼をまで奉行所へ引出すとは言はう樣なき非道の沙汰、是も間部下總守が謀計あらん」と、憤慨の色を面に顯はして、御眦に涙を浮べ玉へば、村岡はなか〳〵に驚く氣色もなく、

「ぜひもなき世の成行き今更申上げ樣も厶りませぬ古來稀なる高年を保ちましたる妾が命さら〳〵惜み申さねば、たとへ如何なる責苦に遇ひませうとも、御國の御大事に係はりまする事、口外は仕りませぬ覺悟ながら、佞人のみ多き世の中、我身の罪よりして如何なる疑の御館に罹らんも知れずと、其ればかりが心苦しう存じまする」

近衛公「余とても關東の嫌忌を受くる身なれば、軈て愼みの沙汰あらんも知れず、さりながら其は我が大君の御爲なれば、更に厭ふべきにあらざれども、其方は女の身と云ひ、殊に老軀にて獄屋の月を觀る事ともならば、さぞや憂はしきことならんと其れのみが心懸りである」

情の露のかゝる言の葉、身に餘りて村岡も不覺に御名殘の惜まれて、霎時は兩眼をしばたゝきて居りましたが、心弱くて叶はじと氣を取直し、

「才智淺はかなる不淨役人、何程の事の厶りませうや、妾心に一の頼も厶りますれば、如何樣にも云ひくろめて關東の疑ひを解き、軈て御意得まするで厶りませう、唯當御殿より直ちに不淨の場所へは世の聞え、且は御殿の穢れ餘り恐れ多く厶りますれば、何卒御暇を下し置れまする樣御願ひ申上げまする」

近衛公「尤なる其願ひ、聞届け遣すに依つて、一且嵯峨なる宿許へ立歸り、心靜かに用意せよ」

村岡「早速の御許しを蒙り有難う存じます、左樣厶りますれば、妾はお暇を戴きまする、唯願ふは

御身を厭はせ給ふ樣……」
近衞公「さらば最早參らるゝや、隨分共に心を用ゐて、過ちあらぬ樣致せ」
村岡「何れもさまへお暇乞いたしたう厶りますが、なか〳〵に御名殘惜まれて、後髮引かるゝ思ひ……此儘お暇申しまする」
と幾度かぬかづきて、漸く座を立んとするを、公は「アー待て村岡」と呼止め給ひ「何となう名殘惜う思はれる、近う寄れ」
村岡「はハッ」と應へて御前近く進み寄れば、公は凝乎其面を打ちながめ給ひ、
「其方我館に宮仕せしは何歲の時からであつたぞや」
村岡「十三歲の春より御祐筆の間の御小間使ひ相勤め、當年七十二歲に相成りまする」
近衞公「オー爾であつたか、寡指折にかぞふれば、早や五十九年、我れ幼き時より其方に侍れて人と爲り、今は已に我れも鬢に霜を戴くに至れば、其方が雪の頭波の面も道理、特に此頃の世の憂に心を痛めて、肥え膩らかなりし面も窶れたるこそ不憫の至り、此度奉行所に呼ばれては、一應再應にて歸らん事容易ならず」
と宣ひつゝ、御文机の上なる短冊を執りて、さらさらと認め、之を村岡に賜はりました、村岡再三押戴きて拜誦するに、

すさましくあるゝあづまのとをさして
　行さきいかにあらむとすらん
一すぢの道のまことをしるべにて
　あづまの山もやすくこゆらん
うち日さすみやこをいでゝいかばかり
　つらきたびぢに日をおくるらん

とありますので、さすが男まさりの村岡も堪へか

ねて、落つる涙を袖に掩ひ、
「未然を察し給ひし御歌の如く、若し東の旅路に赴くとも御心安く思召せ、ともかくも、云ひ遁れて再び都の春に遇ひ申さん、さらば」とばかり心強くもお暇申して立出れば、年頃馴れむつみし人々、皆別を惜しみて見送る者涙ならざるはムいません、村岡は局口より長棒に乘り、女中おくめを具して立出でました。

安政午年の騷動たるや、前にも演べ置きましたる如く、大老井伊掃部頭の命を奉じて上洛なしたる間部下總守が謀計にて、勤王攘夷の說を執り、幕府の邪魔になれるものと見れば、浪人にまれ官家の家來にまれ、男にせよ女にせよひし〳〵と引捕へて牢屋に推籠めたのでありました。其の人々には、先づ老女村岡を初めとして、梅田源次郎、賴三樹三郎、鵜飼吉左衛門、其他三國大學、梁川星巖の妻紅蘭、橋本左内、日下部伊三次、浮田一蕙及び小林民部少輔、高橋兵部少輔、牧式部少輔、入江雅樂頭、若松杢頭、山田兵庫、森寺因幡頭、丹羽豊前守、藤井但馬守、春日讃岐守、なんど、鷹司、近衞一條三條諸家の家來等數十人、名を得し學者書家より僧侶に至るまで、ぞろ〳〵と珠數繋にして獄屋に打込みましたから、京都洛中恰も火の消えたる如く、聲高く物言ふ者さへなくて、昔時平相國清盛が、三百人の禿を放ちて洛中洛外を徘徊せしめて、平氏を誹る者を引捕へし時、路を行く人の目をそばだてしも、斯くやとこそ想はれます。却說聽て召捕はれたる人々は何れも皆網乘物にて江戶表へ送らるゝ事となりましたが、老女村岡は、年老いて殊に女の身なりと云ひ、且つ其の以前より其名公武の間に、持囃さるゝ程の類ひ稀なる女丈夫なれば警護の武士等心を用ゐて勞

りまするゆゑ、囚人ながらも聊か心の慰むふしもありまする。或る警護の侍は、村岡に切りに歌を乞ひまするから、村岡も餘義なく

日々〳〵に變る旅路に變らぬは
　人のこゝろの誠なりけり

と讀みて與へたが、其の手跡は實に見事なものであつたそうです。

## 文林

水上落花　東久世通禧

しのはすの池のさゝ波にほふまて
　散てうかへるやまさくらかな

車あり花遙に見ゆ　高崎正風

こゝにしもたれ乘すてゝ小車の
　我よりさきにはなを見るらむ

花のころ故郷の友に　長岡護美

故郷のきみも來まさはみやこ大路
　こまをならへて花を見ましを

海邊春月　池田政禮

釣ふねのかへる波路やくらからむ
　おほろにかすむ夕つきのかけ

薪　宮地巖夫

深山木もをりにあひては大きみの
　みけのたき木となりぬへき哉

河蛙　北條久政

さくら花ちりてとまれる里かはの
　ゐせきのもとにかはつ鳴なり

故郷山吹　小出粲

昔たかきねなりけむ新はりの

いけたのくろの山ふきのはな

蛙　鎌田正夫

咲はなのかけしつかなる池みつに
あめ見えそめてかはつなく也

雨中山吹　千葉胤明

やまふきの露ふきちらす朝かせに
降とも見えぬあめをしるかな

歸厂　岩崎勝從

うちかすみ舟も見分ぬたそかれに
うな原とほくかりかへるなり

雨中雉　鍋島榮子

見わたせは春雨かすむかた岡の
をさゝかくれにきゝす鳴なり

夜花　前田朗子

かくはかり白き花とも見さりしを
闇にまきれぬにはさくらかな



松有歡聲　岩崎寧子

吹かせの枝よりえたにつたひきて
こゑときはなるいそのまつ原

江上春望　南鄕柳子

打よするなみもかすみて難波江の
つぬくむあしにはる風のふく

月前歸厂　日野西廣子

さくはなの梢にかすむつきかけを
跡にのこしてかへるかりかね

辨内侍　大谷章子

武士のあらき手ふしに消えぬらむ
みちにすくひし君なかりせは

江上春風　佐藤艷子

あつ氷いつしかとけてうちかすむ
難波ほり江にはるかせそふく

衛生會　小川直子

あはれ世にかゝる集ひの無りせは
病のたねはたえすやあるらむ

旅春雨　中島歌子

きゝすなくやま路霞みて旅ころも
いつしかしめる春のあめかな

加茂眞淵　河村重子

上つ代におもひをおきて縣ゐに
いはりしめけむこゝろ高さは

潮干　國分みさ子

野に山に花見るよりも櫻貝
ひろふしはひそ樂しかりける

落花

朝きよめきよめはてにし庭のおもに
二ひらみひらちるさくらかな



ふるさとにものせしをり路にてよみける　下田春與

つきさかき伊豆の島ねに
ひまなくそ浪はよるちふ
時なくそ風はふくちふ
その浪のひまなきかこと
其の風の時なきかこと
たらちねの母のみことの
世にましゝ昔しぬはえ
あつさゆみ伊東のさとの
おくつきをとふらひみむと
玉しきのみやこを出てゝ
大船にまかちしゝぬき
沖つ浪さかまくなかを
島つたひこきたみゆけは
こきはつる浦のこと〳〵

ゆきかくる島のさき〳〵
　島ことにかすみたなびき
浦ことに花さきをゝる
　かすみすら春はたてるを
花すらも春はさけるを
　たらちねの母のみことは
春なれとすかたも見えす
　春くれとかけたに見えす
こゝもへはましてしぬはゆ
　浪風のむた

源義家

かりにたに心ゆるさぬきみなれは
　かくれなき名をとゝろかしけむ






## 五月五日兼題

### 鏡

天　東京淺草新福井町二番地　内田きみ子

おいの波かゝみのうらにうちよせて
　むかしにもにぬかけそうつれる

評、たくみにしておもしろし。

地　上總國鶴舞町　高石登代子

みくさなるたからの中のかゝみこそ
　かゝみのなかのかゝみなりけれ

評、力あるよみ口、歌の中の歌とこそいふべけれ。

人　長崎市西山七十一番戸　日高かす子

あさな夕なむかふかかみも見んひとの
　こゝろつからやはれくもるらむ

評、取飾らすしてよみ進れたるが、なか〳〵に味ひあり

## 甲之部

いしこりの天つみかみのつくらしゝ
　かゝみそくにのたからなりける　大阪　桝田益子

こゝろまてよそほふ人の手ならさは
　かゝみもいかにうれしからまし　大隅　山田よね子

日のもとのくにのひかりと神代より
　いはひつたへしやたのみかゝみ　東京　北島功子

動きなき御代のしつめのみかかみは
　よろつ代かけて照りわたるらん　茨城　篠塚喜代子

たらちねのかたみと思へは打むかふ
　かゝみのかけもなつかしきかな　筑後　鋭山増代子

手なれつるますみのかゝみとし毎に
　うつりゆく身は老いにけるかな　埼玉　横田秋子

## 乙之部

すみわたるかゝみに向ふをとめ子の
　こゝろもちりにくもらすもかな　東京　長尾ふみ子

打むかふかゝみにうつるかけみれは
　いたくもわれは老いにけるかな　東京　小川たき子

くもりなき人のこゝろのうつりなは
　かゝみもいかにたふとからまし　東京　椎野秀子

くもりなきますみのかゝみみる毎に
　みにぬこゝろもみかゝれにけり　東京　椎野鋭子

神代よりいまにのこれるやたかゝみ
　こゝろうつらはやさしからまし　茨城　飛野たに子

わか思ひむかふかゝみにうつりなは
　むねのくもりもはれて見ゆらん　茨城　内田さた子

曇りなきますみのかゝみうちむかふ
　ひとのこゝろもかくしあらはや　東京　田中秀子

はつかしのすかたなれともそこ清き
　こゝろうつさんむかふかゝみに　東京　近澤和子

人みなのむかふかゝみもいまの世は
　にしのはてなるくにふりにして　三河　服部正子

こゝろをは清くもたはやますかゝみ
　むかふすかたはとまれかくまれ　三河　早川たね子

朝なくかゝみにうつすすかたより
　こゝろのたまをみかけよのひと　三河　三宅中枝子

朝なくむかふかゝみはくもらぬを
　くもるこゝろよいかにしてまし　三河　服部萬子

なき母のかたみと見ろそなつかしき
　むかふかゝみにうつるおもかけ　東京　大木光子

朝れかみけつりもあへぬわかかけの

いつはりの多かる世にもうちむかふ
うつろかゝみのつゝましきかな　東京　篠田総香子

曇りなきこゝろのそこも見ゆるまて
かゝみのかけはまことなりけり　東京　鍋田よし子

たまちはふ神の御まへのかゝみこそ
手なれのかゝみたねすみかゝむ　東京　平尾あさ子

朝ゆふにおこたらすしてとるへきは
こゝろすゝしき者にはありけれ　大隅　稲垣政子

朝ゆふにむかひなれてもますかゝみ
こゝろをてらすかゝみなりけり　大阪　山田いね子

たち向ふすかたのまゝにうつすこそ
ひかりなき身のはつかしきかな　伊豫　田村稲子

朝な〳〵むかふかゝみのくもりなき
ひろきかゝみのこゝろなるらめ　松山　梯たけ子

いかはかりやさしからまし増かゝみ
ひかりをおのかこゝろとはせん　和歌山　池田松枝子

くもりなき神のみまへのみかゝみに
ひとのこゝろのうつらましかは　尾張　後藤のふ子

庭かすはなとかひかりのますかゝみ
わかこゝろをもうつしてしかな　東京　山本梓子

朝な夕なたねすみかけとおろかなる
よそへておのかこゝろとはせむ　肥後　田代綾子

わかすかた寫すかゝみにうれたくも
こゝろのかゝみくもりかちなる　埼玉　前野壽賀子

年ことにひかりはいとゝますかゝみ
おいのなみさへよせてみねけり　埼玉　前野ふさ子

こゝろのやみをてらすよしもか

ところはにやたのかゝみは曇りなき
みよのすかたをうつすなりけり　秋田　古瀬とよ子

ゑめはゑみいかれはいかろかけうつす
かゝみやひとのこゝろしろらん　秋田　古瀬りく子

ますかゝみてにとる毎におのか身の
くもるこゝろをみかゝましかは　高知　丹羽うめ子

いかはかり嬉しからましなきちゝの
おもかけうつろかゝみなりせは　東京　岡田柳子

こゝろたにくもりなければ朝な〳〵
むかふかゝみになにかはつへき　東京　千葉卓子

よの中の人のこゝろもかくやあれと
ますみのかゝみつくりそめけむ　越後　高澤れき子

なきはゝのおもかけみねて朝な〳〵
むかふかゝみのなつかしきかな　和歌山　瀬戸榮子

たをやめか向ふかゝみにくもりなき
きよきこゝろをうつすよしもか　岐阜　佐藤そう子

見るたひに嬉しからましますかゝみ
むかしのかけのうつらましかは　肥後　仁保しま子

朝な夕な手にとりならすかゝみこそ
こゝろをてらすまもりなりけれ　和泉　福原蓮子

はつかしきをりもありなむ朝な夕な
むかふかゝみにこゝろうつらは　伊豫　竹村竹里子

神代よりつたへつたへてのちもなほ
ひかりくもらぬやたのみかゝみ　大阪　伊勢村花子

朝よひにこゝろをうつせひもかゝみ
おのかすかたはさもあらはあれ　肥後　佐々小寧子

くもりなきかゝみの面にいかなれは
　愛知　角田ともゑ子

こゝろのちりのうつらさるらん

# 丙之部

とつ國にたくひまれなるひのもとの　東京　竹村貞子
八咫のかゝみそくにのみまもり

ちはやふる神代なからのみかゝみは　横濱　河村かつ子
世々をてらしてくもらさるらむ

見る影もなきわれなからますかゝみ　東京　千勝ふく子
こゝろはかりはくもりはてしな

老のみのうつるかゝみはなみたちて　相模　森田はな子
むかしをしのふたれとなりけり

笑めはゑみ怒れはいかるかけ見えて　横濱　竹内柳子
やさしきものはかゝみなりけり

曇りなくうつすかゝみのそれにさへ　横濱　竹内ひさ子
見えぬこゝろのはつかしきかな

うつしゑもいかて及はんますかゝみ　安房　鈴木浪子
こゝろの底もうつるとおもへは

ますかゝみうつれる影はたらちれの　安房　鈴木秀子
ふかきなさけのかたみなりけり

わか顔をみるにつけてもかゝみやま　東京　牛山粂子
世のうきくもはかゝらさらなむ

あさ夕にうつすかゝみのかけと共に　東京　椎野清子
たえすみかゝんおのかこゝろを

あさ夕にうつすかゝみのかけ見ても　東京　椎野潔子
みえぬこゝろそうらみなりける

うちむかふかゝみのかけそはつかしき　東京　椎野ぬき子
わかみいたくもおいぬと思へは

くもりなきはりのかゝみに打むかふ　三河　竹尾みえ子

---

ひとのこゝろもかゝらましかは　三河　本多きさ子

たゆみなくこゝろの玉をみかきえて
みよのかゝみにてらしてしかな　東京　林郁子

年としにひかりもいとゝますかゝみ
くにのたからとうへもいつけり　但馬　田尻保代子

たらちれの親のかたみとあさなく
むかへはなみたますかゝみかな　大阪　大塚小黑子

打むかふかゝみのかけにおもふこと
うつらはいかにうれしからまし　栃木　靑木たま子

つもりつるこゝろのちりに朝かゝみ
むかへはいとゝはつかしきかな　東京　中島かれ子

千早ふるかみのつくりしみかゝみは
くにのしつめといつきぬるかな　和歌山　長尾小ゑい子

大みかみゝかけうつしゝみかゝみを
世々につたへてあふきこそすれ　仙臺　安倍ひろ子

うなゐ子かまなひのわさをみかく哉
はゝのこゝろをかゝみとはして　仙臺　齋藤まさ子

千はやふる神の御よゝりくもりなき
よろつよてらすやたのみかゝみ　陸奥　吹田たけ子

すかたみのかゝみのかけは古ゆけと
まなひのみちはすゝみかれつゝ　東京　田村政子

つくろはぬすかたなからに水かゝみ
うつるを見れははつかしきかな　東京　杉浦いと子

むらきものこゝろをうつす由もかな
むかふかゝみのくもりなけれは　東京　吾妻ちか子

むかし見し人ともしろしますかゝみ
おもかはりせしおいのすかたを

曇りなきかゝみのかけをうち見れは
うらはつかしき我かすかたかな　東京　川村松子

おこたらす磨くこゝろそたのもしき
世をてらすへきかゝみと思へは　東京　宮田けい子

山とりのをろのかゝみはくもられと
われとへたつるくもゝありけり　東京　片山あや子

様さまのすかたうつさんますかゝみ
したかふかけやこゝろなるらん　東京　片山ふみ子

ますかゝみ手に取みれとかたちなき
ひとのこゝろはうつらさりけり　周防　田村道子

おとろへしわかとし浪のうつらすは
いかにうれしきかゝみならまし　伊豫　田村米子

手に取るもうれしかりけり金かゝみ
おいゆくおのかゝけのうつれは　松山　水木とも子

ますかゝみ人のこゝろもかくはかり
うつらはいかにうれしからまし　東京　北島採子

曇りなくうつるかゝみのなかりせは
わかおもかけをいかてしらまし　横濱　細谷まつ子

うち向ふこゝろもうつるますかゝみ
誰か名つけしかすかたのみとは　山梨　須田やす子

ますかゝみこゝろの色のうつりなは
うちみるひともたのしかるらむ　陸前　佐藤だい子

むらきものこゝろの曇りありなしを
これのかゝみにうつしてしかな　肥後　田代喜和子

すかた見のこれのかゝみに曇りなき
こゝろをいかてうつしてしかな　肥後　田代艶子

ますかゝみこゝろ限なくうつりなは　長崎　八尾いへ子

---

しこのをとめもなけかさるらん

ますかゝみおのかすかたを寫すにも
なきたらちねのしのはるゝかな　東京　林環子

眞こゝろをみかき盡してひとたひは
ひとのかゝみとなるよしもかな　越前　山田瑋子

朝な夕なむかふもつらしおのか身の
おいゆくとしも見ゆるかゝみは　秋田　早川のふえ子

ますかゝみ朝なゆふなにむかへとも
うつすよしなきわかこゝろかな　肥後　千知波橘子

ますかゝみきよきをみても思ふかな
おのかこゝろにくまはありやと　東京　太田やへ子

大きみのふかきめくみのますかゝみ
ひかりは千代もくもらさるらん　肥後　小池賴子

世の人のうれしきさまもうきさまも
てらすかゝみのおもにみえけり　肥後　服部倫子

こゝろさへ寫せはうつるますかゝみ
むかふすかたもやさしかりけり　松山　上原のふ子

ゑむかほもいかるすかたも其まゝに
うつるかゝみのはつかしきかな　山口　田村多豆子

をさなかるこゝろ寫らはますかゝみ
むかふすかたもうれしからまし　山口　村上操子

みめかたち寫すかゝみをくもりなき
こゝろとなしてちよやへなまし　横須賀　岩橋花子

ふるさとを思ふこゝろはますかゝみ
たひのやつれをみるそうたてき　肥後　關かれ子

くもらしと思ふこゝろをみかきなは
まことにひとのかゝみなるらん　筑後　武田龜子

ますかゝみ手にとり見れはいま更に
おとろかれぬるわかすかたかな　廣島　衣笠澄子

朝な夕なむかふかゝみよあはれわか
こゝろをてらせすかたのみかは　肥後　佐々富枝子

ますかゝみゝれはすかたそ變りける
こゝろはな猶もむかしなからに　廣島　大谷晴子

おこたらす人はこゝろをみかゝなん
きよきかゝみなかゝみにはして　三河　永井さい子

たちまよふ浮世のちりにくもりなき
かゝみそひとのかゝみなりける　東京　三好珍子

我妹子か手にとるかゝみいつみても
かはらぬものはこゝろなりけり　埼玉　横田音羽子

かゝみとるこゝろは今もかはられと
うつりはてたるわかすかたかな　大阪　伊勢村春子

ますかゝみ取もゝのうくおもふかな
わかおいらくのすかたうつれは　大阪　大阪谷信子

みゐたひに影もくもらぬますかゝみ
こゝろのちりもすゐしとそ思ふ　肥後　筑紫春子

さかき葉にかけしかゝみの清けれは
こゝろもうつゐこゝちこそすれ　肥後　佐々有鄰子

いつはりないはぬかゝみのまことなは
ひとのこゝろのかゝみともかな　信州　岩間千枝子

よしあしのいつれまさるとますかゝみ
うつしてもみよおさなゆふなに　信州　岩間穜子

# 五月五日兼題

## 暮春の感

天

長崎市西山七十一番戸　日高かず子

花に別れし鶯水になく蛙の聲をつくして惜めども、春は早いまはとなりぬ。年たてば春をまち、春されば花をまち、野邊に山邊に浮れ〳〵て蕨折らんと妻こふる雉子を驚し、子を思ひて雲井にあがる雲雀の下り來ん迄夕日もしらず遊びくらし、菅の根の永き春日も短しとのみ思ひし余りにや、いつしかと過る日數は四方の景色にもしるく、佐保姫の霞の袖うすれ行きて、浮き立ちし心も花と共にや丶散りにたる山の端のみどりそふ木かげに、夏かけて咲くらむ藤の花のゆかりの色なつかしくにはへるに、今年の春も限ぞと心つけば、門田に引くしめの絕々殘るかた青み行く苗代打見るにもいみじうこそ心うたるれ。あはれ世の人の花鳥の色音にまよふ頃を、巳が時と賤が荒小田うちかへしすきかへし、にごらぬ御代の水せき入れて、ゆだねまきしるしのうら若き色にも見ゆるは、來ん秋のみのりの豊けさぞ思ひしらる丶、實にや木

の芽も春の折にならひ、學の庭に通ひては敎草の種子をまき、家居にはそが榮えなん培ひにいそしむべきはかねて思ひしるものから、等閑なりけることの今更口惜しう、心なき賤にも劣り、此秋を何にかまたん、花も實もなき身こそはづかしけれいでいまよりと思へどおくれたりな。

評、流麗婉曲にかゝれたれど結末あまり女々しくてあかぬ心地せらる。修養するに未だ遲きことかは。

## 地

肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

きよらかなる衣まとひて、「年たつ今朝の」と、うたひし少女がやさしき聲音の、いまだ耳をもさりやらぬに、あはれ、なつかしきかをり送りて笑みし梅は、靑葉の間に實を結び、日每〳〵に音づれて、朝いの夢を驚かせしひな鶯は、老の波に聲もさびぬ。野邊の若草は高うなり、まちにし花は、風なきに時ならぬ雪とちりしきて、只若葉のみどりのみ夏まちがほなるは、あしたにありて、夕にちる、大和ますら夫にやたゝふべからむ。かく暮れゆく春のあはれなるにつけても、賴みかたきはうき世のさまになん。花に鳥にとあくがれて、永き春の日をみぢかしとうらみし人は、うすき衣に冬のよざむをかこつの時もありぬべし。あしたに花顔の女も、やがて頭に霜をいたゞき、腰にあずさの弓はることそなべての習ひなりけり。花さく春は又めぐり來れども、人生の春は二たびある事なからむ。此期をはずさでいそしまずんば、老いてくゆとも其効あらんや。あはれ月に日に開け行く大御代に生れあひて、あまねきみ惠みにうるはふもの、いかで、國恩の萬分の一をも報はでやは。今や桑は芽をふきて、こがひの時をまてり。女の業としては、國の爲はた家の爲に、こよなき事なめり。あるは、奥ふかき學の庭にわけ入りて、業をつみ德を修め、大和の名にはぢで、そを家庭に敎育に及ぼさん事、亦報恩の一なるべき。己れもとより、學淺く萬たらはぬ身の、千々の思の一ふしだになしえぬに、又ゆく春を送るべきか。あゝ櫻はちりていさぎよく名をのこす。おのれはかへり見て身の不省をかなしむのみ。

評、文章あまりたくみならねど、自由に其思想を發展せり。

## 人

東京日本橋區濱町二丁目十二番地　千葉卓子

月日に關守なく、行く水の如しと、古しへの聖のたまへるも、げにことわりなりけり。花鳥の色音にうかれし今年の春も、はやくれちかくなりぬ。あはれおのれの身をかへり見れば、今日まで

の長き日を、なにひとつなしえし事もあらですぎ來つるは、面はづかしきはみにこそ。されど、今さらにいふもかひなし。たゞうたかたのゆめとなして、これよりは心の駒にむちうちて、ひまゆく駒におくれざる樣、その心して學びの道を分けゆかばやと、思ひつゞけてなん。

評、簡潔にしてすて難き趣あり。

（以下原稿到着順）

備前　近藤琴雌

霽とながめし櫻の花も、あはれ無情の雨風に、うつろひはてゝ見るかげもなし。彼の愛らしき蝴蝶の羽根も、やゝおとろへて、若葉しげりあふ尾の上の景色も、目さむる心地ぞする。實に夢の世とはこれをやいふらむ。

きのふまでは、そぼふる雨もいとはで、若菜つまんとて、ひれもす野もせにさまよひありき、又ある時は、妹と共に、庭の櫻樹のもとに、女鑑などひもときて、樂しく暮らしゝこともありき。霞たつ朝ぼらけ、峰に分けいりて、早わらびを折りたる事もありけり又後ろの菜種の畑に、蝴蝶を追ひまはし、雲井はるかに囀る雲雀の聲、おもしろうききしなど、其うれしくたのしかりしことは、今猶胸にみてり。さるに此こひしき〱春の景色は、今やまさに暮んとして、垣根には、早や卯の花さへ咲き出でたれば、ほとゝぎすの初音きかむもほど近うなりぬ。あはれうぐひすは、花のやど失ひたるまゝに、若竹の枝にしばなきて、ひたすら春をよびとめんとするさまのいじらしさ、など胸に浮ぶよしもなき事ども書き付けんと、文机によれば、いつのまに風や吹き入れけむ、硯の水に浮べる花びらの二ッ三ッ、あらき風のしわざとも見ねず、さすがになかしきふしはあれど、花はちり春は過ぎ行く山里の淋しさ、げに何にかたとへん。

長崎　内藤美與子

惜しめども春の限りの今日もまた夕暮にさへなりにけるかな、と昔人の口ずさみけるもうべなりけり。暮行く時々の惜しきはいつとは分れど、櫻色に深くも染めし心の春の別れは一しほになん。朝な夕な待ち詫びたりし花の盛りに逢へる程は、何となう心浮れていと樂しく遊びくらしけるも、束の間にわりなき風に誘はれて雪とのみふる花に心も消ゆらんやう覺ねしは幾日許りの跡なりけん、葉櫻に殘る念ひのはてしなきを、床しと聞つる鶯の聲も老いて、散る花をいたみ春の別れを惜しむとて、物悲しげに鳴くも同じ思の憂を添ふるにこそ。春は又來ん春來なば花も咲ぬべし、然はあれど、梓弓春の此日は引かへすべきすべもあらず、あはれ甲斐なきは吾身なりけり。ことわざ繁き世なれば、一時は千ひらの黄金といふをしへ言さへ忘れ果てゝ、徒らに過せしほどに、はやこゝらの春秋を重ねきにけり。されば分けいりし文の林はなほ淺く、たどりこし敷島の道に匂へる言の葉もなきぞ憾なる。いや愈り勝ちなりし身も、今よりは文机の駒に硯の鞍おき、ふでのむちしてあがき早き隙行駒にも追しかでやはと、心おきてかくん乘り出でぬる。

東京　山本梓子

あすか川流れて早き月月は、今更にいはずもあれ、今年の春も、いとあはたゞしうくれにけりな。藤のゆかりもうつろひゆき、かきの山吹散りかゝりたる、櫻はまして葉隱れの二つ三つ風にしらるなど、いのろさへぞあはれなる。曉がたの月影の、霞も少しうすれたるに、蛙のこゑ朧なるなどあるがなかにも、猶鶯の老聲こそ

心うごかすものにはありけれ。初音待えしころは、ひゝなにてうゐ〱かりしを、梅香り柳もえ立より、春の色やう〱とゝのほり行ほど、なが聲もいと妙に聞えしか。さるを今は、いとはかなげに古巣思ひて打わびたる、露あればおろふるとかや。げに世のことはりも思ひあはされて、かた〴〵心づくしなるにも、秋計り、ひとりあはれなるらむや。木の葉ふり時雨催す空のけしきもいとほしけれど、あはれなつかしげなる春のくれこそ、またいはむかたなけれ。

茨城　篠塚空代子

見渡す限り野も山も、只青々と綠葉の茂るを見るからに、春の更け行くを覺えて、いと〳〵名殘惜き思ひこそすれ。昨日まで錦色どる梢の露も、吹かぬ嵐に散り果て、今は浮世のはかなきを、うらめしげなる殘んの花の二つ三つ、あなたこなたに見ゆるのみ。過にし年彌生の末にみまかりし母人の病の、床に侍りしなり、病み細りし双の腕に動きもやらぬ身を支へ、庭の櫻指して、花の生命と人の盛りは野邊の朝露におなじとのたまはれしいと理ある言の葉の、今なほたしかに耳に殘りて、麗なる春の日、梢に囀引くを見るにつけ、知るも知らぬも打集ひ、歡び笑ふ聲を聞くにつけ、白雲を見るにつけ、一つとして憂き種ならぬはなし。戀しき母人に連れられて、こよなき友と花見せしは七年の昔。あはれ越方の戀しく、春毎に何んとなう名殘惜く思はるゝ中に、今年の春の暮は、七周の祭りあひ、一入悲しく名殘の盡きぬ心地なんする。

大阪　桝田登子

花鳥の色音床しく、糸遊に心ひかれしも、思ひやるべき方ぞなきといへりけん、春の暮とは成にけり。あはれ、麗しく白雲かけし四方の梢、紅深き桃源の林も、いつしか紛と散りはて、黄金と匂ひし菊の花、紫さす色の菫、なつかしげもなくあせ行くのみか、

羽袖かろげに戯れし蝴蝶、はたいづちいにけん、長閑き春の心をうたひし雲井の雲雀、芝の雉子は更なり、ゆ種靜く小田の蛙も聲をかつぎて、岸の山吹うつろふをや恨むなるべし。霞こめたる梢は、薄みどりの色をあらはし、朧に見えし有明の月は、山の端に顔をかくし、春雨けぶる遠方のえに、翅しめりて歸る雁の聲かなし。軒の柳はみどり深く、庭の深見草は色淺くなりにたり。たゞ、藤浪のみは、春のゆかりとゞめて夏にやなびくらん。げに五十とせの樂みも、一睡の夢野の蝴蝶にて、こしかたを思へば、花鳥の床しかりし色ねも、糸遊に戯れしもはかなく、あともとゞめず惜にかひなくて、暮行く春の心は、いともあぢきなきや。

花とりのいろ音とゝめす行春も
おなしこてふの手枕のゆめ

東京　近澤愛子

鶯のこゑにねざめて梅をめで、蝴蝶とゝもにうかれつゝ、くるゝもしらで、うたげせし花のさかりもはやすぎて、野べに山べに、あくがれし人のこゝろもしづまり、四方の景色のものさびしさ、秋の夕にもまさりて、そゞろにかなしきこゝちこそすれ。いつしか花染のころもの色あせぬれば、かすみの袖の引とむべくもあらず、池の藤波汀の山吹かきつばたなど、咲おゝるも中〱に春の行へのしのばれ、あはれさいはん方なし。さればいまよりは卯の花月夜にほとゝぎすのこゑをこそきかまほしけれ。

福井　田中たちい子

ものゝあはれは秋こそまされと云ひけんしげにさることながら、春の晩つ方も又一しほにこそ。長閑けき春の心より匂ひ出でたる櫻も、咲くと見しまにかつ散りて、青葉のみ茂りまさり、山吹はものきよげに、藤の花のおぼつかなく咲き匂ひて、春の名殘りのみとゞむるは、あはれに悲しき心地せられて、そゞろ淚さへ催さ

れぬ。花の賞ともいふべき吾が友、さだ子の君の去年の春の末つ方、我等をすてゝ、かへらぬ旅に出で立ち給ひし事を思ひ出し、世の常なきを今初めて知りたるにはあらねど、げに口惜しくなげかはしき至りにこそ。妾此の君を知りしは、明治三十二年やよひ學びやに入りてよりの事にて、君には、慈愛の心深くかつ友情きはめてあつかりしかば、妾を愛し給ふ事斜ならず。わらはも君をしたふこと切なりしかば、あしたに相見ゐの早きをなげき、夕に別るゝの早きをなげき合ひき。かく互にたのみかはしつゝ、ありし年月もゆめと過ぎ去り、再び歸らぬ黄泉の客と知れるものから、あやしう夢とのみたのまるゝこそはかなけれ。過ぎにしあとなくゆとも、などてかひなき業なれば、いでや是よりはいよゝつとめんはげみて、學びの道の奥深く分け入りて、いつかは、月の桂を手折り、なき君のみこゝろざしをものせばやと、いさゝか思ひのまゝを書きつくるになむ。

神奈川　森田はな子

かすみか雲かとあやしまれつる花も、春雨にいろあせ、夕のあらしに心きよくもちりうせぬ。若葉のみどり、やうやうふかくなりゆきて、やがて日かげをへだつるたてともなりなむ、月の光の花ににほひしいろもきゐ、春の名殘のとゞまらで、うつりゆくこそうたてけれ。秋はあはれふかけれど、なほ春の日かげ小てふのゆめみし、ゆめの間とこそ、またはかなきこゝちせらるれ。

東京　三好珍子

人足繁かりし上野向島も、今ははやかへりみる人だになく、今年の春もやうやうふけゆくに、恋の身の年改りてより爲したる事を顧みては、數ふるにもたらぬからに、いとゞひまゆくこまの早さのみ思はれて、今更なげくともいかゞはせん。おなじ心か、暮行く春をいそがはしげに、鳴きさわぐ蛙の聲もをかしう。庭もせに

は、ゆかり色奥ゆかしう、かけ渡したる藤の花も、何となう覺束なげに、なりなり音づるゝ風に、一ひら三ひらちりては池水にさゝ波たつるさま、これもくれゆく春のかたみと思はれて、いと哀ともなつかし。雪か白雲かと、めではやしたる山々もいつしか緑とかはり、柴がくれに匂ふ山ざくら、殊さつゝじなど、そこはかとなく見ゐたる、なんとなううれしく、はた遠寺のかれのひゞき渡るに、暮煙低くたなびく頃、むら鳥のねぐらにかへるさまなどは、なかなかに秋にも劣るまじき淋しさよ。いかに進みゆく世なりとも、月日をのみはとゞむるよしもなく、あだに過行く月日は多けれど、殊に短かく覺ゆるは、花鳥にあくがれ、樂しくくらす春の日ぞかし。

肥後　佐々有鄰子

雲にまがひし遠近のさくら花ちりはてゝ、山吹躑躅いろあらそひ藤の花さへ紫の雲にひとしく、木末よりしなひながくさきかゝる白藤、花は、岩ほに淵津いとくりかけてにほへるさま、ゐもいはれぬ詠は春院のけしきになんありける。そもそも春たちし朝よりむらぎもの心のどかにうかれいでゝ梅の花笠さしかざし、雲雀の床にては、友とすみれをつみはやして、父母にあつものつくりて供へまつりしも、昨日今日とすぎゆきて、さつきの初めともなりぬ。つらつらおもへば、わが身の上に春のはじめよりつもりしたのしみ、かされしうきことも、如是昨日の變化にかはることなくむすぶの神のかみつ代よりの、御さだめならんと感ぜしまにまに、暮春の今日の生日にしるしぬ。

東京　太田やへ子

折節の移りかはるこそ物事に哀れなれと、兼好法師がいひけむ言の葉げにさることにて、春も早殘り少なになりぬれば、やがては、あら金の土さへさくなる頃ともなりぬべし。されば、よろづの

物事にひしう思ひ出でられて、捨て難き事こそ多かんめれ。昨日は今日の昔にて、果なくのみぞ過ぎ行く。かくのみ果なく過ぎにすぎ行く世の中に、何するとしもなく明し暮し、生ける限りの世を過して、徒に苔の下に朽果てなんは、いと口惜しくふがひなかるべし。哀れ、われ女子にこそあれ、せめては、何わざにあれ患なく心入れて、なからん後の世に、朽せぬ名をただに止めましと思ふは一人吾のみかは。あはれ學の道も一わたり卒へぬれば、よく父母に仕へまつり、はた他日人の母となりし際は、家を治め、子等の教へに勉めいそしみ、大君の御惠の萬が一にも報い奉らんと思へば、暮る春も何かは、迎ふる夏も樂しくてまつぞかし。




## 家の寶

清水橘村

金銀珠玉家に滿ち、衣類調度屋に滿てるも、こは家の寶にあらず、之を用ゐるもこれを使はざるも共に益なきものなり。

さらば家の寶は何ぞや、曰く兒なり、夫妻の間の稚子なり、古人曰はずや子寶と。

兒なき家は淋しく、兒ある家は賑ふ。

抑も結婚は子の爲めにするもの、夫妻となりて子を求むるは情なり。

既に母となれば萬の事みな兒の爲めに爲す、父の外に働くも兒の爲めなり、母の家を治めて怠らざる無きも兒の爲めなり、己れの糧を減じても、兒の餓ゑざるをねがひ、己れ着る衣なきも兒には着せてその喜びを見むとし、兒笑へば己れまた笑ひ、兒泣けば己れまた泣き、兒病めば己れまたやむ、此時母の心は全く兒となるなり。兒あるが爲めに、夫妻の間いよ〳〵堅く、兒あるが爲めに家庭いよいよ和樂す、これ兒は夫妻の間の金鎖なるが故なり、望みある、愛らしき、生ける家の寶なるが故

なり。

されば兒は人に喜びを與へ、樂しみを與へ、希望を與ふ、然れども、また兒は人に苦しみを與へ、歎きを與へ、絶望を與へるなり、これ換へがたき寶なればなり、金銀珠玉の類、之を得んとするを得べし、衣服調度の類、これを調へむとすれば調へらるべし、然れども兒を得んとするも得べからず、調へむとするも調へがたし、げに兒は得難き寶。

これを護り、これを育み、これを大切にせざるべからず、

これを守り、これを育み、これを養ふは二人が義務なれども、專ら之を爲すは母たるものゝ務なり鷄の曉告ぐる聲に驚き、母の胎より此世に夢さめたるの稚子、三とせ四とせが間は、母が二つの泉にすがり、睡るにつけ、起きるにつけ母の手を煩はさゞるべからず、母また子を育みそだつるは、天賦の職、父は母の兒を養ふ糧を與ふるものなり。

母の子につれなきは、良人につれなきなり、母の兒に愛多きは、やがて良人に愛あるなり、これ子は己れ一人の兒にあらず、又父の子、家の寶なるが故に、

大徳あるもの、家を治むるは安けれど、兒を敎ふることは難し、まして才なく德なきもの、いかに兒の敎育を全し得べき。兒の敎育を全せんとならば、卿等夫妻となる前、妻たり得るや否やを思ふより、兒を敎育し得るや否やを思へ、兒の敎育を全うし得るものならばやがて、妻たる職分を全うし得べし、たゞ貞を以て良人に事へ、德を以て家を治むるのみが妻の職務にあらず、その兒の敎育を全うし、兒を完全の人と成してこそ、全き妻

と云ふべきなり。

卿よ、卿らまづ嫁ぐまへに、妻となり得るやを思ふより、兒を教へ育み、養ひそだて得るやいなやを思へ。

此心なくして人に嫁ぐなかれ。

孟母は兒を育つるため、三たび家をかへたりと云ふ、母が兒を育つるにはよく己れが身をつゝしみ心を正しうし、そが四邊のものにも眼をとめざる可らず、こは兒の近きところのものに似るが故なり、諺にも曰はずや、氏より育ちと、いかに富貴の家に生れ、名門の子孫に生れたりとも、德もあく才もなく、氣品卑しき乳母や子守女や、下等なる社會のものに養育をまかせ置かば、その子女も亦智識劣りて、氣品いやしく學才もなきものとなるべし、又いかに劣等なる者の子女なりとも、學わり德ある師傅に養育されたらば、氣品高尚なるものとなる。まして己が乳を與へ、おのが育つる兒、しかも己が子なるに、子女の前にいやしき言葉をもちゐ、淫らなる風體をなさば、子女はよきことと思ひて、これを眞似し、つひに救ふべからざるに至るべきなり。

故に母たるものは兒の前に取り亂す勿れ、髮を亂す勿れ、衣服を亂す勿れ、言葉を亂す勿れ、動作を亂す勿れ、此所に亂す勿れと云ふはかざるの謂にあらず、兒を教ゆるは兒をいつくしむるなり、徒らに愛するはいつくしむ道にあらず。

兒を育つるは母の務めなれど、その育つるてだてについては父と一致するを要す、常に父と計りて教育と誤まらぬ樣心掛くべし。

世の中の思はあれど子を戀ふる
おもひにまさるおもひ無き哉

と子を思ふの情何ぞ切なる。

破れ窓よりもり來る月の、影も霜夜の裏住居、白くさし入る寒さに肌うすき衣、はかなくくらす人なりとも、子といふ可愛きものありて、あどなく膝にすがりて微笑ふ夫婦の中らひならば、浮世の波の高くとも、苦といふ味を覺えざらむ、かゝる處にわび住ふものゝ、父は子の爲夫のため、不自由あらせじ、憂事のなかれ少しは餘裕もあれかしとて、朝は殘んの月の影をふみて人より早く出て働き、夜は更けわたる鐘の音を聞て家に歸る、母は母として子をもり育つるがうちに、良人の愁らさを分つ爲めの手職業、よし母に才色なくとも家は樂しく暖かく、春の風の靜けさは滿ちみつなり。

ましてオあり識ある女子の、生活のうれひなき家に嫁き可愛の子の母たらむには、いかばかりかめでたき團欒の樂しみをや得べき。

あら母よ、稚子をいつくしめ、稚子は卿の金鎖なり、家の寶なり。

子なる俳優、卿の爲めに芝居をなす。

○

子女を鞭打つものは、已れを鞭つなり、良人を鞭つなり。

子女の愛に溺れるものは、已れに溺るゝなり、良人に溺るゝなり。

子女を敎ゆるは已れ習ふなり。

子女を愛するは已れを愛するなり。



うつろかゝみのつゝましきかな

いつはりの多かる世にもうちむかふ　東京　篠田窓香子
かゝみのかけはまことなりけり

曇りなきこゝろのそこも見ゆるまで　東京　鍋田よし子
手なれのかゝみたえすみかゝむ

たまちはふ神の御まへのかゝみこそ　東京　平尾あさ子
こゝろすゝしき者にはありけれ

朝ゆふにおこたらすしてとるへきは　大隅　稲垣政子
こゝろをてらすかゝみなりけり

朝ゆふにむかひなれてもますかゝみ　大隅　山田いね子
ひかりなき身のはつかしきかな

たち向ふすかたのまゝにうつすこそ　伊豫　田村稲子
ひろきかゝみのこゝろなるらめ

朝な〱むかふかゝみのくもりなき　松山　梯たけ子
ひかりをおのかこゝろとはせん

いかはかりやさしからまし増かゝみ　和歌山　池田松枝子
ひとのこゝろのうつらましかは

くもりなき神のみまへのみかゝみに　尾張　後藤のふ子
わかこゝろをもうつしてしかな

磨かすはなとかひかりのますかゝみ　東京　山本梓子
よそへておのかこゝろとはせむ

朝な夕なたえすみかけとおろかなる　肥後　田代綾子
こゝろのかゝみくもりかちなる

わかすかた寫すかゝみにうれたくも　埼玉　前野壽賀子
おいのなみさへよせてみえけり

年ことにひかりはいとゝますかゝみ　埼玉　前野ふさ子
こゝろのやみをてらすよしもか



とことはにやたのかゝみは曇りなき　秋田　古瀬とよ子
みよのすかたをうつすなりけり

ゑめはゑみいかれはいかろかけうつす　秋田　古瀬りく子
かゝみやひとのこゝろしろらん

ますかゝみてにとる毎におのか身の　高知　丹羽うめ子
くもるこゝろをみかゝましかは

いかはかり嬉しからましなきちゝの　東京　岡田柳子
おもかけうつるかゝみなりせは

こゝろたにくもりなけれは朝な〱　東京　千葉卓子
むかふかゝみになにかはつへき

よの中の人のこゝろもかくやあれと　越後　高澤れき子
ますみのかゝみつくりそめけむ

なきはゝのおもかけみえて朝な〱　和歌山　瀬戸榮子
むかふかゝみのなつかしきかな

たをやめか向ふかゝみにくもりなき　岐阜　佐藤そう子
きよきこゝろをうつすよしもか

見るたひに嬉しからましますかゝみ　肥後　仁保しま子
むかしのかけのうつらましかは

朝な夕な手にとりならすかゝみこそ　和泉　福原菫子
こゝろをてらすまもりなりけれ

はつかしきをりもありなむ朝な夕な　伊豫　竹村竹里子
むかふかゝみにこゝろうつらは

神代よりつたへつたへてのちもなほ　大阪　伊勢村花子
ひかりくもらぬやたのみかゝみ

朝よひにこゝろをうつせひもかゝみ　肥後　佐々小寧子
おのかすかたはさもあらはあれ

くもりなきかゝみの面にいかなれは　愛知　角田ともゑ子

こゝろのちりのうつらさるらん

## 丙之部

とつ國にたくひまれなるひのもとの
八咫のかゝみそくにのみまもり　東京　竹村貞子

ちはやふる神代なからのみかゝみは
世々をてらしてくもらさるらむ　横濱　河村かつ子

見る影もなきわれなからますかゝみ
こゝろはかりはくもりはてしな　東京　千勝ふく子

老のみのうつるかゝみはなみたちて
むかしをしのふたれとなりけり　相模　森田はな子

笑めはゑみ怒れはいかるかけ見えて
やさしきものはかゝみなりけり　横濱　竹内柳子

曇りなくうつすかゝみのそれにさへ
見えぬこゝろのはつかしきかな　横濱　竹内ひさ子

うつしゑもいかて及はんますかゝみ
こゝろの底もうつるとおもへは　安房　鈴木浪子

ますかゝみうつれる影はたらちねの
ふかきなさけのかたみなりけり　安房　鈴木秀子

わか顔をみるにつけてもかゝみやま
世のうきくもはかゝらさらなむ　東京　牛山素子

あさ夕にうつすかゝみのかけと共に
たえすみかゝんおのかこゝろを　東京　椎野清子

あさ夕にうつすかゝみのかけ見ても
みえぬこゝろそうらみなりける　東京　椎野蕭子

うちむかふかゝみのかけそはつかしき
わかみいたくもおいぬと思へは　東京　椎野ぬき子

くもりなきはりのかゝみに打むかふ
ひとのこゝろもかゝらましかは　三河　竹尾みえ子

たゆみなくこゝろの玉をみかきねて
みよのかゝみにてらしてしかな　三河　本多きさ子

年としにひかりもいとゝますかゝみ
くにのたからとうへもいつけり　東京　林　鄙子

たらちねの親のかたみとあさなあさな
むかへはなみたますかゝみかな　但馬　田尻保代子

打むかふかゝみのかけにおもふこと
うつらはいかにうれしからまし　大阪　大塚小黑子

つもりつるこゝろのちりに朝かゝみ
むかへはいとゝはつかしきかな　栃木　靑木たま子

千早ふるかみのつくりしみかゝみは
くにのしつめといつきぬるかな　東京　中島かれ子

大みかみゝかけうつしゝみかゝみを
世々につたへてあふきこそすれ　和歌山　長尾小ゑい子

うなゐ子かまなひのわさをみかく哉
はゝのこゝろをかゝみとはして　仙臺　安倍ひろ子

千はやふる神の御よゝりくもりなき
よろつよてらすやたのみかゝみ　仙臺　齋藤まさ子

すかたみのかゝみのかけは古ゆけと
まなひのみちはすゝみかれつゝ　陸奥　吹田たけ子

つくろはぬすかたなからに水かゝみ
うつるを見れははつかしきかな　東京　田村政子

むらきものこゝろをうつす由もかな
むかふかゝみのくもりなければ　東京　杉浦いと子

むかし見し人ともしるしますかゝみ
おもかはりせしおいのすかたを　東京　吾妻ちか子

曇りなきかゝみのかけをうち見れは
　うらはつかしき我かすかたかな　東京　川村松子

おこたらす磨くこゝろそたのもしき
　世をてらすへきかゝみと思へは　東京　宮田けい子

山とりのをろのかゝみはくもられと
　われとへたつるくももありけり　東京　片山あや子

様さまのすかたうつさんますかゝみ
　したかふかけやこゝろなるらん　東京　片山ふみ子

ますかゝみ手に取みれとかたちなき
　ひとのこゝろはうつらさりけり　周防　田村道子

おとろへしわかとし浪のうつらすは
　いかにうれしきかゝみならまし　伊豫　田村米子

手に取るもうれしかりけり盆かゝみ
　おいゆくおのかゝけのうつれは　松山　水木とも子

ますかゝみ人のこゝろもかくはかり
　うつらはいかにうれしからまし　東京　北島採子

曇りなくうつるかゝみのなかりせは
　わかおもかけをいかてしらまし　横濱　細谷まつ子

うち向ふこゝろもうつるますかゝみ
　誰か名つけしかすかたのみとは　山梨　須田やす子

ますかゝみこゝろの色のうつりなは
　うちみるひともたのしかるらむ　陸前　佐藤だい子

むらきものこゝろの曇りありなしを
　これのかゝみにうつしてしかな　肥後　田代喜和子

すかた見のこれのかゝみに曇りなき
　こゝろをいかてうつしてしかな　肥後　田代艶子

ますかゝみこゝろ限なくうつりなは
　しこのをとめもなけかさるらん　長崎　八尾いへ子

ますかゝみおのかすかたを寫すにも
　なきたらちねのしのはるゝかな　東京　林環子

眞こゝろをみかき盡してひとたひは
　ひとのかゝみとなるよしもかな　越前　山田璋子

朝な夕なむかふもつらしおのか身の
　おいゆくとしも見ゆるかゝみは　秋田　早川のふえ子

ますかゝみ朝なゆふなにむかへとも
　うつすよしなきわかこゝろかな　肥後　千知波橘子

ますかゝみきよきをみても思ふかな
　おのかこゝろにくまはありやと　東京　太田やへ子

大きみのふかきめくみのますかゝみ
　ひかりは千代もくもらさるらん　肥後　小池賴子

世の人のうれしきさまもうきさまも
　てらすかゝみのおもにみえけり　肥後　服部倫子

こゝろさへ寫せはうつるますかゝみ
　むかふすかたもやさしかりけり　松山　上原のふ子

ゑむかほもいかるすかたも其まゝに
　うつるかゝみのはつかしきかな　山口　田村多豆子

をさなかろこゝろ寫らはますかゝみ
　むかふすかたもうれしからまし　山口　村上操子

みめかたち寫すかゝみをくもりなき
　こゝろとなしてちよやへなまし　横須賀　岩橋花子

ふるさとを思ふこゝろはますかゝみ
　たひのやつれをみるそうたてき　肥後　關かれ子

くもらしと思ふこゝろをみかきなは
　まことにひとのかゝみなるらん　筑後　武田龜子

ますかゝみ手にとり見れはいま更に
おとろかれぬるわかすかたかな　廣島　衣笠澄子

朝な夕なむかふかゝみよあはれわか
こゝろをてらせすかたのみかは　肥後　佐々富枝子

ますかゝみゝれはすかたそ變りける
こゝろはなほもむかしなからに　廣島　大谷晴子

おこたらす人はこゝろをみかゝなん
きよきかゝみをかゝみにはして　三河　永井さい子

たちまよふ浮世のちりにくもりなき
かゝみそひとのかゝみなりける　東京　三好珍子

我妹子か手にとるかゝみいつみても
かはらぬものはこゝろなりけり　埼玉　横田音羽子

かゝみとるこゝろは今もかはられと
うつりはてたるわかすかたかな　大阪　伊勢村春子

ますかゝみ取もゝのうくおもふかな
わかおいらくのすかたうつれは　大阪　大阪谷信子

みふたひに影もくもらぬますかゝみ
こゝろのちりもすゑしとそ思ふ　肥後　筑紫春子

さかき葉にかけしかゝみの清けれは
こゝろもうつるこゝちこそすれ　肥後　佐々有鄰子

いつはりないはぬかゝみのまことをは
ひとのこゝろのかゝみともかな　信州　岩間千枝子

よしあしのいつれまさるとますかゝみ
うつしてもみよおさなゆふなに　信州　岩間種子

# 五月五日兼題

## 暮春の感

天　長崎市西山七十一番戸　日高かず子

花に別れし鶯水になく蛙の聲をつくして惜めども、春は早いまはとなりぬ。年たてば春をまち、春されば花をまち、野邊に山邊に浮れ〳〵て蕨折らんと妻こふる雉子を驚し、子を思ひて雲井にあがる雲雀の下り來ん迄夕日もしらず遊びくらし、菅の根の永き春日も短しとのみ思ひし余りにや、いつしかと過る日數は四方の景色にもしるく、佐保姫の霞の袖うすれ行きて、浮き立ちし心も花と共にやゝ散りにたる山の端のみどりそふ木かげに、夏かけて咲くらむ藤の花のゆかりの色なつかしくにほへるに、今年の春も限ぞと心つけば、門田に引くしめの絶々殘るかた青み行く苗代打見るにもいみじうこそ心うたるれ。あはれ世の人の花鳥の色音にまよふ頃を、巳が時と賤が荒小田うちかへしすきかへし、にでらぬ御代の水せき入れて、ゆだねまきしるしのうら若き色にも見ゆるは、來ん秋のみのりの豊けさぞ思ひしらるゝ、實にや木

の芽も春の折にならひ、學の庭に通ひては敎草の種子をまき、家居にはそが榮えなん培ひにいそしむべきはかねて思ひしるものから、等閑なりけることの今更口惜しう、心なき賤にも劣り、此秋を何にかまたん、花も實もなき身こそはづかしけれいでいまよりと思へどおくれたりな。

評、流麗婉曲にかゝれたれど結末あまり女々しくてあかぬ心地せらろ。修養するに未だ遲きことかは。

## 地

肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

きよらかなる衣まとひて「年たつ今朝のいと、うたひし少女がやさしき聲音の、いまだ耳をもさりやらぬに、あはれ、なつかしきかをり送りて笑みし梅は、靑葉の間に實を結び、日每〳〵に音づれて、朝いの夢を驚かせしひな鶯は、老の波に聲もさびぬ。野邊の若草は高うなり、まちにし花は、風なきに時ならぬ雪とちりしきて、只若葉のみどりのみ夏まちがほなるは、あしたにありて、夕にちる、大和ますら夫にやたゝふべからむ。かく暮れゆく春のあはれなるにつけても、賴みかたきはうき世のさまになん。花に鳥にとあくがれて、永き春の日をみぢかしとうらみし人は、うすき衣に冬のよざむをかこつの時もありぬべし。あしたに花顏の女も、やがて頭に霜をいたゞき、腰にあずさの弓はるこそなべての習ひなりけり。花さく春は又めぐり來れども、人生の春は二たびある事なからむ。此期をはずさでいそしまずんば、老いてくゆとも其効あらんや。あはれ月に日に開け行く大御代に生れあひて、あまねきみ惠みにうるほふもの、いかで、國恩の萬分の一をも報はでやは。今や桑は芽をふきて、こがひの時をまてり。女の業としては、國の爲はた家の爲に、こよなき事なめり。あるは、奧ふかき學の庭にわけ入りて、業をつみ德を修め、大和の名にはぢで、そを家庭に敎育に及ぼさん事、亦報恩の一なるべき。己れもとより、學淺く萬たらはぬ身の、千々の思の一ふしだになしえぬに、又ゆく春を送るべきか。あゝ櫻はちりていさぎよく名をのこす。おのれはかへり見て身の不省をかなしむのみ。

評、文章あまりたくみならねど、自由に其思想を發展せり。

## 人

東京日本橋區濱町二丁目十二番地　千葉卓子

月日に關守なく、行く水の如しと、古しへの聖のたまへるも、げにことわりなりけり。花鳥の色音にうかれし今年の春も、はやくれちかくなりぬ。あはれおのれの身をかへり見れば、今日まで

の長き日を、なにひとつなしえし事もあらですぎ來つるは、面はづかしさはみにこそ。されど、今さらにいふもかひなし。たゞうたかたのゆめとなして、これよりは心の駒にむちうちて、ひまゆく駒におくれざる様、その心して學びの道を分けゆかばやと、思ひつゞけてなん。

評、簡潔にしてすて難き趣あり。

（以下原稿到着順）

備前　近藤琴雌

雲とながめし櫻の花も、あはれ無情の雨風に、うつろひはてゝ見るかげもなし。彼の愛らしき蝴蝶の羽根も、やゝおとろへて、若葉しげりあふ尾の上の景色も、目さむる心地ぞする。實に夢の世とはこれをやいふらむ。

きのふまでは、そぼふる雨もいとはで、若菜つまんとて、ひれもす野もせにさまよひありき、又ある時は、妹と共に、庭の櫻樹のもとに、女雛などひもときて、樂しく暮らしゝこともありき。霞たつ朝ぼらけ、峰に分けいりて、早わらびを折りたる事もありけり又後ろの菜種の畑に、蝴蝶を追ひまはし、雲井はるかに囀る雲雀の聲、おもしろうききしなど、其うれしくたのしかりしことは、今猶胸にみてり。さるに此こひしき〳〵春の景色は、今やまさに暮んとして、垣根には、早や卯の花さへ咲き出でたれば、ほとゝぎすの初音きかむもほど近うなりぬ。あはれうぐひすは、花のやど失ひたるまゝに、若竹の枝にしばなきて、ひたすら春をよびとめんとするさまのいじらしさ、など胸に浮ぶよしもなき事ども書き付けんと、文机によれば、いつのまに風や吹き入れけむ、硯の水に浮べる花びらの二ッ三ッ、あらき風のしわざとも見ゐず、さすがになかしきふしはあれど、花はちり春は過ぎ行く山里の淋しさ、げに何にかたとへん。

長崎　内藤美與子

惜しめども春の限りの今日もまた夕暮にさへなりにけるかな、と昔人の口ずさみけるもうべなりけり。暮行く時々の惜しきはいつとは分れど、櫻色に深くも染めし心の春の別れは一しほになん。朝な夕な待ち詫びたりし花の盛りに逢へる程は、何となう心浮れていと樂しく遊びくらしけるも、束の間にわりなき風に誘はれて雲とのみふる花に心も消ゆらんやう覺ゐしは幾日許りの跡なりけん、葉櫻に殘る念ひのはてしなきた、床しと聞つる鶯の聲も老いて、散る花をいたみ春の別れを惜しむとて、物悲しげに鳴くも同じ思の憂を添ふるにこそ。春は又來ん春來なば花も咲ぬべし、然はあれど、梓弓春の此日は引かへすべきすべもあらず、あはれ甲斐なきは吾身なりけり。ことわざ繁き世なれば、一時は千ひらの黄金といふをしへ言さへ忘れ果てゝ、徒らに過ぜしほどに、はやこゝらの春秋を重ねきにけり。されば分けいりし文の林はなほ淺く、たどりこし敷島の道に匂へる言の葉もなきぞ憾なる。いや慾り勝ちなりし身も、今よりは文机の前に硯の鞍おき、ふでのむちしてあがき早き隙行駒にも追しかでやはと、心おきてかくん乘り出でぬる。

東京　山本梓子

あすか川流れて早き月日は、今更にいはずもあれ、今年の春も、いとあはたゞしうくれにけりな。藤のゆかりもうつろひゆき、かきの山吹散りかゝりたる、櫻はまして葉隠れの二つ三つ風にしらるなど、いのろさへぞあはれなる。曉がたの月影の、霞も少しうすれたるに、蛙のこゑ醜なるなどあるがなかにも、猶鶯の老聲こそ

心うごかすものにはありけれ。初音待ちしころは、ひゝなにてうぬく〳〵かりしな、梅香り柳もは立より、春の色やう〳〵とゝのほり行ほど、なが聲もいと妙に覺えしか。さるを今は、いとはかなげに古巣恋ひて打わびたる、癖あればおるふるとかや。げに世のことはりも思ひあはされて、かた〴〵心づくしなるにも、秋計り、ひとりあはれなるらむや。木の葉ふり時雨催す空のけしきもいとほしけれど、あはれなつかしげなる春のくれこそ、またいはむかたなけれ。

茨城　篠塚宮代子

見渡す限り野も山も、只青々と緑葉の茂るを見るからに、春の更け行くを覺えて、いと〳〵名殘惜き思ひこそすれ。昨日まで錦色どる梢の雲も、吹かぬ嵐に散り果て、今は浮世のはかなきを、うらめしげなる殘んの花の二つ三つ、あなたこなたに見ゆるのみ。病過にし年彌生の末にみまかりし母人の病の、床に侍りしなり、病み細りし双の腕に動きもやらぬ身を支へ、庭の櫻指して、花の生命と人の條りは野邊の朝露におなじとのたまはれしいと理ある言の葉の、今なほたしかに耳に殘りて、麗なる春の日、梢に棚引く白雲を見るにつけ、知るも知らぬも打集ひ、歡び笑ふ聲を聞くにつけ、一つとして愁き種ならぬはなし。戀しき母人に連れられてこよなき友と花見せしは七年の昔。あはれ越方の悲しく、春毎に何んとなう名殘惜く思はるゝ中に、今年の春の暮は、七周の祭りあひ、一入悲しく名殘の盡きぬ心地なんする。

大阪　桝田釜子

花鳥の色音床しく、糸遊に心ひかれしも、思ひやるべき方ぞなきといへりけん、春の暮とは成にけり。あはれ、麗しく白雲かけし四方の梢、紅深き桃源の林も、いつしか雪と散りはて、黄金と匂ひし菊の花、灰さす色の菫、なつかしげもなくあせ行くのみか、羽袖かろげに戯れし蝴蝶、はたいづちいにけん、長閑き春の心をうたひし雲井の雲雀、芝の雉子は更なり、ゆ種蒔く小田の蛙も聲をかつぎて、岸の山吹うつろふを恨むなるべし。霞こめたる梢は、濃みどりの色をあらはし、朧に見えし有明の月は、山の端に顔をかくし、春雨けぶる遠方のほに、翅しめりて歸る雁の聲かなし。軒の柳はみどり深く、庭の深見草は色淺くなりにたり。たゞ、藤浪のみは、春のゆかりとゞめて夏にやなびくらん。げに五十とせの樂みも、一睡の夢野の蝴蝶にて、こしかたを思へば、花鳥の床しかりし色ねも、糸遊に曳れしもはかなく、あともとゞめず惜にかひなくて、暮行く春の心は、いともあぢきなきや。

花とりのいろ音とゝめず行春も
おなしこてふの手枕のゆめ

東京　近澤愛子

鶯のこゑにねざめて梅をめで、蝴蝶とゝもにうかれつゝ、くろゝもしらで、うたげせし花のさかりもはやすぎて、野べに山べに、あくがれし人のこゝろもしづまり、四方の景色のものさびしさ、秋の夕にもまさりて、そゞろにかなしきこゝちこそすれ。いつしか花染のころもの色あせぬれば、かすみの袖の引とむべくもあらず、池の藤波汀の山吹かきつばたなど、咲おゝるも中〳〵に春の行へのしのばれ、あはれさいはん方なし。さればいまよりは卯の花月夜にほとゝぎすのこゑをこそきかまほしけれ。

福井　田中たちい子

ものゝあはれは秋こそまされと云ひけんしげにさることながら、春の晩つ方も又一しほにこそ。長閑けき春の心より匂ひ出でたる櫻も、咲くと見しまにかつ散りて、青葉のみ茂りまさり、山吹はものさよげに、藤の花のおぼつかなく咲き匂ひて、春の名殘りのみとゞむるは、あはれに悲しき心地せられて、そゞろ涙さへ催さ

れぬ。花の蔭ともおふべき吾が友、さだ子の君の去年の春の末つ方、我等をすてゝ、かへらぬ旅に出で立ち給ひし事を思ひ出し、世の常なきを今初めて知りたるにはあらねど、げに口惜しくなげかはしき至りにこそ。妾此の君を知りしは、明治三十二年やよひ學びやに入りてよりの事にて、君には、慈愛の心深くかつ友情きはめてあつかりしかば、妾を愛し給ふ事斜ならず。わらはも君をしたふこと切なりしかば、あしたに相見るの早きをなげき、夕に別るゝの早きをなげき合ひき。かく互にたのみかはしつゝ、ありし年月もゆめと過ぎ去り、再び歸らぬ黄泉の客と知れるものから、あやしう夢とのみたのまるゝこそはかなけれ。過ぎにしあとをくゆとも、などてかひなき業なれば、いでや是よりはいよゝつとめんはげみて、學びの道の奥深く分け入りて、いつかは、月の桂を手折り、なき君のみこゝろざしをものへばやと、いさゝか思ひのまゝを書きつくるになむ。

神奈川　森田はな子

かすみか雲かとあやしまれつる花も、春雨にいろあせ、夕のあらしに心きよくもちりうせぬ。若葉のみどり、やう／＼ふかくなりゆきて、やがて日かげをへだつるたてともなりなむ、月の光の花ににほひしいろもきね、春の名殘のとゞまらで、うつりゆくこそうたてけれ。秋はあはれふかけれど、なほ春の日かげ小てふのゆめみし、ゆめの間とこそ、またはかなきこゝちせらるれ。

東京　三好珍子

人足繁かりし上野向島も、今ははやかへりみる人だになく、今年の春もやう／＼ふけゆくに、恋の身の年改りてより爲したる事を顧みては、數ふるにもたらぬからに、いとゞひまゆくこまの早さのみ思はれて、今更なげくともいかゞはせん。おなじ心か、暮行く春をいそがはしげに、鳴きさわぐ蛙の聲もをかしう。庭もせには、ゆかり色奥ゆかしう、かけ渡したる藤の花も、何となう覺束なげに、をり／＼音づるゝ風に、一ひら三ひらちりては池水にさゝ波たつるさま、これもくれゆく春のかたみと思はれて、いと哀ともなつかし。雪か白雲かと、めではやしたる山々もいつしか緑とかはり、柴がくれに匂ふ山ざくら、赤きつゝじなど、そこはかとなく見ゐたる、なんとなううれしく、はた遠寺のかれのひゞき渡るに、暮煙低くたなびく頃、むら鳥のねぐらにかへるさまなどは、なか／＼に秋にも劣るまじき淋しさよ。いかに進みゆく世なりとも、月日をのみはとゞむるよしもなく、あだに過行く月日は多けれど、殊に短かく覺ゆるは、花鳥にあくがれ、樂しくゝらす春の日ぞかし。

肥後　佐々有鄰子

雲にまがひし遠近のさくら花ちりはてゝ、山吹躑躅いろあらそひ藤の花さへ紫の雲にひとしく、木末よりしなひながくさきかゝる白藤、花は、岩ほに瀧津いとくりかけてにほへるさま、ゐもいはれぬ詠は寺院のけしきになんありける。そも／＼春たちし朝よりむらぎもの心のどかにうかれいでゝ梅の花笠さしかざし、雲雀の床にては、友とすみれをつみはやして、父母にあつものつくりて供へまつりしも、昨日今日とすぎゆきて、さつきの初めともなりぬ。つら／＼おもへば、わが身の上に春のはじめよりつもりしたのしみ、かされしうきことも、如是昨日の變化にかはることなくむすぶの神のかみつ代よりの、御さだめならんと感ぜしまにまに、暮春の今日の生日にしるしぬ。

東京　太田やへ子

折節の移りかはるこそ物事に哀れなれと、兼好法師がいひけむ言の葉げにさることにて、春も早殘り少なになりぬれば、やがては、あら金の土さへさくなる頃ともなりぬべし。されば、よろづの

物事こひしう思ひ出でられて、捨て難き事こそ多かんめれ。昨日は今日の昔にて、果なくのみぞ過ぎ行く。かくのみ果なく過ぎにすぎ行く世の中に、何するとしもなく明し暮し、生ける限りの世を盡して、徒に苔の下に朽果てなんは、いと口惜しくおもひかひなかるべし。哀れ、われ女子にこそあれ、せめては、何わざにあれ怠なく心入れて、なからん後の世に、朽せぬ名をだに止めましと思ふは一人吾のみかは。あはれ學の道も一わたり卒へぬれば、よく父母に仕へまつり、はた他日人の母となりし際は、家を治め、子等の教へに勉めいそしみ、大君の御恩の萬が一にも報い奉らんと思へば、暮る春も何かは、迎ふる夏も樂しくてまつぞかし。



# 寄書

## 家の寶

清水橋村

金銀珠玉家に滿ち、衣類調度屋に滿てるも、こは家の寶にあらず、之を用ゐるもこれを使はざるも共に益なきものなり。

さらば家の寶は何ぞや、曰く兒なり、夫妻の間の稚子なり、古人曰はずや子寶と。

兒なき家は淋しく、兒ある家は賑ふ。

抑も結婚は子の爲めにするもの、夫妻となりて子を求むるは情なり。

既に母となれば萬の事みな兒の爲めに爲す、父の外に働くも兒の爲めなり、母の家を治めて至らざる無きも兒の爲めなり、己れの糧を減じても、兒の餓ゑざるをねがひ、己れ着る衣なきも兒には着せてその喜びを見むとし、兒笑へば已れまた笑ひ兒泣けば己れまた泣き、兒病めば己れまたやむ、此時母の心は全く兒となるなり。兒あるが爲めに、夫妻の間いよ〳〵堅く、兒あるが爲めに家庭いよいよ和樂す、これ兒は夫妻の間の金鎖なるが故なり、望みある、愛らしき、生ける家の寶なるが故

なり。

されば兒は人に喜びを與へ、樂しみを與へ、希望を與ふ、然れども、また兒は人に苦しみを與へ、歎きを與へ、絶望を與へるなり、これ換へがたき寶なればなり、金銀珠玉の類、之を得んとするを得べし、衣服調度の類、これを調へむとすれば調へらるべし、然れども兒を得んとするも得べからず、調へむとするも調へがたし、げに兒は得難き寶。

これを護り、これを育み、これを大切にせざるべからず、

これを守り、これを育み、これを養ふは二人が義務なれども、專ら之を爲すは母たるものゝ務なり

鷄の曉告ぐる聲に驚き、母の胎より此世に夢さめたるの稚子、三とせ四とせが間は、母が二つの泉にすがり、睡るにつけ、起きるにつけ母の手を煩はさゞるべからず、母また子を育みそだつるは、天賦の職、父は母の兒を養ふ糧を與ふるものなり。

母の子につれなきは、良人につれなきなり、母の兒に愛多きは、やがて良人に愛あるなり、これ子は己れ一人の兒にあらず、又父の子、家の寶なるが故に、

大徳あるもの、家を治むるは安けれど、兒を敎ふることは難し、まして才なく德なきもの、いかに兒の敎育を全し得べき。兒の敎育を全せんとならば、卿等夫妻となる前、妻たり得るや否やを思ふより、兒を敎育し得るや否やを思へ、兒の敎育を全うし得るものならばやがて、妻たる職分を全うし得べし、たゞ貞を以て良人に事へ、德を以て家を治むるのみが妻の職務にあらず、その兒の敎育を全うし、兒を完全の人と成してこそ、全き妻

と云ふべきなり。

卿よ、卿らまづ嫁ぐまへに、妻となり得るやを思ふより、兒を敎へ育み、養ひそだて得るやいなやを思へ。

此心なくして人に嫁ぐなかれ。

孟母は兒を育つるため、三たび家をかへたりと云ふ、母が兒を育つるにはよく己れが身をつゝしみ心を正しうし、そが四邊のものにも眼をとめざる可らず、こは兒の近きところのものに似るが故なり、諺にも曰はずや、氏より育ちと、いかに富貴の家に生れ、名門の子孫に生れたりとも、德もなく才もなく、氣品卑しき乳母や子守女や、下等なる社會のものに養育をまかせ置かば、その子女も亦智識劣りて、氣品いやしく學才もなきものとなるべし、又いかに劣等なる者の子女なりとも、學あり德ある師傅に養育されたらば、氣品高尚なるものとなる。まして己が乳を與へ、おのが育つる兒、しかも己が子なるに、子女の前にいやしき言葉をもちゐ、淫らなる風體をなさば、子女はよきことと思ひて、これを眞似し、つひに救ふべからざるに至るべきなり。

故に母たるものは兒の前に取り亂す勿れ、髪を亂す勿れ、衣服を亂す勿れ、言葉を亂す勿れ、動作を亂す勿れ、此所に亂す勿れと云ふはかざるの謂にあらず、兒を敎ゆるは兒をいつくしむるなり、徒らに愛するはいつくしむ道にあらず。

兒を育つるは母の務めなれど、その育つるてだてについては父と一致するを要す、常に父と計りて敎育と誤まらぬ樣心掛くべし。

世の中の思はあれど子を戀ふる
おもひにまさるおもひ無き哉

と子を思ふの情何ぞ切なる。

破れ窓よりもり來る月の、影も霜夜の裏住居、白くさし入る寒さに肌うすき衣、はかなくくらす人なりとも、子といふ可愛きものありて、あどなく膝にすがりて微笑ふ夫婦の中らひならば、浮世の波の高くとも、苦といふ味を覺えざらむ、かゝる處にわび住ふものゝ、父は子の爲夫のため、不自由あらせじ、憂事のなかれ少しは餘裕もあれかしとて、朝は殘んの月の影をふみて人より早く出て働き、夜は更けわたる鐘の音を聞て家に歸る、母は母として子をもり育つるがうちに、良人の愁らさを分つ爲めの手職業、よし母に才色なくとも家は樂しく暖かく、春の風の靜けさは滿ちみつなり。

まして才あり識ある女子の、生活のうれひなき家に嫁き可愛の子の母たらむには、いかばかりかめでたき團欒の樂しみをや得べき。

あら母よ、稚子をいつくしめ、稚子は卿の金鎖なり、家の寶なり。

子なる俳優、卿の爲めに芝居をなす。

○

子女を鞭打つものは、己れを鞭つなり、良人を鞭つなり。

子女の愛に溺れるものは、己れに溺るゝなり、良人に溺るゝなり。

子女を敎ゆるは己れ習ふなり。

子女を愛するは己れを愛するなり。



# 雜報

●義手足御下賜　皇后陛下には、曩に步兵第五聯隊の雪中行軍大隊に從屬して遭難し、終に手足を切斷するに至りたる將校下士卒を憫然に思召され、今回右の將校下士卒一同へ、義手義足を下し賜ふ旨御沙汰あらせられしとぞ。

●東宮妃殿下御着帶式　仄かに洩れ承る處によれば　東宮妃殿下の御吉事は、來六月下旬なりとの趣なるが、東宮御所にては、本月十五日戊戌の佳辰を以て、御着帶の御式を行はせらるゝ由にて御親戚鷹司公爵より御帶を進せられ、宮中にては賢所大前に於て奉告祭を行はれ、東宮　同妃兩殿下の御代拜あり、猶東宮御所にても、御內宴を催さるゝ御都合なりと。當日は俗に唱ふる戌の日に當れるにより、御產を輕く遊ばされんことを祈り奉る至情より、特に同日を選ばれたるなりといふ。

●英帝へ御贈品　天皇皇后兩陛下より、英國皇帝皇后兩陛下戴冠式の御祝品は、既に勳章と共に軍艦淺間にて御輸送あらせられし趣なるが、其御品は左の如しと。

一刺繡卷物　二卷、　一金高蒔繪御文具　二箇、其他高貴なる美術品、數種

●伊國皇太后の御來遊　伊國皇太后マルゲリタ陛下には、夙に我邦御觀光の思召ありて、近々御來遊あらせらるべしと。

●創立紀念式　去月廿日は、女子大學校創立滿一ヶ年に當りしかば、午前九時より、附屬高等女學校第一回卒業式を兼ね、新築校舍に於て、創立紀念式を開きたり。來賓には、大隈伯爵、辻新次、岡部子爵、元良博士、江原素六氏等朝野の名士數十名にて、卒業生八十余名に免狀を授與し、成瀨校長の訓話其他諸氏の演說ありて非常に盛大なりき。

●女子文學會　神田區小川町一番地に新設の同會は、一般女子教育の隆盛につれて、入會者頗る多しといふ會長は木村博士、顧問は井上、小杉兩博士にして講師には井上賴圀(枕草子)尾上文學士(三鏡)大川茂雄(文學史、制度)吉丸文學士(十訓抄、女子風俗史)藤井節子(作文)小杉博士(有職源語)佐々木信綱(古今集)南茂樹(文典)新村文學士(言語學)木村博士(萬葉)畔柳文學士(文學研究法)法等の諸氏なりといふ。

●家事講習會　神田小川町一、女子文學會內に新設の同科は、入會者既に定員に達せしも、大教場を得たれば、此際尚若干名の入會を許すといふ。講師は女子高等師範教授松本文學士(兒童教育)同教授佐方鎭子(衣食住、家事教授法)同教授谷田部順子(裁縫教授法)同教授岩川理學士其他學士數名なるよし。

●東京音樂學校官費生　同校にては、本月甲種師範科に官費生男女三十名を募集するよし。入學志望者の年齡は滿十七年上にして、師範學校中學校若しくは高等女學校卒業者、又は之に同等以上の學力あるを要するものにして、之に合格したる者には三ヶ月間假に入學せしめ資性品行及び學業を考察し適當と認むる者に限り、三十名を選拔して本入學を許し、在學中每月學資として六圓乃

至八圓を支給するの規定なるが、願書差出期日は東京在住者は四月三十日、地方は五月十日限りにて、同月十五日より三日間入學試驗を執行すべしとぞ。

●・・・・・・・・大隈伯の女子教育意見　女子の高等教育に關しては、絶對の贊成者なり。然れども、之に一の憂ふべきもののあるを認む。其は他に非ず乃ち高等教育を受けたる結果、唯智育のみ進みて、物識又は藝人となる是あり。婦女子は、天性上別段智識の涵養を主とせずとも、自然に相當の進境に入り得るものなれば、余は德育と體育とに重きを措かんことを希望して止まず、體育の必要あるは勿論一般の既に知了する所なれば、呶々言を用せず、德育は一重重大の問題にして、世の學者、教育家の苦心する所なるが、余の考にては、常識以外の德育は、女子の涵養上害ありて益なく、殊に乾燥無味なる宗教趣味を含有する德育法の如きは、大なる害毒を施すものと確信す。故に余は女子に對する高等教育の第一義は、常識以內の德育を重しとし、體育之に次ぎ、智育の如きは最下に措く可きものと思考す。此調子にて女子を涵養せば遂に圓滿なる結果を收むべきを信じて疑はず云々といへりとぞ。

●・・・・・感ずべき生徒　香川縣丸龜市富屋町武內竹藏の長女ウメ子(十四)といふは目下丸龜市立高等小學校第四年生なるが、尋常小學四年の時より父の生業を助け、寒さ暑さも更に意とせず、朝未明牀を出で丶繊弱き腕に數十軒へ牛乳を配達し、家に歸れば朝餉の仕度、扨ては拭き掃除をなし、夫れより日課の下讀みして通學すること爰に五年、一日の如く立ち働く態賞するに餘りあり、慥に生徒の龜鑑たるべきを以て、同校長吉田喜代治氏は

ヰメ子の善行を表彰せんとて、此の程善行證を附與したりといふ。

●柴野氏の篤行　柴野氏名はキミ子、安藝國佐伯郡の人なり。若うして夫に別かれ、寡居節を守つて精勵怠らずひたすら遺子を敎養し、家名を興すを以て、己れの任となす、偶ま卿國有識の士、相寄つて、修道館と稱する學生合宿所を設け、風氣を振作せんとするの企てあり。夫人に請ふて、其の館媼たらしむ、夫人旣に館に居るや、勤儉力行、家政の事、嘗つて他人を煩はさず、爾來十年一日の如く館生をして融々和樂、恰もなつかしき父母の膝下に在るが如き思ひあらしめ、同館今日の隆盛に貢献する所少なからず。去れば、據きに止むなき事故ありて、一旦館を退くに至るや、同館生は、深く其の行を徳とし、心こめたる送別の會を設け、感謝狀に、帛一匹を添えて、同夫人に呈せりと云ふ。己れを潔うして、又た人の爲めに盡くす。夫人の如きは、眞に篤行の人と云ふべきなり。今ま其の感謝狀を得たれば、左に掲ぐ。

柴野館媼に奉るの詞

心つくしの秋風に、遊子の衣やうく寒う覺ゆるを、としごろ日頃、伯母君と呼びて吾等が敬ひいつくしみし館媼の君は、まこと、やむことなき事情ありて、終に吾館を去り玉ふことゝはなりぬ。思へば、きのふけふ、彌生ヶ岡の道芝の、いとゞ露けきも、あはれ、故なくてやは。

をよび折りつゝ、數ふれば、君を初めて吾館にむかへしは、往ぬる明治二十七年の頃なりしとよ。當時吾館の基礎未だ定かならず、内資に乏うして、外絶ゑて助けなく、西に移り、東に轉じ、あるは寺院の一隅に據り、あるは市井の矮屋を借りなどして、やうくに氣息をつなぎつゝありしものから、其の不自由さ、なかくに、今より憶ひ及ぶべくもあらず。館の先輩達も、此の折を呼んでは常に吾館の冬籠の時なりしとさへ、云はる程なるを、館媼の君は、此の難局に當たりて、つゆ挑み玉ふことなく、僕婢さへ備はで、身みづから堅氷を踏んで、薪水の勞を取り、苦熱を煩はで、調理の勸めをいそしみ玉ひて、館生をして、和樂融々、身の他鄕にあるを忘れしめ給ひし其の績、はた何とかたゝはまつるべき。げに彌生ヶ岡の上、吾館の長閑けき

春にめぐりあひしもの、固より先輩諸氏の勞によること多しとは云へ半ば是れ、館姆の君の賜とも云ふべからずや。

かくて、館生の數やう〳〵增し行くにつけては、云ひ知らぬ心つくしの數々も、あまたありけんものを、七年の久しき、さながら一日の如く、終始吾館の爲めに碎き玉ひし赤心は、是ぞ吾館の歷史を飾る、香ゆかしき一ひらの花にぞある。

あはれ、一樹の蔭に宿るも、尙多少の緣はありとか聞き侍るを、歲久しう屋を共にし、かまどを全うせし吾等館生の、むべも誠の伯母君に離るゝ心地し侍ることよ● 館姆の君、はた、眞の甥に分かるゝ思し玉はでや。

げに、けふより後ち、永く、伯母君を忍び奉らんものは、とはにつきせぬ、この歷史の花あるのみ。伯母君眞心に酬い奉らんものはひたすらに勤め勵みて、一日も早く、業成り、名遂げんことあるのみ。さはれ、只だ、けふの別れのかたみにとて、吾等が打衍りて、捧げまつるこの衣、彌生ヶ岡の千草の露に深くそめにし、このきぬのいとながう、花の晨、月の夕、彌生ヶ岡の舊狀を、忍ぶつてともなし玉ひてよ。あなかしこ。

月　　日

修道館館生總代

永　井　潛

因に云ふ、修道館は、舊藝藩學生の合宿所にして



目下本鄕彌生町三番地に在り。館生の數、常に五十に滿ち、自治制度の下に、百事整頓して、信州の長善館等と、相並らんで都下有數の青年合宿所なりと云ふ。

●金魚の相場●●●●　現今の處にては昨年と一昨年のものを賣買するのみに過ぎざれど、其相場は二歲のまるこ百尾一圓位　和金百尾三十錢より二圓位迄、流金百尾五十錢より四圓位まで、鯉百尾三十錢位、同二寸位のものにて百尾四十五錢位、三歲まるこなれば中等物にても三尾三圓位の價なり。和金百尾三圓より十圓位まで、流金百尾六圓より二十圓位まで、以上のものは普通の物にて、上等物となれば孰れもまるこにて、當歲は八圓より十五六圓まで、優等の物となれば三十五六圓より五十圓、其上は物次第にて數百圓の價格を有するものさへあり、一歲毎に十分の三を增すものなりと

いふ。

●土佐紙の起因　同國の製紙起因は遠く醍醐天皇の朝以前にありと云ふ。降て天正の初年長曾我部元親の爲めに誅せられたる蘇我清宗の寡婦に養甫と號する尼ありけり、此の養甫尼土佐郡成山村に卜居し、七種の色紙を製出せり是れ修善寺紙の始めにて、後ち山内家の入國に際し、尼此の色紙を貢せしに、山内氏之れを嘉みし、田地及び成山村の惣伐畑を賞賜せられ、尼の子々孫々に至るまで土佐紙品改め役を勤めたり。慶長年間山内家は楮苗を栽培し、各種の紙を製せしむ。今を距ること百九十年前即ち寶永年間に及んで、播摩屋九郎右衛門、掛川屋喜三兵衛、磐田屋彌左衛門等民間の資産家は資を投じて各所に製紙場を設け、諸官衙及び寺院等の需要に應せしが、月を重ね年を追ふて紙の需要は盛んとなり、供給常に不足を告るを以て、山内家は遂に紙方役所を置き、巨萬の公金を擲ち、大に斯業奬勵に努めたる爲め、製紙は土佐一國に廣がり、爾後年々德川將軍家に納め、大にその嘉賞を受け、土佐紙の名は全國に普及するに至れり。維新後は更らに大に京阪間に販路を開き、同時に吾川郡伊野町吉井源太氏は、東奔西走一意製紙の改良を圖るや、全縣下の同業者皆な之れに倣ひ、伊野町を始めとして高岡郡高岡村、長岡郡國府村、吾川郡卓谷村等は起業最も盛んに、その產出甚だ多く、同縣經濟の基礎は將さに之に依つて確立せんとするに至りぬ。物盛んなれば、又た衰ふるの理にて同縣の製紙が一時斯かる盛況に赴きたる結果は、玆に粗製濫造の弊を生じ漸やく佳境に入らんとせしコッピー紙海外輸出の途が、明治二十五年頃殆んど杜絶の非運に陷りたり。斯業家の恐慌一方ならず、翕然として改良

の機運を喚び、コッピー紙製造は固より、一般製紙に向つて取締規則を制定し、之れと同時に明治二十九年五月土佐紙業組合を組織したり。該組合區域は、同縣一市七郡に亘り、人員は製造家及び紙商人約一萬人に及べり。此の中に特に檢査員を置き、數量不足紙の汚穢粗惡破損等を檢査し、且つ巡廻敎師を置きて各工塲を巡廻敎授し、その成蹟を組合員に報道するの外、五六名の敎師は常に他府縣を巡視し、斯業收良の材料を取調べ、且つ同組合顧問たる工學士中山高吉氏は、米國紐育及ウーリンに出張し、西洋紙製造法を取調べ中なれば、同縣下の製紙業は、將來益有望の地に進みつゝあり。今ま同縣最近の統計に據れば、土佐紙數量は二十四萬二百六十九にして、その價額は、三百四十九萬二百二十四圓なりと。

●**本年蠶絲豫想**　昨春に於ける我養蠶、製糸業は一昨年生糸の海外賣行不況なりしと、當時金融逼迫して利子上りたるとの爲め、多少手控えなる姿ありしが、新糸以來其直段こそ珍高直を現はさざれ、賣行は至極圓滑にして、製糸家の如きは相應の好收益あり、今日となりては今少しく成繭ありたらんには一層宜かりしならんと一般に感ずる程なれば、隨つて各養蠶地の人氣は、本年こそ出來得る限り繭を出さんと意氣込み、製糸家亦多額の養蠶を慫慂して已まざる有樣なりと。其資金も昨年に比して槪して七八厘方の低步に使用するの利益あれば、旁々氣候にして適順ならんには、繭收獲高は昨年に比し多額に上るべき豫想充分なりと云ふ。尤も例年昨年に至れば、養蠶地方の銀行より直接若くは、間接に京濱の銀行へ資金の融通內約を申來ることあるに、本年は各地とも金融緩和し居る丈けに、弗々申込みあるもその半額にも

達せざる程にて、生糸問屋への申込みも、昨年に比しては六七分見當なりと云ふ。

## ●端午の節句

さくらはいつしか散りうせて、梢の青葉うら涼しく、ゆく水は空しく流れて、雨に情の涙なし。三春の行樂すでに盡きぬれば夏衣着かへつべき時も早程近うなりぬ。さても遊子が夢やいかにさ迷ふらむとひとりはゝゑまれつ。藤、牡丹、菖蒲とりどりにをかしきものから、曉近う時鳥の忍び音になきいでたらんも風雅男の鼻うごめかす種ならむかし。

ひたすらに垂籠めて春の行方を知らぬ間に、幼き稚子が廻らぬがちに、端午よ節句よと驚かせば、さすがに其かみの忍ばれて、とし頃書いつけたる一ふしをぬきいでゝ、かくあむ。

五月五日　端午(又重五)といへり。端は初也。一月の中に、五の日三つある、その初めの日にあれば。然かいへる者なりとぞ。午は五と通ずれども、なほ五と書かむぞ正しかるべきと、さるもの識は教へられき。ある書に、宗璟が八月の表に、「月惟仲秋日在㆓端午㆒」あれば、端午とはあながち五月にのみ限るべからず、何れの月にても、五日をばかく稱すべしと論らはれたれど、我邦にては專ら五月五日をのみ端午とはいふめれ。あをによし奈良の都の頃より、池の藤波咲きおゝり其ゆかりの色忍ばるゝ平安朝、新奇を好み、唐風にかぶれし時代なりければ、雲の上人を初め、あまたの閨秀才媛に至るまで、こちたき漢土の故事をまねびて思ひあがるも多かり。されば、衣服調度は、さらなり、神代よりいと嚴かなりし朝廷の儀式にさへ、さすがに唐風のいたくうち交りけむよ。そ

れより後は、さま〲に變化して、興廢また常ならず、今もなほ行はるゝものあり、また其遺風にやと思はるゝも少なからず、左に往昔に於ける風習の一般を記せば、

●粽　粽を製して食へば、災厄を免るゝとて、糯米鶩などを財料に用ゐ、其種類に菰ちまき、艾粽、飾粽、餡粽などかず〲あれども、要するに茅にて卷く故にこの名あり。京都にては、鞍馬山の奥より出る隈篠の若葉を以て團子をつゝみ、藺に卷き甑に入れて蒸し、之を篠粽といひ、大阪其他の田舍にては葦または菰にて卷く。武家にては、柏の葉にて包み柏餅と稱して専らこれを用ゐたり。すべて其葉の香り團子に移りて味ひよきが故也。粽の形をば蛇に似せ、これを食ひ、腹中の毒蟲を殺すといふ迷信を表せり。いま其起原を考ふるに、其說多けれども、昔楚の大夫屈原讒におひ



て放たれ、五月五日汨羅に身を投げて死にければ楚人大に哀み、この日にあたる每に、竹に米を貯へて、水に入れて是を祭れり。漢の武帝の時、長沙の歐回といふ人海濱を通りしに、あやしき人現れて三閭大夫と稱し、回に曰く、われ每年祭らるゝは甚だ喜ぶに堪へたり。されど蛟龍の爲に常に横奪せらる。今後楝葉を其上にふさぎ、五彩の糸にて縛るべし。此二物は蛟龍の畏るゝ所なりと、あるぞ眞に近からむ乎。

●菖蒲　夫木集に「澤水に衛士のおもひしあやめ艸きみがうてなに祝ひふくらむ」と經信が歌ひけむ如く、主殿寮の官人菖蒲を宮殿の軒端にさし藥玉を絲所より奉る、女房などは皆菖蒲のさし櫛をし、唐衣、かざみなどに、長き根、或はをかしき枝折を、むら濃の組糸にて結びつけたり。みな邪氣を避くるの法なりとぞ。俗間にても菖蒲、蓬にて

屋を葺く事宮中に異ならず、ことに菖蒲にて太刀又は兜を飾り、人形などを作れり。この人形は力士を模したるもの多く、元祿の頃は、江戸市中を賣りあるきしと云ふ。

さて菖蒲の珍重せらるゝ事この上なく、聖武天皇の御宇には之の鬘を蒙らざるものは宮中に入るを禁じたまひし程にて、朝服にも菖蒲鬘といへるあり。俗間にては、その浴衣帷衣など必ず家々に備へたりき。なを之を酒にひたして呑む時は一切の邪氣を拂ひ、また之を煮出して浴すれば百病を去るといひならはせり。所謂蘭湯に浴し芳草に沐すといふ類ひなるべし。且つ藥狩とて、皆野邊にいで、一切の藥草を摘み、これを日蔭ぼしにして貯へ置けば、金瘡血どめ等に特功ありとて熾に行はれたりき。

●飾　男兒のある家々には幟を立て、弓鐵砲長刀などの武器或は武將の人形を飾れり。是を俗に男の節句と稱し、專ら男兒の翫びとす。もと男は、一旦事あれば、打物とつて戰陣に望むものなればたとひ、太平無事の時なりとも、その鑑戒として飾るなり。されば初めは男兒のある家のみに限られたるが、次第に流例となりて一般に行はるゝに至りし也。

●印地打　昔京都の兒童柳の木刀を腰に横へ、頭巾を着し、いかめしく山伏のさまに粧ひ、夕暮に及び、鴨川の邊に集り、左右二隊に分れて礫をうち合ひ、かたみにせめぎ戰ふ。また地上に線を畫して前の木刀にて渡り合ひ、相手を追つて其境に侵入するを善とし、負けて退くを卑怯とす。印地の名は即ちこゝに基けり。されど遂には、大人も混同して甚しきは眞劍の勝負をなし、殺傷少からざりしかば、寛文年中之を停止せられしが、近頃

まで猶この蠻風の殘りし地方もありしとかや。以上の外五人囃、競馬など種々の風習遊樂あれども、煩はしければ省きぬ。畢竟五節句のうちに數へられ、古より盛なる娯樂ありて、今も其風衰へず。あはれ諸媛はいかにこの日を過し給ふらむ。

（吾水生識す）

●夏物の價格●●●●　團扇は本年不景氣の爲め問屋向にて製造を差控へたれば新形もの少なく其中に販路最も廣きは吾妻形と京形にて前者は稍や長圓形にて柄短く粋なり後者は丸形にて柄長く高尚なり絹製は上流の一部に止まり一般に紙、麻・寒冷紗張の物へ花鳥山水の模樣彩色又は墨繪にて丸の塗柄　生地の平柄及び紀州の葦、五靈杉等の柄を附したるが柄元を絹絲にて編たるは廢り模樣も片面の淡泊したるを喜ぶ、相場は京形挿柄の上等百本十圓以上二十圓、次物五圓より十圓、玉子形切出し五圓五十錢以上十圓内外、普通二本組三圓五十錢内外より十圓迄其他並物は二圓以上なり。外國向は薄絹製及び生紙にて本邦名勝古跡を墨繪に現し、竹の磨柄又青紅の漆塗の柄に銀金具を附し房は桃色藤色、紅白等の美くしきを添ふ此價一本十五錢より一圓位なり、次に遊園扇廢りて水團扇流行し名古屋産の安物三錢より七八錢並物十錢より二十五錢迄あり、扇子は男女とも洋裝和裝を問はず是を携帶するの要あれば追々發達し、近年は平骨流行し、加賀物名古屋物と稱する服紗扇を始め、洋服用の小形殿中と稱するもの賣行最もよく價は七八錢より十五錢位、又踊扇は細骨の好み多しと。次に蚊帳の新相場は巽麻四六にて丈五尺五寸のもの六圓四十六錢、六尺のもの七圓五十錢五六にて十圓二三十錢、紡績麻は四六にて三圓以上四圓五六十錢止り、此分最も流行にて本麻を壓

する勢はひあり。又木綿蚊帳は五六にて八十錢以上、六八にて一圓二三十錢、八十にて二圓位の取引なるが母衣蚊帳其他は別段の差もなし

家具の中二三年來内外人に好評を得たるは竹製の寢臺なり靑拔きの靑竹又は埼玉產の黑竹にて長さ一間巾二尺七八寸に編上げ、首脚の兩方を高くし臺脚は一尺以上一尺五六寸にして中央は臺灣產のタゴにて張詰めたれば身體に觸れて剛からず、代價は七圓より十圓位なり、又竹の衝立も煤竹及び黑竹にて屛風形に製せしもの體裁よく衣桁代りに便なるが凡そ二圓以上五圓迄なり。夫れより前裁などの涼臺に近來大流行の竹製椽臺は半間物七八十錢より一間物一圓五六十錢なり是等の竹細工は外見美にして且つ淸潔なれば宮内省及び各外國公使館等より多く注文ありといふ。

# 口繪の說明

●●●●●

●華族女學校　本校は麹町區永田町にして赤坂門内にあり。畏くも　皇后陛下の令旨に基き、華族のために建てられたる女學校にして、宮内省の直轄に屬せり。敎育の趣旨は彝倫を本とし、智識を發達せしめ、高尙なる性情を養成するとともに身體を强壯ならしめ、以て上流の賢母良妻たるべき者を陶冶するにあり。其生徒は、年齡滿六年以上滿十八年以下の華族の子女なれども、時として、士族平民の入學をも許可せらるゝ事あり。敎科を大別して、小學科、中學科の二つとす、前者は初等の普通學課を授け後者はやゝ高等なる普通學課を授く。其修業年限は、全科通じて十二年を要し、なほ一層高等なる學科を修めむとする者にはある學科を專攻せしめ、また、普通學課を修むる

暇なきものには、別科を設けて二三の科目を教ふ。現任校長は細川潤次郎氏にして、學監は下田歌子女史なり。校舍壯大設備完全にして、凡そ五百名の生徒を養成しつゝありとぞ。

●東京女學館　本館は、我邦女子の德性を涵養し、かねて必須の學藝を授くるを目的とし、敎科は普通高等特別の三に分たれ、普通科は高等女學校に等しく、修業年限を五ヶ年とし、高等科は普通科を卒へて高等なる學問を修めんとする者を入るゝ所、其修業年限を二ヶ年とす。特別科は既に人に嫁ぎまたは他の事情にて、定まりたる時間に出席する事能はざるものゝ爲めに設けたる也。凡そ年齡十二年以上にして高等小學二年を終へたるものは直に第一年級に編入し、第二年級に入學せんとする者は學力を檢定して其採否を決せり。また寄宿舍の設けありて嚴重に生徒を監督し、此外若し生徒にして父兄及び相當なる監督者の許に居住せざるものをば入學せしめざる規定ありと。現に土方久元氏其校長にして、校舍は虎の門内良好の位置を占め、殆ど三百名の生徒ありといへり。

●落葉籠、都合によりて休載す。



受付ノ一

第二號
五月一日
發行

定價一冊
郵税共
金十二錢

『教育公報』は曰く（從來の婦人雜誌の多くは、何所迄も保守的なりしが今同白鳳社より出でし女界は從來の陳套を脱して、内容に外形に最も進歩せるを見る殊に趣味教育に務めむとするらしきは最も悦ばしきこと也これらは女子の好伴侶好師友なるべきか）云々然り現代に於て最も進歩せる女學雜誌我『女界』は常に專門大家の筆より成りて趣味深し。左の第二號要目を見よ。

▲口繪揷畫女子美術學校教授磯野吉雄▲論說坪井博士▲家庭嘉悅孝子磯部武者五郎龜井牧子有住常子井上善兵衞岡野をりえ▲をさな兒記者矢橋小葩▲學藝天野博士井上ドクトル宇野文學士吉丸文學士相馬文學士等▲文苑尾上文學士淸水橋村手呂淸春三木天遊野口雨情佐々木信綱國分操子矢橋小葩星野麥人佐藤紅綠松田竹嶼岡本春陵勝家貞文等▲談叢岡野知十友成貞松田竹嶼高橋文六吉丸文學士▲小說荒木鷲泉堀寒城▲其他婦人文學には才媛の詩歌文章をあつめ海外雜俎には外國の珍聞奇談を掲ぐ

附錄　女子美術展覽會評（記者淸水橋村）

發行所　神田區駿河臺西紅梅町六番地　白鳳社

松岡常盤子題歌
石井泰次郎著

卷中挿畫
精巧木版
五十餘圖

美装
全一冊
正價金六拾錢
郵税金六錢

# 婚禮の式のこゝろへ

## 附 嫁入心得

口畫
山内侯爵家婚儀調度の圖（大判コロタイプ版）
小笠原家婚禮式の圖（寫眞銅版）

著者石井先生は禁中禮式、武家禮式、及び近世の俗用禮式に到る迄凡そ禮節の事として通曉せさるなきは天下の知る所なり近時禮法の桙に上るもの頗る夥多なりと雖も婚禮式を詳述せるものなし會々禮法書の卷尾に附しあるも悉く用ゆべからざるもの丶みなるを歎じ學說以外に貴族的にも平民的にも輕重共に實地に應用せらるゝを主眼として

（目次大要）

結納の次第○音物飾樣○目錄認樣○使者心得○使者馳走○目錄受取認樣○里方心得○媒人諸心得○荷物送り並受取樣○里出祝○本酌加へ役心得○神前供床飾樣○長仲鉋銚子瓶子飾樣○島臺押臺用意○婚式要用道具○料理人の事○嫁入途中並着の心得○式三献三々九度盃仕樣○色直盃仕樣○親子盃仕樣○兄弟盃仕樣○座敷客居主居着座心得○婚禮當日惣體の献立○結盃仕樣○嫁土產披露○三日目皆子餅飾樣○里開聟入心得○婚禮一通包物拵方の圖等

百九十二條に別て委細を詳述せられたり實に我國唯一の婚禮書なるのみならず直に實用に供し得る無比の良書なれば家々必ず備ふべき至大の寶典なり又禮法を學習せらるゝ貴媛諸嬢は禮節の參考として必ず一讀を要すべき良書なり

發行所 東京市日本橋區通二丁目 嵩山房 小林新兵衛

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

第五版

# 女子處世論

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵夯代用一割增

三輪田女史の婦人教育に於ける薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや九版を重ねこゝに十版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を說く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者座右一日も缺く可らざる良書たり本書亦版を重ねて五版に至る冀くは世の婦女子達及父兄幷に女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の一讀を望むや切也、其の目次の大略を左に掲げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

## 目次



發行所　東京築地二丁目　株式會社國光社出版部

賣捌元　本郷一丁目五番地　電話ﾎ局三一四五　國光書房

近衛篤麿公　題辭
西村茂樹翁　　　小川東陽著

# 女子訓典

定價金二十五錢
郵稅金四錢
郵夯代用一割增

貝原翁の女大學事古く福澤翁の新女大學亦理に過ぎて實際今日の婦女子の品性を陶冶するに適せず著者大に此處に見る處あり此度教育勅語の旨趣に基き女子訓典一冊を著はす實に婦人界の一大燈光高等女學校生徒並に高等小學女生徒諸姉の家庭用書となし及び教師父兄諸君の參考書として至極適當の書あり

賣捌書店　東京市日本橋區通參丁目六　林平次郎

賣捌書林　東京市日本橋區通二丁目　小林新兵衛

四版

紅塵庵俗禪譯

清鳳秀美高優節雅

# 國の譽 獄の花

神彩清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尚優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀表の下に最清廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇驚高尚なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が清淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一齣悦然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

彩色優美口繪挿繪入
總クロース新版美本
金文字入全一冊
正價金五拾錢
郵稅金八錢

再版

伯爵副島種臣題字　堀内文麿編

# 家庭の鑑

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれど皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むか如く身恰其地にありて其境に臨める感あり世の教育家父兄及子弟婦妻の座右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦た此種の冊子を備へざる可らず、

菊版美本全一冊
定價金拾八錢
郵稅金四錢
郵券代用一割增

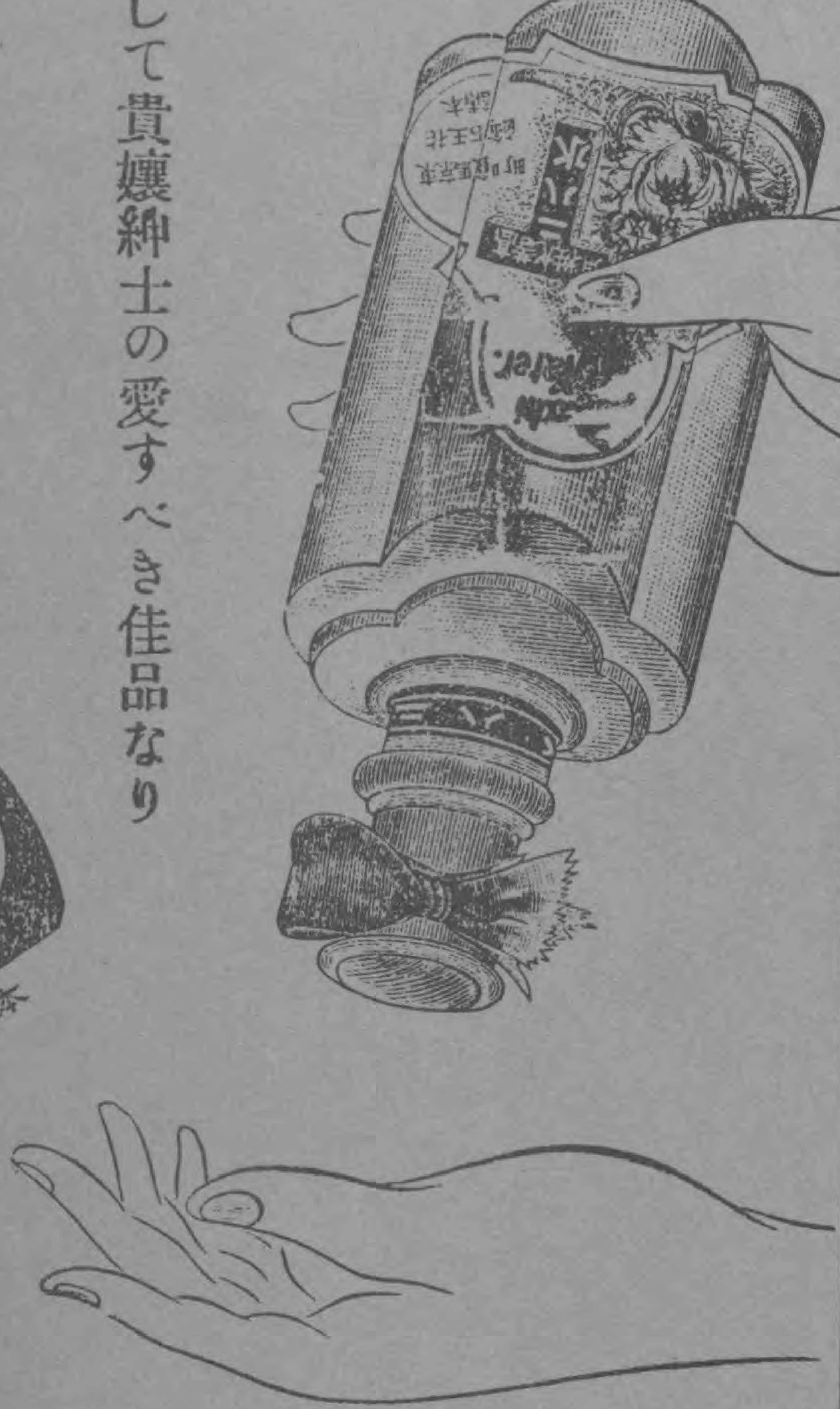
發行所　東京築地貳丁目　國光社出版部

女鑑

明治三十五年五月五日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百五拾貳號　明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可


二八水は肌を白くきめをよくつやをだしにきび●あせも●肌のあれ●おしろい下に用ゐて尤もよろし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり



# 花王石鹸

品質善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

●賣捌所ハ全國到ル所ニアリ




發賣本舗

東京馬喰町二丁目　長瀨富郎　（特電話 浪花九二二）